

# 古代インディオ文明における育児習俗と教育

——先スペイン期アステカ族教育関係史料集——

(課題番号 05610239)

平成6年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書

平成7年3月

研究代表者 齊藤泰雄

(国立教育研究所 国際研究・協力部 主任研究官)



## はしがき

私は、比較教育学の研究者として、メキシコを中心としたラテンアメリカ諸国の教育の現状と改革動向を分析することを主たる研究課題としているが、そのかたわらに個人的関心として、かなり前から、アステカ、マヤ、インカなどこの地域のかつての古代インディオ文明に興味をひかれてきた。もちろん、当初は、メキシコなどで観光のスポットして訪れたピラミッドや神殿の遺跡をみての驚きや、またときおりテレビの紀行番組や一般向けの本で紹介される「失われた謎の文明」、「神秘の文明」にたいする好奇心から出発したものであったが、ほそぼそとながら関連した文献を読みすすめるうち、とくに自分の専門分野である教育という領域においても、これらのインディオ文明は、かなり独特な教育の思想と制度、習慣をもっていたことを知るにいたった。

とりわけ、14、15世紀にメキシコ中央部にアステカ王国とも帝国ともいわれる広大な地域を支配し、その首都テノチティラン（現在のメキシコ市）を中心に、スペイン人たちをも驚嘆させるほどの独特な都市文明を築きあげていたアステカ族は、すでにかなり高度に組織化された教育の制度をもっていた。たとえば、著名なフランス人のアステカ文明研究者ジャック・スーステルは、その教育について記述し、「この時代、この大陸で、アメリカのインディオ社会が、すべての者への義務教育を実施しており、16世紀のメヒカ人（アステカ人）の子どもで学校にいなかったものがただの一人もいなかったことは驚嘆すべきことである」とまで言っている。事実、アステカ社会では、階級や性別ごとに子弟のための独自の教育機関が準備されており、全体としてみればほぼ義務教育といっているほどの完備した教育制度をそなえていた。きびしい心身の鍛錬や過酷な体罰をとまなう宗教的軍事的色彩の濃いその育児習俗や教育伝統は、有名な古代ギリシアのスパルタのそれを想起させるものである。わたしは、ひそかに「アメリカのもうひとつのスパルタ教育」とよんでいる。

いつかはこうした古代インディオ文明における教育を教育史研究の対象として位置づけ、また現代的な教育学の視点から分析してみたいというのが私の希望である。だが、これまでわが国においてはこうした教育の史実そのものがほとんど知られていないこともあり、まず必要なことは、ほぼ五百年前のアステカ族の教育について、現在のところ、なにが、どこまで明らかにされているのか、こうした教育の実像を再構成するための信頼しうる歴史的資料としてどのようなものがあるのか、を整理してみることであると考えた。

こうした観点から、本報告書では、まずアステカ族の教育の全体像、その人間観、教育観を概観するために、メキシコの教育史の本のなかから「アステカ族の教育」を記述した部分を紹介する。この本は、メキシコの師範学校用教育史教科書として編集されたものであり、今日のメキシコにおいて、自国の教育史のルーツのひとつともいえるアステカ族の教育の遺産がどのように認識されており、通史的なメキシコ教育史のなかにどのように位置づけられているかを知るうえでも興味ぶかいものがある。

つぎに、メキシコ国立自治大学の歴史・人類学教授ロペス・アウスティン博士が編集し

た、『古代アステカ教育関係史料集』(López Austin A., La Educación de los Antiguos Nahuas 1, 2, 1985)の主要部分を翻訳、紹介する。この史料集は、16世紀初頭の征服、植民地化の初期の段階において、まだそれほど破壊されていないインディオ文明に直接的に接触したスペイン人たちがその文明について書きしるした記録や書簡、さらにインディオたち自身が書き残した資料(アステカ族の独特な記録法である絵文書、インディオ言語のローマ字表記やスペイン語習得によるみずからの歴史の記録)など膨大な資料のなかから、当時のインディオの教育に関連する記述部分をひろいだして集成したものであり、アステカ族の教育に関する一次史料に直接的かつ効率的にアクセスするのにきわめて有用なものである。しかしながら原典資料のほとんどは、16世紀のスペイン人の聖職者の手によるものであり、その記述や表現方法には現代スペイン語とは異なる古文的な要素がかなりみられ、その翻訳は私にとっていささか荷の重すぎる苦心の作業であった。

また、ここでは、アステカ文化と生活の全体像を簡潔にとらえるためのハンディなガイドとして、スペインの歴史学者のマヌエラ・ルセナの著した小著『アステカ族の日常生活』(Manuel Lucena, Así vivían los aztecas: Vida Cotidiana, ANAYA 1992)の主要部分をあわせて翻訳、紹介しておく。

拙論「ラテンアメリカ教育史の原像」においても指摘しているように、征服の直後から、スペイン王室は、この地においてインディオたちをキリスト教に改宗させ、またスペイン文化に同化させるために——いわゆる「魂の征服」をめざして——大規模な教育事業を展開することになる。それは、先スペイン期のインディオ社会にすでに組み込まれていた組織的な教育の伝統、制度をいち早く発見し、また被征服者インディオたちの示した高い学習能力と規律とに驚いたスペイン人聖職者たちが、むしろその教育的伝統を積極的に利用し転用して、それをスペイン人にとって好都合な教育に仕立てあげるという側面をもっていた。このために、古代インディオ文明における土着の教育伝統は、植民地時代の教育制度との断絶と連続性という視点からも注目されるのである。

#### <研究経費>

平成5年度	800千円
平成6年度	500千円
計	1300千円

#### <研究発表>

- ・ 齊藤泰雄 「ラテンアメリカ教育史の原像」  
国立教育研究所『研究集録』第28号 1994年3月
- ・ 齊藤泰雄 「先スペイン期インディオ文明の教育史的研究の可能性」(口頭発表)  
教育史学会 第37回大会(於 山形大学) 1993年10月5日

研究代表者 齊藤泰雄(国立教育研究所 国際研究・協力部 主任研究官)

## 目 次

はしがき

I.	アステカの日常生活	1
II.	メヒカ族の教育	27
III.	ロペス・アウスティン（編）『アステカ教育関係史料集』	45
	1. メンドーサ絵文書の図版	46
	2. 子どもの養育と教育論（ヘロニモ・デ・メンディエッタ）	64
	3. 神殿に捧げられた若者たち（ディエゴ・ドゥラン）	79
	4. 神殿＝学校での生活（ベルナルディーノ・サアグン）	90
	5. 征服の前と後（ベルナルディーノ・デ・サアグン）	105
	関係文献一覧	114

# I. アステカ族の日常生活

マヌエル・ルセナ

(アルカラ・デ・エナレス大学)

## アステカ文明

アステカ族は先スペイン期のアメリカにおいてもっとも文明化された民族のひとつであった。その文明は、14、15世紀の間、メキシコの中央部に発展したが、それが展開した軍事的征服はメキシコの南部全域をカバーする巨大な帝国の形成を可能にした。アステカ文明は、実際的に、もうひとつの偉大な文明であるマヤ文明圏とせっていた。スペイン人はその領土と首都を1519年に発見し、その発展した文化にせって驚嘆した、というのもその時までアメリカにおいて同様のものを見ることはなかったからである。大きな都市、発達した社会組織、想像もできないような富、豪華な宮殿、等々。あるひとりのスペイン人兵士は、はじめて目にした帝国の首都、テノチティトランの様子を、なにか現実的なものとも思えない、まるで冒険小説の中にでてくる幻想そのもののようである、と述べている。

アステカ族は、実際には偉大な文明の創造者というわけではなく、それに先だつ多くの民族の文明の優れた継承者であった。アステカ文明は、九千年の長きにわたってメキシコの地において発展してきた文明を統合する役割をはたした。このことから、彼らをアメリカにおけるローマ人として考えることもできよう。

すべての偉大な文明と同じように、アステカ族は人類にその遺産を残した。その産物、事物、植物、動物は、今日、彼らが話していた言葉ナワトル語に由来する名前で、世界中の言葉において知られている。すなわちトマト(tomatl)、チョコレート(xococatl)、ウーレ(ゴムの木ollli)、ベタテ(ごぞpetatl)、アグアカテ(アボガドaguacatl)、チレ(chilli)、オセロット(oceotl)、カカウエテ(ビーナッツ cacahuatl)などである。

## 1. 鷲と蛇の民

アステカ族の歴史は、西暦で言えば、この民族が今日メキシコの首都の中心地区の一部となっているチャプルテペックの地に着いた1299年にはじまる。かれらがどこから流れてきたかについては誰も正確には知らないが、アステカ族につたわる伝承はかれらが北部から来たことを想像させる。この「北」というのは今日でいうアメリカ合衆国の南部にあたり、そこは乾燥した不毛地帯であり、そこからはまたアステカ族と同系統の言語(ナワトル語)をもった別のメソアメリカの民族であるトルテカ族、チチメカ族も移住してきた。これらの民族はすべて同じ理由から移住してきた。それは食料資源の不足であった。

伝承によれば、アステカ族はひどい飢餓状態にあり、かれらの信奉するウィツロポチトリと呼ばれる戦いの神が、ハチドリ(その羽音は人間の声のようにも聞こえる)の姿となって現れ、彼らに向かって「移民せよ」を意味するTíuiと言ったという。何処へ。さらば

南に向かって。別の神話によれば、ウチワサボテンの木の上に一羽の鷺がとまって蛇をむさぼり食べているのが見られる場所まで移動せよ告げたという。

その時から、長年にわたる、おそらく一世紀におよぶ長期の放浪生活がはじまった。よい場所を見つけ出し、トウモロコシを栽培するために、婦女子や老人も含めた部族全体が移動する必要があった。収穫が低下しはじめると、仲間によびかけその土地をはなれて再び移動するという生活をくり返す。こうして、じょじょに、アメリカ合衆国の南部、メキシコの北部を通り、チャプルテペックに到着し、そこですばらしい場所を見いだした。そこは標高2,200 呎に位置する巨大な盆地であり、年間を通じて常春の気候に恵まれていた。その盆地は死火山によって取り囲まれ、その冠雪した頂上は、標高5,000 呎の高さにそびえ立っていた。山頂から豊かな水がもたらされ、それは五つの大きな湖をもった盆地に流れ込んでいた。盆地の土地は農業に適しきわめて肥沃であった。その天国のような場所にはひとつだけ重大な問題があった。そこにはすでに多くの都市があり、その住民は、アステカ族のような新参の粗野な侵入者にたいし敵意をもってむかえたことであった。

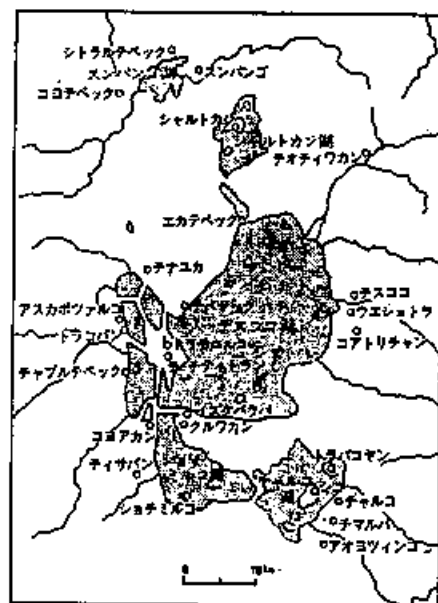
アステカ族は先住の民族とくらべてきわめて文明度が低く、できることといたたらただ一つ、すなわちほかの都市の傭兵としての役務を提供しうるだけであった。都市クルウアカンの領主が、かれらを兵士として雇うことを契約し、住むための場所を提供した。そこはティサパンと呼ばれたが、毒蛇がうようよいたために人の住まない場所であった。アステカ族はその蛇を食料として食べた。そのうわさは野蛮人という悪評をいっそう高めた。かれらはそこにしばらくの間居ついた。1323年に、かれらはクルウアカンの王の娘を殺害するという誤りを犯し、そのためにその領土から追放されることとなった。ふたたび盆地一帯を放浪し、ようやくテシュココ湖に浮かぶ不毛の小島に難をのがれ、そこで部族の守護神がかれらに託宣していたシンボルに出くわすこととなった。すなわち、ウチワサボテンにとまった一羽の鷺が蛇を食べている姿であった。それは不可欠な三つの要素を象徴的に代表するものであった。すなわち、土地(サボテン)、大気(鷺)、水(蛇)である。こうして、1325年にそこに都市の建設がはじめられた。それはすでにかれらが自らを識別するために使用していた地名にちなんでテノチカの都、すなわちテノチティトランと命名された。テノチティトランは、今日スペイン語圏における最大の都市である現在のメキシコシティのオリジンであり、鷺、蛇、ウチワサボテンの組み合わせは、メキシコの国家の紋章とされている。

アステカ族は盆地のほかの民族と接触しはじめ、その都市は拠点にしていた小島全体を占有するようになり、やがて島の外まで勢力をのばしはじめた。1338年にすぐ近くの島に一つの新しい都市、トラテロルコを建設した。時間がたつとともに、テノチティトランとトラテロルコは一体のものとなり、一つの巨大な都市を形成するようになった。そこではスペイン人の到着時には、人口30万人ほどの住民が生活することができたと推定されている。1367年、クルウアカンの領主の息子であるアカマピチトリを、そのトラトアニすなわち王としてむかえ入れ、かれがアステカを統治するようになった。この王は、かれらの長く続く王室の最初の人物となった。盆地の覇権をめぐる戦いにおいて、アスカボツァルコ

市がクルウアカン市をうち敗り、アステカ族はその支配下に入れられ、それへの貢納者となった。あたらしい支配者たちのくびきを逃れるために、アステカ族の王イツコアトルが他の二つの隣接の都市、テシュココとトラコパンと同盟を結ぶことを決めたはこの時であった。それは1426年のことであった。同盟軍はアスカポツァルコからの独立をかちとり、さらに重要なことは、その領土の大部分を奪いとったことである。その時以降、一連の戦争で勝利することとなり、その結果、盆地一帯での覇権を確立したのみならず、つづいてずっと遠くの地方の他の民族までも征服することになった。



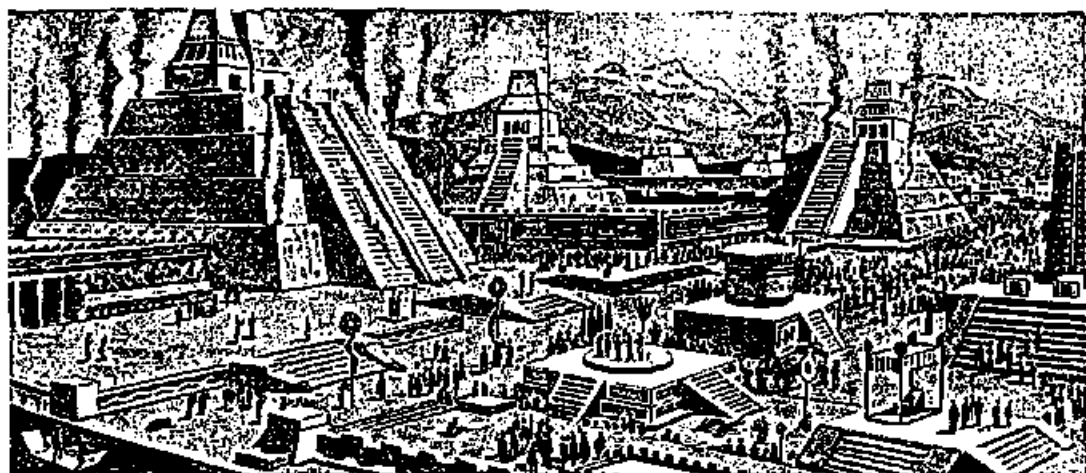
アステカ帝国の勢力範囲 1519年



アステカ帝国の都市中心図

1440年、モテクソーマ・イルウイカミナ王が選出されると、かれは、社会的、政治的、行政的、宗教的な大改革をおこなった。その軍隊は、メキシコの南東部をテペヤカックまで征服した。その後を継いだのは甥のアシャヤカトル(1469-1481年)であり、かれは姉妹都市であるトラテロルコを併合した。この後をティソック王(1481-1486年)が継承した。かれは征服戦争をあまり好まず、まさにそのために毒殺されたとされている。この後アウイソトル(1486-1502年)が即位し、かれは、南部の領土をテウアンテペック地峡まで征服し、またテノチティトランを美しい都につくりかえた。最後に、1502年、モテクソーマ・ソコヨツィン王(モテクソーマ二世)が選出された。この人物こそスペイン人が出会い、モクテスマと呼んだ王であった。王室と貴族の権威の強化のために大きなはたらきをした。モテクソーマは、1519年にエルナン・コルテスの率いるスペイン人侵入者をテノチティトランに迎え入れ、翌年死亡した。モテクソーマ二世の後を継承したのは彼の弟のクイトラウアックであり、彼は有名な「悲しみの夜」の戦いにおいてスペイン人をテノチティトランから追いだしたが、そのすこし後に疫病で死亡した。アステカ族の最後の王はクアウテモックであり、彼はスペイン軍の包囲に対して英雄的な抵抗をこころみた後、1521年に首都を放棄する屈辱を味あわねばならなかった。こうしてアステカ族の支配は終わりをむかえた。クアウテモックは1524年にコルテスによって斬首された。

## 2. 都市：テノチティトラン、アステカ族のベニス



アステカ文化のセンターとなったメキシコ盆地のさまざまな都市（テシュココ、クルウアカン、アスカボツァルコ、カウティトラン、等々）の中にあっても、首都はずば抜けていた。それはテノチティトランとその双子の都市であるトラテロルコによって形成された巨大な都市であった。両者は、小さな堀によって隔てられ、一つの橋によって結合されていた。それらはテシュココ湖の中のいくつかの小島の上に築かれており、そのためにそこにはカヌーか三本の堤道（それぞれ対岸のイスタパラパ、トラコパン、テペックと結ばれていた）によって渡らねばならなかった。堤道の一部分には、木製の橋がわたしてあり、その下をカヌーが通行した。このためにそれは征服することがのきわめて困難なひとつの要塞都市となっていた。テシュココ湖の水は塩水であったので、アステカ族は対岸のチャプルテペックから5 帯におよぶ水道橋を通じて水をはこんだ。モテクソーマー世の治世の時代に建設され、一本を清掃中でも常にもう一本は使用できるようにと二本の水路がつけられていた。アウイソトルはコヨアカンからもう一本の水道橋をひいたが、巨大な洪水によって使用を放棄せざるをえなかった。

テノチティトランとトラテロルコは、それをとり囲む水を十分に利用しており、チナンパすなわち浮島（い草使って作り、それを水底に綱で固定し、その上に土を盛った）を長く帯のように繋いでいた。それらが沈みかけるとさらにその上に土を盛り、ついには本当の人工島を形成することとなった。チナンパは野菜や花の栽培に最適で生産力の高いものであった。

このようにアステカの首都はまさに水の都ベニスを思わせるものであった。水路や掘り割りが縦横にはしり、カヌーがその中を速やかにゆききしていた。テノチティトランにはまた、小島の上に建設された堅固な土の道路といく本かの土の路肩と小さな水路をあわせもった歩道があった。都市は、住宅地区と数多くの宮殿や神殿をもち、堂々たる景観をそなえていたに違いない。スペイン人兵士ベルナル・ディアスは、トラテロルコで最も高



い建物の一つの上からその様子を眺望した様子を描いており、それは当時のヨーロッパ人に刻みつけられた印象をわれわれに伝えている。

--- そしてそこからわれわれは眺めていた。なぜならその大きな呪われた寺院はすべてを威圧するほどに高く、そこからメヒコに入る三本の堤道を見た、--- チャブルテペックから飲用水をはこぶ水道橋も見た、また食糧をはこび、荷物や商品を積んだたくさんのカヌーがひしめきあうその大きな湖を見た。またその大きな都市の家並みや、対岸の湖に面したその他の都市を見た。家から家へと木製の跳ね橋を伝って、あるいはカヌーでわたる様子を。---

#### 〔食糧補給と都市の清掃〕

この都市は、すべての大都市と同じように、二つの重大な問題に直面していた。食糧の補給と清掃の問題である。前者は、カヌーによって行われた。それは食糧を市場にをはこんだ。アステカ族は荷物ををはこぶ家畜を所有していなかったことを考慮に入れる必要がある。インカ族が利用した動物リャマさえもここにはいなかった。そのためにカヌーなしでは住民に食糧を調達することがきわめて困難であった。トラテロルコの市場は最大のものであり、同じベルナル・ディアスによれば、スペイン人たちはそれを見た時にびっくり仰天したと述べている。おびただしい数の人々がそこにはいた。

---ある者は買い、ある者は売り、そこから出るかけ声やざわめき声は、一レグアも離れたところまでとどいた。われわれの中には、コンスタンチノーブルやイタリア全土、ローマと世界中のいろいろなところに行った経験をもつ兵士もいたが、これほどまでに平穏で、調和がとれ、規模が大きく、またこれほどの人出のあるところは見たことがないと言っていた。

その兵士は、そこではあらゆるものが取り引きされていると証言している。トウモロコシ、マメ類、カカオ、さまざまな種類の果実、七面鳥、ウサギ、野ウサギ、織物、調理した料理、木材、紙、銀、貴石、羽根、奴隷、サンダル、ジャガーやカワウソの皮、医療用や芳香用の薬草、タバコ、ナイフ、等々。その巨大な市場は六万人までの売り買いの人々を収容できるといわれ、それは十分にありうると思われる。商人（ポチテカ）の代表者が議長をつとめる12人の判事が、詐欺や商業上のクレームの取り締まりを行い、また多数の警吏（トピル）がつねに取引の公正さを監視していた。通常の交渉の形態は、物々交換であるが、また、きわめて貴重なものとして扱われていたカカオの実がお金として使用された。

疫病を予防する唯一の方策であった都市の衛生は、大部分がその都市の地理的な条件によって確保された。汚水処理するための良好なシステムが存在しており、それを湖に排出した。多くの公共の場所には、い草で編んだフタをかぶせた便所や、排便のための係留したカヌーがあった。道路を清掃し、ゴミを郊外に運び、湿地帯に埋めることを業務とす

る清掃サービスがあった。なによりも自然条件そのものが最良の清潔を保たせることに都合がよかった。その場所は、高地ゆえのさわやかな気候と汚れを流し去る定期的な降雨に恵まれていた。

#### 〔モニュメント〕

首都は多くの公共的な建物で美しく飾られていた。宮殿、球技場、学校、神殿、蒸し風呂、等々。二つの都市の記念碑的建物は中央広場を取り巻いていた。テノチティトランのそれは、スペイン人たちが建設した国立宮殿やカテドラルのある現在のソカロ、憲法広場のところにあった。アステカの時代には、そこは対岸から延びる三本の堤道が交差する地点にあたり、中央広場は、縦横350 呎、300 呎の長方形をなしていた。広場の一方は、大きな水路に面し、もう一方は、大きな公共的、宗教的な建物によって固められていた。その中でも異彩をはなっていたのは、スペインの侵入の直前の1487年に完成された巨大なクー、すなわち神殿であった。四層ないし五層の（この点で考古学者の間で議論がある）ひとときわきわだつ巨大なピラミッドを形成していた。その高さは30呎あり、基壇は、縦横100 呎、80呎の長方形であった。正面部には二連の階段があった。その113 ないし114 段（この点でも考古学者の意見がことなる）のステップを昇り頂上のテラスにいたる。そこには一方は戦いの神ウイツロボチトリを、もう一方は雨の神トラロックを祭った二つの木造の神殿があった。またそこにはいけにえの石台が置かれ、そこでは犠牲者が横たえられ心臓を取りだされた。死体はその後に階段をころがして、広場からそのを眺めていた群衆の前に投げだされた。

階段の前には、もうひとつのケツアルコアトル神に捧げられた円形の神殿があり、するどい牙をもった蛇の口の形をした扉を通じてそれに入ることができた。後方には、戦士像によって囲まれた球技場があった。その側には、ツォンパントリすなわち頭蓋骨の祭壇、人身御供となった者の頭蓋骨をさして並べた木の櫓があった。大神殿の両側には、別の二つのやや規模の小さい祭壇があり、階段の前にはさらに四つの祭壇があった。球技場の北には、カルメカク、すなわち聖職者の学校があり、南には、シベの神殿、太陽の神殿があった。おびただしい石の彫刻がこの地域を装飾していた。それらの中には、有名なアステカの暦があった。それは18世紀に発掘され、今日メキシコ国立人類学博物館に展示してある。それは直径4 呎の巨大な石の円盤であり、そこには四つのすでに滅び去った太陽に囲まれた第五番目の太陽の暦が彫刻されている。

ともかく、テノチティトランで最も印象にのこるものは、その住民、さまざまな仕事で行き来するおびただしい男女、役人、戦士、聖職者、職人、商人、農民、等々であったにちがいない。

### 3. 家、宮殿、公園

#### 〔住居〕

アステカ族は、さまざまなタイプの家に住んでいた。住居のかたちは、その場所や異な

る気候条件のちがいによって、またその住人の状況によってさまざまであった。漁民の住んでいたテノチティトランの周辺部では家はアシとワラで作られた。市の中心部では石造りであった。

民衆の住居は、湿気を遮断するための石の基壇の上に干乾しレンガで、あるいは日乾しレンガと石の組み合わせで作られた。正方形のかたちをもち、各部屋は一つの大きな中庭の周囲に配置された。中庭には花が植えられ、あるいは家畜として、犬と七面鳥が飼われた。部屋数は少なかった。一つの寝室、台所、小さな蒸風呂、そして祭壇である。家族がひどく貧しい場合には、一つの部屋ですべてを兼ねていた。しかしながら、住居は、ひとつ庇の下で、分けられていることが一般的であった。家族の数に増えるにつれて、部屋の数を増やしていった。男女別の二つの寝室があることもそうめずらしいことではなかった。窓はなかったので、光や外気は戸口から入ることになる、そこにはい草で編んだドアがついていた。天井は丸太の梁でつくられ、その上に泥のしっくい塗られた。大部分の家は、湖につながる水路に面しており、家の戸口にカヌーを留めておいた。メキシコ高地の気候は、年間を通じてきわめて温和で安定しており、暖房の設備は不必要であった。すこし涼しくなる夜には、かまどのそばで温まるだけで十分であった。裕福な家では、いくつかの火鉢が使われ、そこでは芳香のする木が燃やされた。それは大きなぜいたく感を味あわせるものであった。

家の中心は台所であり、そこで料理がなされ食事が行われた。そこには炎をおおい、料理のための土器を支える三つの石で作られたかまどがあった。昼夜をとわず、常に火がおこされていた。「世紀」（われわれの年では52年毎）の変わり目の時は例外であった。その時には、世界の終焉の到来の恐れを前にして、町中のかまどの火が消された。かまどのそばには、壺、料理のための土器、トウモロコシを磨り潰すための石の道具メタテがあった。これは溶岩で作られた大きなお盆のようなもので、そこで石の臼によってトウモロコシの実がひきつぶされ粉にされる。この粉はパンのようにして、トルタ、パイを作るのに利用される。トウモロコシを挽きつぶすことは、アステカ族のすべての女性が朝起きて最初におこなう日常的な仕事であった。

家具類はきわめて少なかった。ベッドはなく、椅子やテーブルもほとんどなかった。アステカはペタトルとよばれるゴザを土間にひいて寝て、マントや綿の毛布を掛けた。起きると、マントをたたみ、ゴザをまるめたので、部屋は別の目的に使うことができた。日用の腰かけは、ワラのクッションであった。料理さえ、しゃがんだままで、包丁でつくった。かわりに、いくつかのい草あるいは木で作られたトランクがあり、女性はここに衣類や貴石などの貴重品を保管していた。住居に機織り道具があることはまれであった。家に見られるその他のものは、コアすなわち畑を耕し種をまくための棒などの仕事の道具類、するどい刃をもった黒曜石のナイフ、武器等々であった。

#### 〔宮殿と庭園〕

要人や王トラトアニの宮殿は、民衆の家屋と同じような構造をもっていたが、その規模や質ははるかにまさっていた。多くの中庭——しばしば高さの異なる——、数多い部屋、

それらはいずれもずっと広い間取りであった。それらは、寝室、事務室、武器保管庫、後宮、客間など特定の目的別に使用された。

花や芳香の放つ植物が、あちこちに豊富に植えられた。というのもアステカの人々は、それらをきわめて愛好したからであり、高地のさわやかな気候は花の栽培に適しており、それは貴族たちの間で好まれた娯楽であった。各都市の王たちは、りっぱな植物園や動物園をもっていた。テシュココ市のネサワルコヨトル王のそれは、多くの種類の魚類を集めた養魚池、きれいな水が回流する用水堀、浴場、鳥類舎、大きな動物園をもっていて有名であった。歴史家ベルナルド・アルバ・イシュトリショチトリ（スペイン人とアステカ人貴族女性との間に生まれた混血の息子）は、その『チチメカ史』において、テッコツィンコの庭園には、養魚池があり水路によって水が流れ出て「いくつかの岩の上に水が飛びちり、あらゆる南方産の芳香のある花の咲く庭に流れこみ、あたかも、岩の上に注ぐ水がたてる轟音が降雨のように聞こえた」、「この森には、さまざまな樹木、芳香のする花が植えられ、その間をさまざまな地方から集めた多くの鳥がカゴに入れられることなく飛び回り、人々の聞いたこともないハーモニーや歌を奏でていた」と書いている。

宮殿の家具類は庶民のそれよりはるかに豊かであった。要人たちは、短い足と高い背もたれをもった木または植物のせんいで作られた座イスを使用し、それによってあぐらをかいたかたちで座った。

#### 4. 社会的な義務

##### 〔社会階層〕

アステカ社会は、その部族の起源に由来する平等主義的社会組織と、1426年以来行われてきた征服戦争の成果である階級的組織の混合したものとなっていた。部族的組織の遺産は、カルプーリの社会制度であった。それはすべての自由市民が帰属する一種の同族組織であった。テノチティトランのすべての土地は、そこに存在した20のカルプーリに帰属していた。階級組織は、貴族制の存在に反映されている。それはアツカポツァルコ市を打ち破り、その時に戦功あった兵士に土地をわけ与えたイツコアトルの王政以来のテノチティトランの王朝によって強化されてきた。その時以来、貴族と平民は、土地の所有と貢納の支払いという点で、ますます大きく分化することとなった。ある程度の社会的移動はあった、というのも平民でも功績によって貴族に昇進することが可能であったからである。権力の構造において貴族と同列におかれた聖職者においても、時として、特殊な才能あるいは宗教的情熱をもつ貧しい若者をその列に加えることがあった。社会の過程は、貴族制社会の形成と、王の絶対的權威の強化にむけての途上にあった。それらはともにスペイン人の征服によって完成にいたることはなかったが。

支配者グループは、トラトアニ（「雄弁家」を意味する言葉である＝王）によって率いられ、トラトニアは、現実的にそれぞれの都市の政治的、軍事的、宗教的指導者であった。それらの中でも最大の権力をもっていたテノチティトランのトラトアニは、ウェイ・トラ

トラトアニ、すなわち「偉大な雄弁家」と呼ばれた。この職責は、選挙によるものであったが、つねに統治している王朝に属するひとりの人物（死去したトラトアニの甥、兄弟、孫、息子、従兄弟など）が就任した。選挙は、トラトカン、すなわち審議会が行った。それには貴族、高官、軍人、聖職者の各勢力が代表を送っていた。ウェイ・トラトアニは、その特殊な衣装を身につけた。緑色（アステカ族の間では王のみに許された色）のマント、金とトルコ石でできた三角の王冠、緑の貴石の装身具、蛇の形をした王杖。そして華美と贅をつくしたものととりまかれて大きな宮殿に住んだ。（スペイン人が対面した）モテクソーマ二世はその姿が神格化され、宮殿においては神秘的な儀式が執り行なわれていた。ウェイ・トラトアニは、他の人間のように地上に立つことはなく、御輿で運ばれねばならず、それから下りる時には絨毯が敷きつめられねばならなかった。一夫多妻制であり、多くの女性を入れた後宮をもち、無数の衣装を持っていた、というのも一日に何度も衣装を変えたからである。かれの御前にでる者は、視線と頭を下げながら、裸足ですすみ出なければならなかった。さらに、よりむずかしいのは王の前を立ち去る時であった、というのにもかれに背を向けることはできなかったからである。最大限のお辞儀をしながら後退しなければならなかった。権力をうやまうスペイン人たちにとって、かれは威厳にみちた、立派な人物であった。

ウェイ・トラトアニとともにその統治の仕事を補佐する他の重臣たちがいた。それらは、シウアルコアトル、四人の軍事的指導者、トラトカンの助言者たちであった。シウコアトルは、一種の副王であり、偉大な王が、戦争あるいはその他のなんらかの理由で都市を離れた時にその代行をした。彼は白と黒のマントを身につけて人目につき、そしてほぼ常に王の緑のマントのそばにひかえていた。

ウェイ・トラトアニの下に、トラトケ（トラトアニの複数形）がおり、各々の都市を支配していた。彼らは同じように一夫多妻制で、華美な廷臣に取り巻かれて宮殿に住んだ。その中でも、三国同盟においてテノチティランと同盟を結んでいたテシュココとトラコパンの王は重要な地位にあった。メキシコ盆地の残りの都市の王がそれにつづき、そして最後に、服従した都市の王たちがいた。すべてのトラトケは、君臨していた王朝の中から選出され、その家系は血縁による貴族制を形成していたが、選出はつねにウェイ・トラトアニの意向にそうものでなければならなかった。

この下に、テテクツィンすわなち論功による貴族がいた。彼らは顕著な功績によってその称号を取得し、土地と耕作者を所有する権利をもっていた。彼が死ぬとその土地は新たに分配されたが（アステカ族の過去の社会制度のなごり）、その息子に渡されることもしばしばであり、それは世襲の貴族制を生み出しつつあった。

ピピルツィンすなわちトラトケとテテクツィンの息子たちが支配階層の最後のグループを形成していた。彼らに相当するものをヨーロッパ社会に見出すことはむずかしい。彼らは下級貴族ではなく、その王室にきわめて忠実であった。主として、統治組織にポストを占め、外交官、判事、貢納の徴収使などについた。世襲の土地を所有し、自分たちの仕事をおこなう一方でかれらのために働く小作人を持っていた。ピリ（ピピルツィンの単数

形)は特別の服装をし、貴族の学校で教育を受け、平民とは異なる法廷で判決を受ける権利を持っていた。

被支配グループは、主に平民(マセワリ)によって構成されていた。彼らが社会の階層を上昇することはきわめて難しかった。すべてのマセウアルツィン(マセワリの複数形)は古い血族の組織であり一種の地域共同体として生きのびていたカルプーリに帰属していた。カルプーリは、彼にたいして、一つの家、生活のための耕地、子弟を教育するための学校、戦闘のための一部隊、そして仕事まで提供した。この見返りとして、かれは引退の年である52歳までカルプーリの共有の土地をみんなといっしょに耕作せねばならなかった。その収穫をもってすべての組織が維持され、貢納がまかなわれ、寡婦や傷病者が世話された。カルプーリは長老会議によって運営された。

最下層には、財産とマセワリの条件を剥奪された者たちがいた。かれらは戦争で領地を失った外部の者か、カルプーリを追放された不名誉なアステカ族であった。荷物運びをしたり、要人の土地ではたらくかして生計を立てていた。最後に、奴隷トラトラコツィンがいた。かれらは外部の者あるいはアステカ人であった。前者は、通常は貢納の支払いのためそうなのである。後者は、一般に、多くの負債をかかえ、それを支払うことができず、償いとして自分の身体をさしだした者であった。生まれながらの奴隷はおらず、トラトラコツィンの子どもはつねに自由人であった。

#### 〔家族〕

アステカ社会はきわめて厳格であり、それを律する道徳的規範をきびしく監視していた、とういのも、過去に何度か生じたように、既存の秩序の崩壊は、神々の怒りとこの世の終焉をもたらすと考えられたからである。結合の単位は家族であり、それは夫婦(貴族のみが一夫多妻であった)と12歳以下の子どもで構成されていた。男の子が思春期にたつるとカルプーリの学校に入った。道徳は、女子が結婚前に性的な関係をもつことを禁じており、男子にもそうしたことをつつしむように諭していた。父親が息子に与えた忠告の一つはつぎのようなものであった。

まるで食べ物にとびつく犬のように女子にまとわりついてはならない、神殿の前で女子をひやかすような、与えられたものをがつがつ食べたり飲んだりする犬のようなマネをするな。たとえ女性に誘惑を感じるがあっても、つつしめ、完璧かつたくましい人間になる日までおまえの心に打ち勝て。

男子が20歳、女子が16歳になると結婚が許される。両親(若者自身ではなく)が自分の息子のために適当な相手をさがしだした。相手の家との交渉にあたる媒酌人と契約がなされる。しかるべき家の娘の両親は、まず一回目の申し込みにはノーと答え、二回目を受け入れるのがよいとされた。ひとたび受諾がえられると、娘の親は、結婚が可能かどうかを相談するために神官のもとを訪ね、宗教用の暦によって、両人の誕生日の暦の相性が良いか、少なくとも悪くないことを調べてもらった。もしすべてが問題ないとなれば、そのつ

ぎは、息子の学校の教師の承認を得るために、かれを食事に招待し、なんらかの贈り物をして歓待する。その許しが得られると、再び神官たずね、暦から吉日にえらんで婚礼の日取りをとり決める。

婚礼の三日前になると、娘の家庭では、親戚、友人、招待する有力者（少なくともカルプーリの役職者など）などの列席するぜいたくな饗宴の用意をするためにいそがしくなる。結婚式の当日は、娘の家で、お昼に、ぜいたくな食事がふるまわれ、つづいて、既婚の女性たちが贈り物をおこなった。午後は、新婦は衣装を着て、顔を黄色にぬり、胸には赤い羽飾りの胸あてを身につけた。家族に歓迎の意をしめすために来訪した新郎側の長老の親族たちにプレゼントが贈られた。夜には、親族たちが行列をつくって新婦を嫁入り先の家までとどけ、踊り歌いながらそこに入る。新郎新婦がゴザの上に座り、娘の母親が新郎に、新郎の母親が新婦に衣服を贈った。つぎに、婚約者たちのマントとブラウスが結びつけられ、これが夫婦になったしるしとされた。

婚礼の最初の行動は、相互にタマーレスの料理を食べあうことであった。この後、夫婦は、婚礼の部屋に入り、ここで4日間の貞潔と祈りの日をすごさねばならない。5日目に、儀礼的な沐浴の後に、神官があらわれ結婚を祝福する。この日をもって婚礼が終了することになる。

アステカの家庭はきわめて安定したものであった。離婚も存在してはいたが、それはきわめて稀であった。法律は、離婚した二人が再び結びつこうとすることを厳しく罰していた。不倫は、石打ちの刑で罰せられた。

## 5. 教育

アステカ文明の特色のひとつは、子どもの教育をきわめて重視したことである。このため、テノチティトランの君主であるモテクソーマー一世とその重臣トラカエルは、すべてのカルプーリに学校を設立して、義務教育を命令した。実際に、アステカ社会においては、すべての者が、隣人たちを教育することに使命をもつと信じられていた。両親はその子弟を、長老たちは親たちを、神官は市民を、国王はすべての臣下を教育するというように。ウエイ・トラトアニは、いつでも統治のプログラムとして一連の道徳的目的を提示しながらその治世を開始した。

最初の教育者はいつでも両親であった。かれらの息子たちに、土地を耕作すること、狩猟、漁労などを教え、娘たちには、料理、清掃、機織りなどを教えた。良い習慣に反するような行動をとった時にはきびしく罰をあたえ、かれらが模範的な市民となるように、常に良い助言を与えながら教え諭した。父親から息子にたいする忠告が、メンディエッタ修道士の記録によってわれわれに伝わっている。

息子よ、老人、病人、不具者を嘲笑してはならない—— 他人を傷つけてはならない、悪い模範となるな、しゃべりすぎるな、他人の発言をさえぎってはならない、

----年長者より先に入っても出でもならない、むしろ、かれらが望むところに座ったり立ったりしなさい、かれらの利益をまず先にして、かれらを尊敬しなさい。年長者より先に発言してはいけない、かれらの前を横切ってはいけない、----他人がまず箸をつけるまで食べてはいけない、おまえが最初になってはいけない、----だれかがおまえに話かける時には、息子よ、足や手を揺らしてはいけない、それは理性の足りないしるしだからである。

またひとりの長老から結婚した息子への助言も今日に伝わっている。

おまえの妻と家にじゅうぶんに気を配り、親類たちを招いて慰めることに務めよ。  
----愛し、慈悲をもて、傲慢になることなかれ、他人を苦しめるな、----傷つけるな、なにか悪いことをするな、自分がしてほしいことをせよ、それを鼻にかけてはいけない、なぜなら神々にそむくことになるからである。----放浪者となるな、悪だくみで金をもうけるな、ひとところに身を落ち着ちつかせよ、耕作し収穫せよ、おまえが死んでも妻や子どもたちが路頭に迷うことがないような家を築け。

年長者は、世の中すべてにたいして、とくに子どもにたいして教訓をおしめなくあたえる権利を有していた。つづいて食事の仕方についてのかれらがあたえた忠告の例をみてみよう。

----あまりにあわてて食べるな、あまりに早く食べるな、パンに大口でかぶりつくな、ノドに詰まらせることのないように口に食べ物を入れすぎな、犬のように飲み込んだりするな----パンをこまかくちぎるな、それが皿にあるときはひたくるな、そこにいる人々に笑われることのないように落ち着いて食事をするように。

貴族の子弟は、両親によって直接的に教えをうけることはなかった、というのも、その親たちは、支配的グループとして、いそがしくてかれらの世話をやくひまがなかったからである。かれらのために話し方や優雅な態度を教える専門の教育者がいた。ムニョス・カマルゴの記録は、われわれに子どもたちが通うその教室の例を残している。「(子どもたちは)地面に座り込むことなく、先生を見つめることなく、視線を上げることもなく、ツバを吐くことなく、体をゆらすことなく、顔を見ることなく、膝をおってしゃがみこんでいた」。

〔学校〕

15歳になると若者は、カルプーリの学校で教育された。それはテルポチカリとよばれ、寄宿制で行われた。各カルプーリは、それぞれ独自の学校と教師を持っていた。ここで、正しい話し方、洗練された礼儀作法、歌、踊り、戦闘術が教えられた。この最後のものはアステカ族にとって不可欠のものであった。教育は、さらに若者の身体と精神を鍛えて、



かれらを勇猛かつ従順にさせることを意図していた。薪を集め、学校を清掃し、溝や水路を補修し、共同の農地を耕作することがかれらの義務とされた。一日の日課が終わると、真夜中までつづく大きなダンスの催しが開かれ、その後にベッド、すなわち寝ござに入った。

貴族の息子たちは、より選りぬかれた教育をうけた。かれらは民衆のための学校であるテルポチカリにではなく、カルメカクとよばれる神殿内の学校に入学した。そこにおいて聖職者と貴族の同盟関係がよりいっそう強化された。神官たちは、生徒の中から自分たちの後継者を見つけだすかわりに、貴族たちに自分たちが独占している知識を伝達することに同意していた。おおくのピピルティンが聖職者になるためにそこにとどまった。全体的に、貴族はこれらのカルメカクに15歳ぐらいで入学し、結婚するためにそこをでるまでここにいた。教育は、テルポチカリのそれよりもずっと豊富であった、というのも、それは天文学、暦の解釈法、占い術、文字の読みかた、さらに書きかたをも含んでいたからである。さらに、平民が使用するものとは異なる洗練された言葉遣い（それは詩の作成に使われるものと同じものであったが）が訓練された。威厳のあるふるまいや洗練された身のこなしの形成がとくに留意された目的であった。最後に、鍛錬はとりわけ重視された。生徒は、性的な禁欲をし、しばしば断食や苦行を自らに課さねばならなかった。神々にコパル香をささげるために毎夜四度起床し、マゲイ（りゅうぜつらん）の刺皮で耳や太ももを刺して血を流す苦行を行った。

貴族の娘たちは、別の神殿の学校でおなじような教育をうけた。教師は一種の巫女のような老女であった。そこでは、宗教、礼儀作法、音楽、踊り、織物、料理法が学ばれた。彼女たちもまたきびしい規律の下で生活し、神殿の中庭を清掃したり祈りをささげるために夜中に二度起床した。娘たちは結婚するまでそこにとどまっていた。

## 6. 衛生、衣服、装飾品

### 〔髪形〕

平均的なアステカ族は、こざっぱりとした容貌をしていた。ほとんどヒゲはなく、毎日ヒゲそりをする必要もなかった。老人だけがある種の東洋風のやぎひげのようにまとめた長い髭をたくわえたが、それは尊敬をあつめるシンボルであった。頭髮は漆黒色であり、きわめて素直な直毛で、前を短く、後ろはやや長く切りそろえていた。特定の職業に特有の髪型があった。たとえば、聖職者は、前部と頭の両側の髪を剃りこみ、残りの部分を長くのばしていた。若い戦士は、首筋にある種のちょんまげを作り、最初の戦功をあげたときにそれを切りおとした。女性の場合は、流行は、髪をひきつめて両サイドで二つの巻き髪をつくるものであった。宮廷の女性（アニアニメ）たちは、他の女性よりもめだつことを望んで髪を束ねないでいたが、それは品が悪いとみなされた。

### 〔衣服〕

個人的な服装は、あまり手のこんだものではなく、男子用も女性用も基本的には二つ

のもので構成されていた。男子の衣服は、腰布（マシュトラトル）と、マント（ティルマトリ）からなっていた。腰布は、両足の間を通して腰にまとった長い布切れであり、両端を前と後ろに垂らした。しばしばそれは腰から腿までの前かけのような長いものであった。マシュトラトルは、不可欠の衣類であり、それで眠り、かつそれで仕事もした。マントは長方形で一種のカップであり、左肩の上で結んで使い、ボタンも留め金もなかった。普通は、綿製であるが、マゲイのせんいあるいはウサギの皮で作られることもあった。座る時には、マントを前部に回し、体をすっぽりくるんだ。マントの色は白色（国王のそれは青緑色であり、聖職者のそれは黒であった）であったが、蝶、ジャガー、巻き貝あるいは幾何学模様をかたどった刺しゅうで装飾されていた。最上のマントは、貢納物として東部からもたらされるものであった。富裕な者のなかには、マントを何枚も重ねて使用するものもいたが、それは見栄っぱりとみなされた。

聖職者と戦士は、もうひとつ別の衣装を身につけた。それはシコリとよばれる一種のシャツであり、前部があいており、皮帯によって止められた。戦士は、一種の『制服』を身につけた、それはツナギに似ており、体にピッタリはりついて、体の動きを自由にした、また綿の詰めものをした胸当ての鎧をつけ、それは矢から身を守るチョッキとしての役目をはたした。

女性の衣装は、クエイトルとよばれるスカートとウイピリとよばれるブラウスからなっていた。前者は、腰からふくらはぎまでを覆い、帯のようにして、刺しゅうで飾られた布のバンドによって止められた。この衣類は、男性の腰布に相当するものであり、常に使用された。ブラウスは首から腰までをおおい、目につく部分には刺しゅうで飾られた。この二つはいつでも白色であった。スカートとブラウスは東部、とりわけウアシュテカ地方やトトナカ地方のものが最良のものとされた。鳥、魚、動物等をかたどった多色の刺しゅうがその質を高めていた。東部からはまた、ケシュケミトルとよばれる、斜長方形でぜいたくに刺しゅうされた肩マントを使う習慣がもたらされた。優雅さでめだとうとする女性たちはそれを身につけ、当然のこと、アニアニメすなわち宮廷の女性たちは、他の女性に差をつける機会を見のがすはずはなかった。スペイン人の記録者であるサアグン修道士は、53種類の肩マントと13種類の衣服があったことを証言しているが、それはアステカ族の衣服の豊かさをわれわれに想像させるものである。

#### 〔はきものと装飾品〕

アステカの男性は、カクトリすなわち植物のせんいあるいは皮で作ったカクトをつけたサンダルを履いていた。皮ひもで足の甲にくくりつけた。戦士は、結び目を足までのばして、一種のすね当てを作った。貴族のサンダルは、いつでも装飾的な意図をもっており、皇帝のそれは金の装飾がつけられていた。貧しいアステカ人は、通常は裸足であった。

装飾品はきわめて多彩であった。これらはそれを身につける人々の社会的あるいは職業的地位を示すものであり、全体として許されるものが決められていた。金属あるいは宝石の鼻飾りはよく見られるものであった。それを使用するためには、鼻中隔に穴をあけねばならなかった。またアゴさきにベソテすなわち水晶、トルコ石、ペッコウ、コハクなどで

つくった輪をはめた。頭には、ケツアル鳥あるいはコンゴウインコのぜいたくな羽根で作った羽根飾りをつけた。皇帝のみがトルコ石の鼻飾りを使用することができ、また戦士だけがきめられた羽の装飾をつけることができた。こうした規則への違反は、厳しく罰せられた、というのもそれは既存の社会秩序に逆らうことを意味したからである。戦士たちはきわめて多様な金属や羽の装飾品を身につけていた、というのもそれによってその階級や軍団への所属が特定されたからである。女性は女らしさを演出するために装飾品を使った。これらは、ペンダント、ネックレス、腕輪からなり、くるぶしにもまたそれつけた。

#### 〔身体の清潔さ〕

衣服や装飾品のほかにも、アステカ族は異常なほどに身体の清潔さに気をくばったことで注目される。風呂はめずらしくなく、身分の高い者は、日に二度も風呂にはいった。それはひとつの習慣ということをこえて、一つのお清めの儀式となっていた。髪の毛を汚ないままにしていることは苦行のしるしとされ、しばしば神官たちは、自己犠牲の象徴として一定の期間髪を洗わないでいた。テノチティランには、多数の公衆蒸し風呂（テマスカリ）があり、人々は衛生と楽しみのためにそこに通った。貴族たちは、屋敷に専有の蒸し風呂をもっていたが、平民たちまでも、小さな家庭用の蒸し風呂をもっていた。それはカマドの側に置かれた背の低い半球体のものであった。たくさんの小さな穴のあいた壁で火をおこす部分と仕切られており、十分な量の薪をくべるだけで簡単に温まった。壁が十分に熱せられた時に散水すると、それは蒸気になった。日常の清潔さや衣服の洗濯のためには、天然のせっけんが使用された。それはコバルソコトルとよばれる植物の実であり、スペイン人たちはそれを「せっけん（ハボン）の木」と命名した。すなわちアメリカ・サボナリアの語源である。

美容用の軟膏と香水の使用は、アステカ族の女性の間では普通のことであった。またアヒンとよばれる土から作られた黄色の化粧品を使うことも習慣となりつつあった。親たちは、自分の娘がそれを使用することを禁じようとしていたが、貴族がその娘に与えた忠告に次のようなものがある。「良く見せようとして、化粧したり、顔に色をつけたりしてはいけない、なぜなら、それは娼婦のしるしだからである。――恥知らずな女だけがそれを使用するのだから。」

東の海岸部からもたらされた新しい流行は、歯を黒や赤色に染めることであった。一般に、化粧品やぜいたくな衣服は、尻軽な女性に特有のものとされ、「上品な」女性のものとは見なされなかった。

## 7. 食料

アステカ族は食料としては、いつでもほぼ同じものを少量だけ食べていた。しかしながら、高い社会階層の者たちは、より豊かかつ多彩な食事を楽しんでいた。それは結婚や誕生などを祝う宴会にしめされた。食料となる産物の種類は多彩であった。ヘビ、亀、アリ、カタツムリ、イグアナ、イモムシ、あらゆる種類の野性の球根や根などの食材を含んだ料

理は、アステカ族がかつて採集民として生活していたことをほうふつさせるものである。メキシコ盆地の湖に浮かぶ小島にはじめて到達した時代に、エビ、カエル、魚、水蚊のタマゴ（キャビアに似ている）などのその他のものが加わった。最後に、盆地の文明化された部族のすぐれた農業技術を取り入れて、その食料に、塊茎類、マメ類、果実、穀類が取り入れられた。これらの食料の大部分は、アメリカにおいて栽培植物とされていたがヨーロッパでは知られていなかった。野菜類では、ハヤトウリ、チラカヨーテ（そうめん瓜）、青物野菜、ゼニアオイ、カボチャ等々があった。塊茎類では、アラカーチャ（人参の一種）、ジャガイモ、サツマイモ。果実には、アノン（バンレイシ）、マメイ、グアナバナ（トゲバンレイシ）、サポーテ（チューインガムの原料）、パイナップル等があった。これとは対象的に、肉類はあまり食べなかった。というのも家畜はたった二種類、七面鳥と食用犬しかなかったからである。かれらの食料となった肉類の大部分は狩猟によるものであった。ウサギ、野ウサギ、キジ、鹿、鴨など。魚はさらに豊富で湖と川でとった。

日常の食事は、トウモロコシ、豆、アマラント（はけいとうの実）、サルビアの種から成っていた。後者のものはしばしば征服された部族から貢納品として入ってきた。トウモロコシ（黄色、白、大粒、小粒等々）や豆（黒、紫、大粒、小粒）の種類の多さにもかかわらず、二つの不可欠の産物、すなわちトマトとチリ（トウガラシ）による味つけがなかったならば、きわめて味気のないはずのものとなっていたであろう。トマトとチリはあらゆるものに使われ、どんな料理にも調味料とされた。トマトとチリを使っていわゆるモレ（ソース）が作られ、それはトウモロコシのトリティリャを美味なものとした。しばしば、それにアボガドが加えられ、さらに美味のグアカモレが作られた。またさまざまな香草、とくにシアントロが使用された。食料は煮込まれるか、焼き物とされたが、揚げ物はなかった、というのもアステカの人々は、ヒマワリの種やピーナツのような油脂分の多い食料を食べていたが、獣脂や油を利用していなかったからである。

食事に不可欠な脇役は、中央アメリカの北部に自生する植物カカオであった。アステカ族はカカオをそこからかなりの量輸入していた。それによってだれもが熱中してやまない有名なホコカトル、すなわちチョコレートが作られた。ホコカトルという言葉は、ナワトル語の二つの用語、「すっぱい」を意味するホコックと「水」を意味するアトルに由来する。「すっぱい水」は事実であった、というのもカカオの実粉にひいて水を入れた器に入れたからである。そのあと木製のヘラないし棒でよく泡立つまでかきまわされた。そのためそれは冷たくて苦い飲み物であった。というのもアステカ人は砂糖（アジア原産の植物）を知らなかったからである。それに砂糖を入れ温めて飲むという習慣は、後にスペイン人によって導入された。アステカ人のしたことは、それにハチミツ、バニラ、焼いたトウモロコシの粒を加えることであった。しばしばそれにトウガラシを入れたがそれはきわめて独特な味であったにちがいない。

主食はトウモロコシであった。メタテでひき、その粉によってきわめて薄いトルティリャがつくられ、そのまま、あるいはモレをつけて食べた。また同じ粉をつかってアトリというおかゆが作られた。水にとかし、ハチミツで甘くするか、あるいはトウガラシで味

つけされた。またフリホーレス（インゲン豆）やタマーレスすなわち豆やモレを詰め込んだトウモロコシの粉のまんじゅうがよく食べられた。祝日のタマーレスには、七面鳥や犬の肉が詰められた。これにハケイトウの種あるいはサルビアの種や前述のチョコレートがついた。カマドのそばにかがんで、スプーン等を使用することなく急いで食事をした。

平民の日常の食事は、日に二度であった。朝食はなく、アステカ人は、すでに何時間かはたらいした後に午前中に最初の食事をとった。一般的には一杯のおかゆであり、富裕な階層は、チョコレートによって好みの味つけをした。お昼に腹にたまる食事をしたが、それはモレをつけたトルティーヤとフリホーレス豆、時にはタマーレス、そしてまれには肉がでた。仕事のために家の外で食事しなければならない時には、女性が弁当を用意した。経済状態が許す場合には、寝床に入る前に一杯のおかゆかチョコレートを取ることはまれではなかったが、夜に食事はなかった。

豊かな者ははるかに良いものを食べていた。いつでも朝食にチョコレートを飲み、お昼には肉を食べ、夕食もとった。その食卓は、アステカ人の優雅な食事の見本であった。あらゆる種類のトリティーリャとタマーレス、20種類にものぼる煮込んだ鳥の肉、七面鳥のタマーレス、魚等々。いくつかの料理は、カエルの青トウガラシソースあえ、オタマジャクシの黄トウガラシのソース添え、モレつき魚料理、すっぱい果物にまぶしたカボチャの種、鳥の肉汁つきの果物のような本当のグルメ料理であった。貴族はぜいたくな夕食を用意するのが常であり、親族や友人をそこに招いた。客人は、夜中に到着して、夜どおし食べつづけた。食事の後にはチョコレートを飲み、パイプタバコをすった。その後は夜明けまで歌い踊りつづけ、そして最後にバニラとハチミツをいれたチョコレートの飲み物をとった。

当然のことながら、もっとも豪華な食事ができたアステカ人は国王であった。かれのためには30種類の料理が用意され、それらが冷めないように素焼きの火鉢の上にならべられた。ペルナル・ディアスは、かれの食卓には、七面鳥、キジ、ウズラ、シャコ、小鳥、ウサギ、鳩、等々が不可欠であった、と記述している。皇帝は、自分の食べたいものをさし示し、四人の女性が Cholula 地方産の陶器の皿で王の食事の世話をした。まず最初に果物やジュースをとり、次に黄金のカップで泡だったチョコレートをすすりながら食事をした。食事が終わると、女性たちは、テーブル掛けを取り去り、かれに指をすすぐためのボウルをさし出した。最後に、タバコをつめたサトウキビで作ったパイプをさし出した。国王の食事の後に、宮殿の人々がその残りものを食べるか、持ち帰った。

アステカ人たちは、食事といっしょにアルコール性の飲料をとる習慣はなかった。かれらの持つアルコール性の飲料は、オクトリ、すなわちマゲイの樹液を発酵させて造ったブルケ酒であった。招待者をもてなすための大きな夕食会では飲まれたが、それは老人だけに許されたものであった。もし酒に酔った若者が見つかったら、かれは石打ちの刑に処せられた。老人たちは、とくにお祭りの時には、酒をあびるように飲んだ。かれらは、ブルケ酒の壺をとり囲んで座り、冗談をいい、唄を歌いながら酒を飲んだ。それは年長者のみに許される特権であった。

## 8. 労働と余暇

### 〔労働〕

テノチティトランの日常生活は、神殿、とりわけ大神殿でならず太鼓とほらがいの音にしたがっていとなまれた。それはヨーロッパの都市の教会のならず鐘と同じように、一日の時を刻んだ。最初のもは、夜明けのそれであり、家庭の主婦は、主人よりもすこし早く起床し、メタテでトウモロコシをひきはじめ、住居の床をゆするリズムミクな動きによってすべての家族の目をさませた。

男たちは起きると、サンダルをはき、ゴザとマントをたたんだ。身支度ははやく、顔、手を洗い、口をすすいだ。後にマントを締めなおし、弁当をもち、働きにでかけた。女性は、一般的に家にいて、小さな子どもを世話し、家畜にえさをやり、家を掃除し、食事をつくるという仕事で忙しかった。

街の通りには仕事にむかう数多くの人々が見られた。かれらは、白いマントを着ていたが、その仕事によってさまざまな装飾品をつけていた。アステカ社会は、労働の分業体制もすすんだきわめて複雑なものとなっていた。ある者たちは、農業に従事していたが、それはしだいに少なくなっていた。というのも征服された部族たちが、中央高地の都市に必要な食料を貢納品として送っていたからである。農民は、カルプーリの共有地、あるいは貴族の所有地を耕作した。残りは漁民と狩猟者であった。

職人が住民のかかなりの部分をしめていた。農民は、食料の生産から解放されるにつれて、専門化された労働者に転身した。自分の住居に作業場をもち、織物工、金属細工師、陶工、羽飾り職人、宝石細工職人等々となった。また、多くの左官、大工、石工など、さらに卸し商人と小売り商人がいた。前者の商人たちは、ポチテカとよばれ、遠隔の地からものめずらしい商品や産物をもたらしたために、おおきな名声と人気をあつめていた。後者は、小売り商人や行商人であった。また多くの人が助産婦、医者、清掃人、公衆風呂の従業員など公共的サービスの職業に従事していた。また住民の一部は、判事、警吏、ふれ口上役人、収税人、書記などの公務員としてはたらいた。最後に、教師、聖職者、戦士がいた。この巨大な都市で、これらすべての人々が毎朝それぞれのはたらく仕事にでかけたのである。

人びとは、朝食の時間をつげる太鼓の音がひびく午前の半ばまでは休みなしに働いた。それが最初の食事であった。通常は、家からもってきた弁当を食べたが、それをもたない人、あるいはよそ者は、街頭にでると、そこでは数多くの行商人たちがトリティーリャ、タマーレス、おかゆを売っていた。トウモロコシの香ばしい匂いが町中に充ちていた。

きわめて短いかるい食事の後、ふたたび太鼓がならされる正午まで仕事にもどった。ほとんどの人が食事のために家にもどった。それは一日で唯一のまともな食事であり、家族そろってそれをとった。さらにその後に家で短い昼寝をする習慣があった。その後に仕事に戻り、神殿の太鼓が日課の終わりをつげる日暮れまで休むことなくはたらいた。人々は家路につき、家族と語らい休息をした。ときには、一杯のオカユカチョコレート飲んだ。

夜の第二の太鼓が就寝すべき時間をつげた。翌日はまた早朝に起床せねばならない。

#### 〔余暇と祭り〕

テノチティトラン市はまた、余暇を楽しむための時間をもっていた。日が暮れると、多くの裕福な家では、招待客のために夕食を用意したが、数時間後の夜ふけに到着した客たちは夜明けまで楽しんだ。平民の家でも、命名式、結婚、葬式のような儀式を行うときにおなじような祝宴をおこなった。

学校の生徒たちは、踊りをするためによく出かけた。また日が暮れると、宮廷の女性たちは、おしゃれな服装をして香水をつけ、戦士とダンスをするために出かけた。そうした静寂と暗闇の時間をその商売のために利用するぬけめのない者もいた。ある商人たちは、油断のならない隣人たちの目にふれるのをさけて、遠方からはこんできた商品をカヌーから荷おろした。

真夜中の太鼓がなると、聖職者は、祈りと苦行を行うために起床した。耳たぶや太ももをリュウゼツランの刺でさして血を流して苦行を行った。朝の3時に次の太鼓がなった。学校の教師は寄宿舎に行き、子どもを起こして川や水路で水浴させた。神殿の学校の女神官たちは、女の子たちを起こして、中庭を清掃させ、神への供物を捧げさせた。ある商人たちは、包みに商品をつつんで旅に出た。この後は、6時までは静寂が町をつつんだ。祝宴が終わって家に帰る徹夜組だけが静寂をやぶった。やがて夜が明ける。朝6時に太鼓とほらがいの大音響が新しい一日の始まりをつげる。

労働がつづく日常は、しばしばお祭りで中断された。週末に休むという習慣はなかったが、お祭りはきわめて多くあった。毎月なにかのお祭りがあり、一日だけで終わる祭りはほとんどなかった。たとえば、新トウモロコシの祭りは10日間つづいた。皇帝が平民のために食事や飲みものを用意し、たいまつやカマドの光のそばで唄やダンスが催された。皇帝自身がそれに参加した。最終日には、何時間にもおよぶ唄や大衆的なダンスをとまなう大規模なパレードが行われた。その後にトウモロコシの象徴を運んできた若者がいけにえにされた。アテモストリの月の祭りのように、競技会が行われるものもあった。そこでは、戦士の組と聖職者の組とが競いあった。勝利した者たちは、相手から太鼓、敷物、衣服を奪いとった。同じようなものがティトリの月に行われたが、それは対決する組は男の子と女の子のそれであり、前者が木片を投げつけ、後者は棒で防御した。

#### 〔娯楽と遊び〕

労働と祭りがすべてではなかった。娯楽もあった。貴族たちはスポーツとしての狩猟に熱中した。たとえば、皇帝は、自分の公園や森で吹き矢で小鳥をとることを好んだ。焼いた粘土の小玉を発射する道具を利用した。それは羽根飾りに利用するために鳥の血を流さないでとるためであった。年の第14月には、テノチティトランとトラテロルコの戦士たちが参加する大狩猟が行われた。サカテトル山の樹林のおい茂った隠れ家で夜明かしをし、翌朝、人々は勢子の隊列をつくって、獲物を狩りだし、ウサギ、コヨーテ、鹿、野ウサギ等をつかまえた。獲物をしとめた者には皇帝から贈り物が与えられた。このあと、獲物とともに町に凱旋した。

この他に貴族たちがしばしば好んだ娯楽は、庭造りと詩作であった。音楽は詩と密接に関係しており、アステカの貴族は、町に数多くあった歌の学校に通った。また歌と踊りは、密接に関連しあっており、歌われる詩は一般に脚色されており、すでにそこには演劇の基本的要素があらわれていた。

しかし、なによりも、アステカ人、とくに民衆は、二つの熱中させる遊び、すなわち球技とサイコロ遊びを楽しんでいた。球技は、宗教的起源をもつものであり、何世紀も前にさかのぼる起源をもつ。アステカ族は、それに二つの新しい要素、すなわち競技の要素と賭け事の遊びの要素をつけくわえ、それによって十分に完成されたものとなった。公共的なものと私的な球技があった。自尊心のつよい大貴族たちは、自分の宮殿で私的な球技ゲームを催し、競技会を見るのを楽しみ、またどちらが勝利するかで宝石、奴隷、豪華なマント、装飾品等を賭けた。公共的なゲームにおいては、職業的な賭博人の群れが集まったが、かれらはどんなゲームにも顔を出した。

球技場は、I型あるいはダブルT型をしており、両側に観客のすわる階段座席があった。二つのチームは、線によって区切られたそれぞれのコートに陣取った。生ゴムの塊のボールを使用し、それを自陣でバウンドさせないようにさせながら相手陣営に打ち返さねばならない。最も古い形では、足以外の身体のどこかの部分をつかって打ち返さねばならず、きわめてむずかしい技であった。ヒジ、腰、ヒザ、頭で打ち返すために地面に倒れ込まねばならない。そのために選手は、腰、ヒザ、手、頭を鹿皮で作ったプロテクターでおおっていた。それは現在のラグビーの選手の似た格好であった。点数制で競われた、また一種のバスケットボールのようにコート両サイドのかなりの高さのところに取り付けられた石の輪にボールを通すことでも点数が得られた。アステカの伝統はわれわれに多くの有名な競技について語っている。そのなかには、テシュココ国の国王のネサワルピリとテノチティトランの国王であり、すべてのアステカ帝国の国王でもあるモテクソーマ二世との間で争われたものが有名である。両者のうちどちらが正しいかを調べるために競技がおこなわれた。というのも、テシュココの国王の占い師はモテクソーマは生存中に王位を失うことになることを宣言していたし、一方、モテクソーマの占い師たちは、当然のように、その反対のことを述べていたからである。面白いことは、ゲームではネサワルピリが3対2で勝利したことである。かれの占い師たちは、このようにして、数年後に行われることになるスペインの征服を予言していたことになる。

パトリすなわちサイコロ遊びは、スポーツ競技という性格はもっていなかった。それはたんなる運まかせの勝負事であった。その起源は比較的新しく、同じようにもともとは四つの方角の守護神というように宗教的なことがらと関連があったが、めんどろなところはとりのぞいて純粋な遊びに変化していた。それはわれわれのバルチス・ゲームによく似ている。一つの盤と駒となる12個の彩色した石(赤6個、青6個)から成る。盤はマントの上に書かれた、それは十字の形であり線で52の区画に区切られていた。それをらを通して十字の交差する中心まで到達したものが勝ちである。黒いマメの一部を白く塗って点数をつけたサイコロを使って石を進める。二人の人間あるいは二組のペアで遊び、小石を十字



の中心に早く進めたほうが勝つ。サイコロ・ゲームは多くの民衆にとっては度をこした悪習となっており、スペイン人記録者によれば、あるアステカ人たちは一日中それに遊びほうけて、本物の博打師のように盤が書き込まれたマントとサイコロをもってあちこちろつきまわっていたと述べている。

その他にもいくつかの運まかせのゲームがあった。白と黒の小石を使って遊ぶ一種のチェスがあった。葦と石を使うゲームもあり、それは今日われわれが球を使ってやるのと同じように小石を穴に入れるものであった。金の塊を軸受けに投げ入れるめずらしい遊びもあった。今日、アステカ人たちに伝わっている、高い柱の上に回転する十字形の枠組みをつけ、ヒモにぶら下がりながら四人の人間が徐々に降下してくるボラドール（鳥人間）のゲームは、もともとはかれらのものではなかった。現在のメキシコの領土には、アステカによって支配された民族に独自のゲームが無数にあったが、アステカ人たちがそれらをすべてとり入れて自分たちのものとしたわけではなかった。

## 9. 科学と芸術的活動

アステカの芸術と技術においては、領主も民衆もおなじように関与していたが、理論的な知識は聖職者と貴族たちの特権であった。暦と文字は、神殿の学校においてのみ教えられたが、そこでは教師は選ばれた少数の弟子たちを教育した。平民がなにか問題にぶつкаると、かれは神官にそれをたずねなければならなかった。聖職者たちは、その事柄についての解釈をかれらにあたえ、さらにその提供したサービスにたいして謝礼をとった。

### 〔暦〕

宗教用と市民用の二種類の暦があった。前者は、トナポウアリとよばれ、一年が260日であり、20カ月で各月が13日であった。各年、各月、各日はそれぞれ守護神の下にあり、それが人間の誕生、結婚、病気、死亡の運命を決定していた。それを調べて吉凶をうらなうことは聖職者の仕事であり使命であった。シウポリカリとよばれる市民用の太陽暦は、一年が365日、18カ月で各月が20日であわせて360日、それに不吉な日と考えられた5日間が追加された。

太陽暦の52年ごとに宗教用の暦と市民用の暦が同時に終了することになる。それゆえに、それは一つの重要なサイクル、一種の「世紀」と考えられた。そのサイクルが終わるこの年の最後の5日間は、最も不吉な日々と考えられ、その間は世界の終わりくるのではないかとおそれられた。

暦に関する知識は、メキシコにおいて数千年もの長きにわたって発展されてきた高度な天文学の成果によるものであった。マヤ人は、アステカ人のそれよりも、さらには当時ヨーロッパにおいて使用されていたものよりも精巧な太陽暦を所有していたことが知られている。アステカ人は、主要な星座、天体、流星等々を知っていた。より興味ぶかいことは、その神官たちは、宗教用のものとともに市民用の暦を許容することによって、科学的進歩を受け入れることができたことである。その事は、かれらの宗教があまりにも妥協をゆる

さないものであったことを考える時、二重の意味で不思議なことであった。

#### 〔医学、数学、工学〕

きわめて高度に発展していたもうひとつの学問は医学であった。しばしば人身供犠の儀式を行ったことは、解剖学の知識を豊かなものとしていた。神官たちは、身体に正確な切りこみを入れることで、ほんの数秒のうちに犠牲者から心臓をとり出すことができた。犠牲者の痛みを緩和するために、時には、麻薬、睡眠剤、麻酔剤が使用された。こうしたことは神々への貢ぎものとしての価値を低めることになったが。さらに、戦争は、外傷医学の実践に豊かな経験をうみだしていた。骨折には添え木があてられ、負傷者のために止血剤や癒創剤が使用された。これ以外にも、医術師は、解熱剤、鎮静剤、利尿剤、下剤、催吐剤として多数の薬草を使用した。フェリペ二世によって派遣されたスペイン人医師フランシスコ・エルナンデスは、アステカ族の使用したものとして1,200種類の薬草を記録している。

これとは対照的に、数学の知識は乏しかった。きわめて初歩的な20進法が使用されていた。数の単位はひとつの〇であらわされた。20は一本の旗で、400はある種の本または羽根の像で、8000は一つの袋であらわされた。アステカ人は、マヤ人のように大きな数値を表記することができなかった。現実には、400をこえる数値は「計測不可能」と考えられた。にもかかわらず、その計算法は、征服した都市からの貢ぎものを正確に計算することを可能にした。

技術は、地域社会の仕事に役立った。農業がきわだつ。それは灌漑と施肥によってすばらしい生産力を示していた。われわれはチナンパ(浮き菜園)の発明を思い出す。その建築技術はすぐれており、技術が都市のさまざまな問題を解決していた。チャプルテペックとコヨアカンの水道橋は、石とモルタルで造られたいくつかの橋の上に敷設されていた。首都は、しばしばテシュココ湖の洪水に見舞われたために、モテクソーマー一世は、1449年にそれを防御するために16哩におよぶ巨大な堤防の建設を命じた。

#### 〔文字、文学、演劇〕

文字は、先住の諸民族から受け継いだもう一つの大きな財産であった。アステカ人は、それをかれらの美しいナワトル語に適用し、それをかなり改良した。かれらの言語は、容易な発音ときわめて多彩な語彙をもっていたために、文字を進化させるのに適していた。文字はかなり進歩をみせており、直接的象徴、すなわち絵文字で表記された。アステカの絵文字は、表意文字であり、また表音文字でもあった。すなわち、類似性によって一つの理念を示唆することもでき、あるいは一つの音によって翻訳されることもできた。たとえば、ある人が道を歩く様子を、道と足跡を書くことで表した。また夜は黒い丸で表現した。また言葉の音から引き出した音素を利用した。たとえば、水を意味するアトルからアの音を、歯を意味するトラン-ティルからトランの音を、目を意味するイシュトロトリからイシュの音をとるように、複雑な用語を表現するために後にそれらを音韻的に組み合わせた。最後に、一つの概念の様式化であるシンボルないし絵文字があった。オトラティラン村は、オトラトルの象形文字であるサトウキビと、音節トランの表音文字である歯とを組み

合わせて表示された。

もしスペイン人の征服がなければ、かれらが現在われわれが使用しているような完全な表音的な文字を完成するにいたっていた可能性はきわめて高い。

トラクイロとよばれた書記は、神秘的なものとされた赤と黒の墨を使いこなすこと知っているがゆえに、例外的な人物とみなされた。かれらがそうした技能をどのように身につけたかは知られていないが、おそらく神殿の学校であるカルメカクであることはまちがいない。アステカ族の何人かの文人は、そのなかにはテシュココの国王も含まれていたが、また練達の書記でもあった。神官はすべて読み方を知っており、その中には書き方まで知っているものもいた。貴族はまた神官と同じ知識を持っていた。平民は完全に非識字であった。

文字は柔らかい材料、一般には、樹の皮から作った紙であるアマトルの上に書かれた。小さい孔を注意深くふさぎ、それに石灰をうすくぬり、最後に、何枚かを屏風のようにつなぎあわせ、木の表紙をつけた。本は、神殿や宮殿の図書館に大事に保存されたが、戦争の時には被害をこうむった。トラテロルコの大図書館は、最も重要なもののひとつであったが、テノチティトランの住民がそこを占拠した時に焼失した。スペイン人の征服はまた多くの重要な著作物を破壊した。スマラガ司教を含む何人かのスペイン人聖職者たちは、そこには悪魔の教えが含まれていると考えて、アステカ族の書籍を大量に焼却した。イツコアトル国王自身さえ、住民を教化するのに有益ではないと考えて、かつてのアステカ族が貧しく抑圧されていた時代のことについて記述していた多くの古い文書類を焼却するよう命令を下した。

文字は、文芸の発展を可能にした。予言の書や暦の書以外に、歴史的年代記の本が存在していた。そのうちの一つは現在にまで残っている。それは「巡礼絵巻」として知られているもので、アステカ族がチャプルテペックにたどり着くまでの長い遍歴を物語っている。またかれらが、息子や若者などに与えた有名な道徳的説教が散文体の記録としてわれわれに伝えている。最後に、かれらは明確に分担された四つの学校、すなわちテシュココ、テノチティトラン、トラシュカラ、チャルコの学校にすばらしい詩を保存していた。このジャンルは、多くの偉大な領主たちが作品を残しており、平民によって使用された平俗な言語とは異なるテクピラトリとよばれる古典的な洗練されたナワトル語で詩作がおこなわれた。テシュココ国王ネサワルコヨトル、その息子ネサワルピリ等のように、いく人かの詩人は、きわめて高い名声を享受した。民衆を楽しませることにおいては演劇も重要であった。舞台は神殿に作られるのが普通であったが、演目はまったく世俗的なものであった。 Cholula市で催された演劇について、ホセ・デ・アコスタ修道士は次のように記述している。舞台は長さ30ピエ（約8.5 ㍎）の長方形の舞台であり、そこでは「豊者、鼻たらし、足の不自由な者、盲者、片腕の者が登場する幕間狂言があり----- ほかの者は、うじむしのような汚い格好で登場した。ある者はコガネムシのような、ほかの者はガマ、あるいはトカゲのような衣装をつけ、かれらの職業を暗示しながら順番に登場し、それぞれがなんらかの寓話を語るが、それはきわめて機知に富んだものであるがゆえに観衆をおおいに楽

しました」。専門的な喜劇役者さえいた。かれらは領主たちを相手に公演することで生計をたてていた。

芸術的活動は、羽根飾り、金細工、陶器、さらに音楽、歌、踊りなど美しい作品によって補完された。すべての都市は、クイカカリすなわち「歌の家」とよばれる音楽学校を持っており、そこでは熟達した師匠が12歳以上の子どもに歌と踊りを教えた。アステカ族の君主たちは楽しみのためのこうした場所に通った。主要な楽器は、ホラ貝、ラッパ、太鼓、笛、オカリナ、鈴であった。

## 10. 戦争と宗教

### 〔人身供犠〕

アステカ族の宗教と戦争は、まぎれもなく、今日のヨーロッパ人にとって最も理解しにくい側面である。たえまのない軍事的征服活動の連続は、アステカ人は、近隣の民族を支配することだけを夢想していた野蛮な民族であるとの印象をうみだしている。ある神々のために何千、ときには何万という人々が犠牲としてささげられたという事実も否定しえないことである。16世紀のスペイン人たちは、かられ自身が暴力的な人間であったが、こうしたことに驚き、そのような「野蛮きわまりない」の状態をやめさせるためだとして自分たちの行動を自己正当化する口実とした。

アステカの宗教と戦争を理解するために、われわれはかれらの世界に身をおくことが必要となる、というのもわれわれの世界からはそれを理解するのは不可能だからである。アステカ族は、現在のアメリカ合衆国南部をさまよっていた好戦的な過去の時代に由来するいくつかの要素（たとえば、戦いの神々など）とメキシコの高度の文明をもった先住の諸民族からうけついで多くの信仰とを合成してその宗教を形成した。後者の要素の中には、メキシコの南部全域に広く普及している四つの太陽の伝説（マヤ族もまたこの伝説を共有している）をともなったその宇宙論などがあり、かれらはそれをほとんどそのまま受けついで。その伝承によれば、世界は神々によって過去に四度創造され、そしてそのたびに破壊されたとされる。創造は、文明を持ったより良き人間となるようにとの神の望みによるものであった。破壊は、人間たちが神々がかれらに命じたような秩序ある生活をいつまでもおこなうことができないことにたいする罰の結果であった。第一の世界は、巨大なハリケーンによって破壊された。第二の世界は、大洪水によって、第三のそれは火の雨によって、そして第四の世界は、猛猛な野獣たちによって滅ぼされた。この後に、神々は、あらたな太陽を再び創造する気にもならず、それを太陽も星もない暗闇の世界のままに放置しておいた。しかし神々は、テオティワカン（現在のメキシコ市から遠くないところに存在していたアステカ族より古い民族の都市の遺跡）に集まり、人間たちに最後のチャンスをおたえてみることを決定した。そのために、ひとりの神が火中に身を投げて、太陽へと変身した。ほかの何人かがおなじ方法で月、星などにその身を変えた。こうして、現在の人間が住んでいる最後の第五番目の世界が出現した。伝承は、もし人類が神々の定めた道徳的

規範に従うことをやめるならば、以前の世界と同じような破壊の運命にいたると教えていた。その時には、すべてのものを破壊しつくす巨大な地震が襲来するとされていた。

アステカ人たちは、人類の救済者としての役割をみずからかってでた。このために、模範的な行動の規範をそなえた厳格な社会を形成し、神々に犠牲をささげることに没頭した。考えられうる最上の供物は、当然のことながら、最も価値のあるものとして人間の命、さらには、太陽に活力をあたえる食料——人間の血——であった。こうして果てしない人身供犠が始まった、というものの、たえまなく人間の血を供給しなければ、太陽は動きを止め、世界は死の淵に落ちこむと信じられたからである。しかし人間の罪ははてしなく、聖職者たちは、神々を満足させて、世界を動かし続けるためにより多くのいけにえを要求した。そのためには、戦争という手段に訴えることが必要であった。なぜなら、それは人身供犠のために多くの捕虜をとらえことを可能にしたからである。こうして、ここに人身供犠—戦争—人身供犠というアステカ族がついにぬけ出すことができなかった悪循環が生みだされることとなった。

人間の罪によって世界が破滅への道を歩んでいるという脅威は、深刻な悲観主義を生みだし、神官と貴族の権力を強固なものとしていった。アステカ社会は、太陽にその食料たる人間の血をささげるという義務を遂行するために必要とされる犠牲者が確保できないようなことになったらどうしようか、という不安に支配されながら生きていた。神々を満足させるためにたえまなく残忍な儀式をおこないつづけた。捕虜たちは神殿に連れてゆかれ、そこでテマルアカトルという石台の上に寝かされた。四人の神官が犠牲者を押さえつけ、五番目の神官が黒曜石のナイフで胸を切りひらき、まだ脈打っている心臓をつかみ出し、それを神へとささげた。また「剣闘士」の犠牲も存在した、そこでは犠牲者は、からだの自由をうばわれたまま勇猛な戦士と闘かわされて死んだ。そのほかの犠牲の形には、射殺、あるいは火あぶりがあった。その場合には捕虜には麻薬で麻酔が行われた。新しい国王が王位に就き、新しい治世が始まる時には、人身供犠が数多く行われた。スペイン人の記録者ディエゴ・ドゥランは、1487年にテノチティトランの大神殿が完成した時には、8万400人が犠牲としてささげられたと述べているが、これはあまりにも誇張されすぎた数だと思われる。

#### 〔戦争〕

いまやわれわれは、アステカ人にとって戦争がどれだけ重要な意味をもっていたか、なぜそれがすべてのアステカ人にとって義務であったのか、すなわちすべての者が太陽に血をささげることによって世界を動かしつづけることに貢献しなければならなかったこと、を理解しえた。軍事的教育は、テルポチカリすなわち学校で開始され、そこでは子どもと若者が教師たちによって戦闘術を訓練された。この後成人に達すると、家庭をもって、それぞれの仕事に従事しながら、招集があればいつでも戦場に駆けつけねばならなかった。貴族は、生来的な軍人であった。さらにクアクチティンとよばれる職業的な戦士の階層があった。かれらは「丸ぼうず」の兵士であり、それは戦闘においてはけっして退却することがないという印であった。つねに最も危険の高い陣地に立ち、名声と特権を享受していた

が、父親たちは、その息子にたいして自分の跡をつがないように勧告していた、というのもそれはすさまじいものであり短命におわるだけと考えられたからである。さらに「鷲軍団」、「ジャガー軍団」等々のいくつかの軍団があった。戦闘の武器は多数あったが、主要なものは、黒曜石のナイフを埋めこんだ硬い木の剣であった。

戦争には、できるかぎり多数の捕虜を獲得するという目的があったため、アステカ族は、敵を殺すというスペイン人たちの戦闘形態を理解しえなかった。そのために、敵の死体はなんの価値もなかった。大規模な征服戦争が完了したとき、こんどは犠牲としてささげるための捕虜が不足するのではないかという不安と恐れが生じたため、「花の戦争」がうみ出されることとなった。それはいくつかの近隣の都市と恒常的な敵対関係を維持することであった。テノチティトランは、 Cholula、Tlaxcala、Uexotzingo と花の戦争を行った。定期的に戦闘の期日が設定され、双方の軍隊が、あとで神々に犠牲として供する捕虜を獲得しあった。

#### 〔神々と神官〕

宗教はアステカ族の人生の各節目を支配していた。人生は複雑な暦によって左右され、さまざまな神々が各活動を支配していた。それは多神教の宗教であり、服属した地域の神々を他の神と調和するかどうかをあまり気にすることなく取り入れたために体系性を欠くものであった。アステカの神殿はきわめて複雑であり、各神は同時にさまざまな属性をそなえていた。その主要な神は、民族起源となる土地からもってきた戦いの神ウイツィロポトリと、メキシコ盆地においてとり入れた雨の神トラロックであった。後者は、そのよび名はさまざまであるがほとんどすべての農耕民族によって崇拝されていた神である。両者は、テノチティトランの大神殿に祀られていた。さらに、大小さまざまなおびただし数の神々があった。

神官たちは、暦を解釈しながら、宗教的なサイクルを調整し、儀式を執り行った。聖職者の階級制は厳格でありピラミッド型をなしていた。神官たちの主要な機能は、将来起こりうることを調べることであり、そのために暦の操作にきわめて熟達していた。

アステカ人は、時間を宗教暦と太陽暦が一致する52年の周期に分けた。「世紀」の最後にあたるこの夜は、世界の終わりが来るとされ、アステカ人の不安と恐れは頂点にたっした。カマドの火は消され、すべての人々がマゲイの刺を身体にさして血を流す苦行に身をゆだね、いっぽう、聖職者たちは、望ましい前兆をさがして天文台から天空を観察していた。そのはてしない夜に、スバル座のちかくに牡牛座があらわれる時には、太陽がふたたびあらわれ、世界が存在しつづけると考えられた。その時には、「星の丘」において一人のいけにえがささげられ、心臓が取り出された後、胸が完全に切り開かれ、そのなかに火をおこすための棒が入れられる。熟達した神官が新世紀を迎えるために火をとます。そこから生き延びる期待とともに火が採られ、すべてのカマドに移される。しだいに太陽が水平線に姿をあらわしはじめ、アステカ人の新しい生贄を受け入れたことを告げた。その光と熱はすべての人間に利益をもたらした。しかし、人類の救済者を自認するアステカ人にたいし、アステカ人以外の者にはそんなことは想像もしえないことであった。

## II. メヒカ族の教育

メキシコ文部省編 師範学校教育史教科書『メキシコ教育史』1976年から

メヒカ族(=アステカ族)がそのこどもや若者の教育の問題にきわめて熱心な注意をはらったということについてクロニスタ(年代記作家)たちの観察は一致している。たとえば、アコスタ修道士はつぎのように記述している。

メヒコ人が、子供たちを育てるときに示した配慮と規律ほど、私が驚嘆を感じ、賞賛と銘記に値するように思ったものはない。なぜなら、幼児と青年の訓育と教育に、ひとつの国の良き希望のいっさいがかかっていること――自分たちの子供たちを、弱年におけるふたつの害悪、すなわち放恣と贅沢から遠ざけて、有益清廉な修練に身を入れるようところを用いたのである。<sup>1)</sup>

スペイン征服時以来のインディオ社会の注意ぶかいもうひとりの観察者、モトリニア修道士は、首長たちのみならず一般の平民もそのこどもたちの教育に配慮していることに驚きをしめしている。この関心は、すなわち考慮すべき二つのことを示している。すなわち、メヒコ人の間でのある種の歴史の意識と次の世代にその価値を伝達することを必要とする国家意識の存在である。歴史意識をもつ民族は、それをもたない民族よりも、その社会の将来にたいし、より大きな関心を持つ。

テノチティランは、イツコアトル王と執政トラカエレルの統治の下、アスカポツァルコ国との戦争以来、この問題を意識するようになった。アスカポツァルコへの勝利(1428年)は、メヒカ人の前に可能性にみちた広大な地平を切りひらき、それは野心的な政治プログラムを構想させることとなった。トラカエレルは、その民族の生活を、政治、宗教、歴史、社会の領域で改革にのりだすことをもくろんでいた。独特な神秘的-軍国的思考をおびたこうしたプログラムを進展させるために、その時まで継承されてきていた歴史は役にたたず、むしろ逆効果となるにいたっていた。そのためににべつの歴史が必要とされた。こうして、イツコアトルはすべての歴史的資料を焼き捨てることを命じた。

ひとたび古いメヒカ人観を破壊して、特にほかの民族にたいするメヒコ人の優越を強調する新しいメヒコ人像の形成に着手すると、のこされたことは、その新しい人生観を住民のひとり一人の魂や精神のなかにうえつけることであった。要するに、国家は、自分の歴史観を民衆にあたえることをもくろんだのである。

トラカエレルの後継者、モクテクソーマー一世は、このことを明確なかたちで促進することを知っていた人物であった。新しいプログラムを遂行する有能かつ有用な民衆をつくりだすためには、政府自体がその臣民の教育の手綱をにぎることが必要である、ということが明らかとなっていた。国に法的秩序を用意する目的で公布された諸命令のなかには、次のように一節がある。

—— すべてのバリオに学校と若者宿が置かれること。そこでは、宗教と良き養育、苦行と過酷、良き習慣、戦闘の訓練、共同の作業、断食、規律、自己犠牲、徹夜の訓練がおこなわれ、またそこには彼らを叱声し、矯正し、罰し、命令し、日常の訓練に目を光らせ、彼らを無為にすごさせたり時間をムダにしないようさせる教師や古老がおかれること。これらすべての若者は最大の厳格さで、貞潔を守るものとし、もしそれを犯せば死刑に処す。<sup>2)</sup>

メヒカ人の若者に、この民族の新しい人生観、すなわち神によって選ばれた民族としてのそれにふさわしい、有用な人間となるために必要とされるものを提供するための教育機関が設立された。

メヒコ人の社会では、すべての者は、男女をとわず、ひとつの特別かつ確固たる使命をおびて生まれてきたとされた。個々人は、なによりも集団全体を維持するために存在した。そこでは、男は戦争のため、女は家事のために生まれてきた。このことは、こどもの出生を助ける時、産婆が語りかけるたといわれるつぎの言葉により明瞭にみてとることができる。

おまえにふさわしいもう一つの場所、おまえに約束された場所、それは戦場であり、戦闘がおこなわれる所だ。そのためにおまえはこの世に送られてきたのだ。おまえの仕事は戦争だ、おまえの仕事は敵の血をもって太陽に飲物を与えることであり、おまえの敵の体をもってトラルテクトリとよばれる大地の食物をあたえることなのだ。

さらに数日の後、洗礼の儀式の折——ここでは、先スペイン期にメヒカ人の間にあったキリスト教の洗礼に似かよったひとつの習慣のことをさしている——再び、産婆は、その手に、ミニチュアの円楯、弓、四本の矢をにぎらせ、こどもを戦争の使命にささげた。こうしてこどもに、戦闘での武勲をもって、さらには実際に生じたことであるが戦場でのかれ自身の「名誉の」死をもって太陽に生命力をあたえるという宇宙論的使命感をうえつけた。

少女の場合には、家事的な使命がかされ、洗礼の儀式では、紡錘とハネ、あるいはまたほうきが与えられ、こうして人生における仕事があるかを示したのである。

### 家庭教育

モトリニアによれば、授乳期は四年であった。平民の間では、息子の家庭教育は父親に、娘のそれは母親に責務とされた。男の子は、父親の手だすけをしながらトウモロコシや豆の収穫したり、狩や漁、カヌーのあつかい方、のような生活に役だつ技術を学ぶこと、



その他「おおくの技能や複雑な道具を必要としない仕事」<sup>89</sup>をかされた。職人の息子は、父親の仕事を学ぶことに集中した、というのも「かれに父親がなれしたしんだ職業や仕事をあたえることが最も一般的であった」<sup>90</sup>からである。いっぽう母親は、娘が、製糸、織物、刺しゅう、トウモロコシの製粉、家の清掃をまなぶよう気をくばった。

鉄則はこどもを無為にすごさせないことであつた。メヒコの家庭におけるこの教育の過程についての絵による記述がメンドーサ絵文書の中にある。そこには、父親がその息子にやらせるべき仕事、彼らを罰する方法、彼らにあたえられるべき食料の量が描かれている。この絵文書にしたがうなら、メヒカのこどもに与えられるこの食事の量の少なさは、極端なものがあり、5歳の子どもにトリティーリャ一枚、7歳から12歳まで一枚半、13歳、14歳で二枚である。

家庭教育は、こどもに日常生活の実際的側面に必要とされる手段を教えることだけでおわるものではなかった。道徳的側面および良きしつけの教育におなじほどの注意がはらわれた。メヒカ人は修辭をよく愛好したことは知られており、こうしたかれらの性向はその成果としてウェウエトラトリ、「古老の語り」の名で知られた口承文学のジャンルを生みだした。そこに我々は、メヒカ人たちの世界観、人間観、人生観、人間の運命、宇宙観を；すべての男女が評価し、培うことを期待されている人間としての徳性；特に若者にむけられた道徳的教訓；こどもに教えるべき日常生活における良き行状の詳細、などを明瞭に見ることができる。そこにはわれわれは他の世界にも通用する多くの道徳的規範をみいだすことができる。しかしながら、ウェウエトラトリのなかには、今日のわれわれから見ると奇異な生活規範もあることも事実である。たとえば、少女や娘は食事の最中話しをしてはいけなかったし、一般にできるだけ口数を少なくするようにとされた。モトリニーアは、メヒカの娘たちは「まるで口がきけない者、耳がきこえない者」<sup>91</sup>でもあるかのように見えたと書いている。

ウェウエトラトリについてのもうひとつの特色は、訓戒そのものというよりもむしろその修辭や文芸的洗練のためのより儀式的ないしは儀礼的な性格である。つまり、それは、こどもや若者をさとす、まさにその時に突然に発せられる即席の言葉ではありえないことは明白である。われわれの見るところでは、こどもの誕生、教育機関への入学、結婚、などのような人生の重要な節目でくり返し語られ、親から子へと伝えられる口上あるいは演説であつたろう。

子どもの教育のこのはじめの段階では、適当な罰なしですませることはできない。メヒカ人の場合、反抗的、ウソをつく、不注意なこどもに課された罰はきわめて酷なものであつた。いら草でむち打つ、血がでるまでマゲイ（りゅうぜつらん）のトゲで刺す、痣だらけになるまでつねる、棒でなぐる、手足をしばって濡れた土の上にとろがす、足を縛って逆さに吊るす、とうがらしをいぶした煙を吸わせるなどの罰があたえられた。実際はまれであるにせよ、再三の忠告や体罰にもかかわらず、矯正しえないという結果の場合、法律は父親にこどもをトラトラコティン（ある種の奴隷）として売り渡す権限をあたえていた。もしこうしたトラトラコティンとして売却された不幸者のある者が、その悪行状をつづけ

る場合は、その主人が二、三回訓戒を与えた後という条件はあるが、持ち主は彼にクビキをつけ、売却のために市場につれていった。悪行状のためにつづけて三ないし四回売却された者の場合は、それを人身供儀のための奴隷として購入することができた。

## 学校教育

数世紀にわたってメキシコ中央高原盆地では、たびたびの部族の侵入と部族間での数多い戦闘が展開されたことを考慮するなら、かれらが、その若者たちの戦闘訓練につねに関心をはらってきたことは理解する。このことは、おそらく早い時期にそうした目的のために、その超自然的な力をもってかれらを保護する守護神をかかげた特別な機関を生み出したことだろう。こうして、ナウア族の間には軍事的目的をもった最初の教育機関が出現した。

歴史時代におけるメヒカ族の学校教育は、主に二つの教育機関、カルメカクとテルポチカリにおいておこなわれた。双方ともその起源はおそらくメヒカ族の古い初期の時代にまでさかのぼるであろうが、その時期がいつ頃であったかを知るするすべはない。この二つの教育機関のそれぞれの特色は、カルメカクがケツアルコアトル神にささげられているのにたいし、テルポチカリはテスカトリポカ神の守護にゆだねられていることであった。

モテクソーマ・イルウイカミナ王の命令は、国家改造計画のなかにおいて、これらの教育機関の運営のための一連の規則を確立した。そこで与えられる訓練の内容、教育をゆだねられる者、生徒の生活形態のあり方などである。その命令自体が、厳格な統制あるいは国の側からの強い介入をうかがわしめる。後に、モテクソーマ・ソコヨツィン（二世）が、新しい王（トラトアニ）に選出されたとき、テパネカ人トトキウアットリはその口上で次のように述べている。「――お前にこの市にある学校、コレヒオ、寄宿舎をゆだねる。ここからは、戦争のため、また神に仕えるために教育された若者が旅立つ。いつでもそれらが増強されるよう配慮せよ」<sup>62</sup>と。トラトアニは教育事業の最高責任者であった。王は教育を聖職者グループにゆだねたが、かれらはその仕事をきわめて重視した。

カルメカクとテルポチカリにおける学校教育が開始される年齢については、クロニスタたちの記述には一致がみられず、そのためにそれを定めることは不可能である。モトリニアは、要人の子弟は、五歳になると、神々に奉仕し、宗教に関する事柄を教育されるために寺院に送られたと述べており、――コルテスは、要人や主だった市民の子弟は7ないし8歳から寺院にいたと書いている。メンドーサ絵文書によれば、若者は15歳になってはじめて、聖職者あるいは戦争技能の教師の指導にゆだねられた。<sup>71</sup>おそらくこのデータはカルメカクあるいはテルポチカリへの入学についてではなく、これらの機関であたえられた、より上級の段階の教育の開始について述べているのであろう。学校教育の開始は10歳ぐらいかそのちょっと前というところがほぼ確実かと思われる。

カルメカク *calmécac*

カルメカクの語は、ナワトル語で、「家」を意味するカリと、「ひも」を意味するメカ

トルの合成語である。それは、ふつう「家々の列」<sup>97</sup>と訳される。モンソンはそれを「家のつらなりの場」と訳している。「つらなり、家系」は、それを人間の代わりに文化に関連することとするなら、問題なく「伝統」と置きかえることができる。カルメカクは、トゥーラにおけるすばらしい文化的伝統を代表する神として崇められたケツアルコアトル神の保護の下にあったことを思い出すべきである。カルメカクのための教育の内容はこの傾向をはっきりと示している。その教育の内容は、テルポチカリにおけるそれとは好対照で、部族の歌や歴史および暦の知識にかんする聖なる本の解釈をつうじて、文化的価値を伝達することを多く含んでいた。言葉をかえれば、そこに、すべての文化的伝統が保存され、新しい世代に伝達されたのである。

カルメカクは、クロニスタたちがふつう、それを区別することなく、若者たちは神殿におくられたと言っているように、神殿の内部あるいはそのそばに設置されていた。最近の歴史家は「聖職者のコレヒオと神学校は、それらの寺院の境内にあった――」<sup>98</sup>と述べている。テノチティトランにいくつのカルメカクがあったかを正確に知る手段を我々はもっていない。モンソンは六つあったと言っている。サアグンの情報提供者の資料は、トゥリラン、メヒコ、ウィッナウアク、テトランマン、トラマツィンコ、ヨピック、ツォンモルコの七つを数えている。

ふつうよくカルメカクには要人の子弟が、テルポチカリには平民の子弟が入学したと言われる。だがこうした断定はあまりに単純すぎる、というのも、おおくのクロニスタの証言は事態はそれほど単純でなかったことを示しているからである。サアグンはつぎのように書いている。

こどもが養育された後、かれの生活がうまくゆくようにと望む親たちは、神々がまつられる神殿にかれらをゆだねた。このことは親たちの意思によるものであり、カルメカクとよばれる家、あるいは、テルポチカリとよばれる家に子どもたちを入れた。<sup>100</sup>

同じ筆者による、息子を神殿にささげる儀式についての記述には、貧しい者の息子のケースにも言及がある。裕福な商人の子弟がまたカルメカクに入学したことをうかがわしめる別の資料もある。フエリペ二世の侍医フランシスコ・エルナンデスはまた、親たちは、「その息子たちの各々の『性質にしたがって』カルメカクかテルポチカリを選んだと注記している。とうのも一方ではその訓練はきわめて厳しく、もう一方ではそれほどでもなかったからである」。ポマールはテシュココのカルメカクについて述べながら、そこでは王やその他の首長たちの子弟とともに「何人かの平民」がいたと証言している。またアマンテカと呼ばれた羽根飾り職人は「トルテカ風の仕事」<sup>101</sup>を学ばせるためにその息子をカルメカクに送ったことも知られている。またサアグンは別の部分で、メヒカの聖職者のヒエラルキーの最高位の二つのポストは、その者がそうした権威にふさわしい人物であることを条件に平民の子弟にも開かれていたし、また「選出においては、家系ではなく、習慣

や訓練、教義と良き生活態度が考慮された」<sup>12)</sup>と断言している。

カルメカクへのこどもの入学に先だって、親によって誓願がなされた。すなわち、それは、息子をケツアルコアトル神にささげる宗教的性格を帯びていた。この誓願は、そこに入学する年齢にとうたつするずっと以前に、あるいは入学の直前におこなわれた。献身の誓願は親によって用意された宴会においておこなわれ、そこには、招待者として神殿の聖職者＝教師が出席した。かれらにむかって家の長老は、つぎのような長々とした口上を述べた。

ああ、親愛なる聖職者にしてわがの神々の司祭たちよ、あなたがたはわが家におみえになり、全能のわれらが主はあなたがたをつかわした。われらが神はわれわれに、首飾り、あるいは貴重な羽根（子どもの隠喩）、ひとつ創造物を与えるというお恵みを下されたということをわれわれはあなたがたにお知らせする。この男の子が育てられ、生き、りっぱな男子なるに値するなら、かれを家にとどめて女子の仕事をあたえることは適当でなく、われわれはあなたがたに息子としてかれをあずけ、かれをあなたがたにゆだねよう、今ここにカルメカクという家に入れるために、ケツアルコアトル神、別名トリルボトンキにかれをささげよう。この場所で、祈り、涙やさけび声をともなう苦行をおこない、神がかれらに慈悲の心をしめし、豊かさをお恵みくださるよう乞い願いつつ、神の恵みをたまわるようにと。これより、われわれは適当な年齢に到達した際に、そこで育てられ、高貴なかたがたの教育を受け、わが神の家に入り、生活するように、またこのわれらの男の子が神の家を清掃する仕事をひきうけるよう彼を提供します。

親の側からの息子の提供というこの口上にたいして、聖職者たちは、つぎのような言葉で返答をあたえた。

われわれはそれを聞く価値のない卑しい者ではあるが、君たちの愛すべき息子にしてわれわれの宝石あるいはりっぱな羽根飾りが、カルメカクに入り、生活するという君たちの話をここに聞いた。この話がなされたのはわれわれ自身ではなく、ケツアルコアトル神、別名トリルボトンキにたいしてである。神に代わってわれわれがそれを聞いた。君たちが話かけているのは神であり、神は君たちの首飾り、そして貴重な羽根にとって、および君たちその親たちにとってなにが良いことであるかを知っている。卑しきしもべたるわれわれは、心よりそのことが実現するように希望する。われわれは、君たちあるいは君たちの息子の将来についてなにも確約できない。われらが全能の神に君たちの息子によくして下さるやうにとわれわれは祈ろう。<sup>13)</sup>

家族と聖職者＝教師の間でこうした儀式的やりとりがすむと、親は子どもをささげるた

めにケツアルコアトル神の像の前にかれを連れていった。もしそのこどもがまだ小さい時には、それをふたたび家に連れ帰り、適当に年齢になるまでそこにとどめ、もしすでにその年齢にたっていた時には、かれを残してただちに聖職者＝教師の手にゆだねた。

カルメカクの教育は目的として次の三つを掲げていた。第一に、それは「統治する者、部族の仕事にあたる首長、高位政治家、貴族が養育される場であり、そこから今、国の高座と高位を占めている人々が出る」ところである。第二に、それは「軍事的指導の地位につく者、殺し、血を流す者たち」<sup>14)</sup> が養成される機関でもあった。第三に、それは「神々の司祭たち」<sup>15)</sup> の育成のセンターであった。

これら三つの目的のどれかを生徒のひとりひとりに実現するために、国王はかれらを、禁欲と厳しさが鉄則とされた生活形態にゆだねることを良しとした。カルメカクは、その生徒にとっては「嘆きと悲しみの家」であり、そこではそのひとり一人が「屈伏させられ、蔑まれ、卑屈」であらねばならない所であった。それは、若者たちが熱心な聖職者たちの厳しい監視の下で、「清潔、謙遜、貞潔」<sup>16)</sup> に生活しなければならない訓練の家であった。彼らにはきわめて厳格な戒律によって規制された生活が期待され、その忠実な遵守は出自の区別なくすべての者に平等に要求された。「ほかの首長あるいは要人あるいは平民の子弟たちと区別なく、王の正統の息子たちでさえ、腰部をおおう綿の腰布とヘネケン麻のざらついたマントだけですごした」し、また「一日に二度の食事をした----- さらにかれらには必要と思われ、聖職者がかれらの各々に一つないしは二つのトルティーリャを投げ与えた、それは、たとえ王国の唯一の継承者であろうとも、丁重さも礼儀もなく、まるで人が犬にパンでも投げ与えるような態度であった」。<sup>17)</sup>

カルメカクでの生活は、訓練と本来の意味での教育という二つの側面をもっていた。前者はさらに、二つのタイプ、すなわち身体的鍛錬と宗教的性格の訓練に分けられた。

カルメカクにおいては、きわめて幼いこどもまで——モトリニアによれば、要人たちはその子弟が五歳になった時に神殿への奉仕のためにおくりだした——未明に起床し、ほうきを手にしての神殿の清掃、自己犠牲の儀式に使用するマゲイの刺、祭壇をかざる木の枝、けっして火をおとすことのないかまどのための薪をあつめることを義務づけられた。さらに、一種の奉仕活動として、掘割や水道橋の建設や修理、干乾しレンガの生産、神殿に所属するトゥモロコシ畑での農作業などの公共的な仕事に動員された。

カルメカクの生徒の宗教的訓練は、夜中に、二人連れで、神へのお香を焚き、自己犠牲の儀式に使ったマゲイの刺を地に埋めるために山にでかけること、真夜中に起き、できるかぎり冷たい水で沐浴し、神々に祈ること、きめられた戒めの日々に断食をまもること、寺院の灯明を徹夜で見守ることなどからなっていた。<sup>18)</sup>

カルメカクの生活についてのクロニスタたちの記述は、ほとんど知られることがなかった行者的生活について語っている。その目的は、身体を暑さ寒さにたいして耐えるようさせること、空腹、渇き、睡魔をたえ忍びながら、まったくの禁欲生活に慣らしめることであった。これらすべては、経済の面においてはその相当の部分を、その軍事的支配に服属した諸部族のさしだす貢納物にたよって生活していたメヒカ人への最大の要求であった。

若者たちにはわずかの睡眠時間しか許されず、娯楽やムダな時間はまったくなかった。さらに、若者は、つねにわずかの油断もカルメカクの規律への不服従も許さない、聖職者＝教師の細心の監視の下に置かれた。その規則への違反はどのようなものであれ、きわめて過酷な厳しい罰をかされた。上長への尊敬のを欠く、真夜中の苦行の時間への遅刻、隠れて物を食うことなどは、いら草での鞭打ち、出血するまでマゲイ（りゅうぜつらん）の刺でさす、逆さづりにしてとうがらしを焼いた煙を吸わせる、などの罰をあてられるのに十分な理由であった。メヒカ人によって憎悪された行為である泥酔や不倫は、そうしたことを犯した者への絞殺、あるいは火あぶりの刑の理由となった。

カルメカクの生活は、その戒律の遵守において、テルポチカリのそれよれもはるかに厳格であつことは疑いようもないが、しかし同時に、生徒のひとりひとりの側で自分自身を完全に支配することの達成をめざしたこうした全訓練システムは、きわめて効果的であり、めざされた理念を完成させたことは明白である。こうした性格のゆえに、この機関からは生活の浮沈を前にしても容易に動じるところのない沈着な人々がうみだされた。

ポマールによれば、カルメカクでは、

彼らに、良き話術、良き統治法、正義を聞き入れること、----- それにふさわしい年齢にたっている時には、円楯と棍棒、火打ち石の穂先をつけた槍をもって戦うことを教えた。別の者たちは、歌やダンスを学ぶために歌と踊りの家に通った。ある者は球技おこなった。<sup>19)</sup>

さらにサアグンは次のように述べている。

かれらにすべての歌が教えられた。それらは聖なる歌とよばれ、その歌詞は文字によってその本に描かれていた。さらに、インディヘナの天文学と夢占い、暦の知識が教えられた。<sup>20)</sup>

メヒカ人の間では、人間の言葉は、われわれの場合よりも、より神秘的な意味をもつとされ、そのため、あたかも宝石でもあるかのように、それを語る人の心の内奥にしまわれた財宝と呼ばれた。つまり、良き話術は、特別かつ洗練された訓練を要求するのであり、そのために、「古老が若者にそれを教える学校、コレヒオあいしはセミナリヨのようなものがあつた」。<sup>21)</sup> メヒカの文化はすでにそうした程度の洗練に到達しており、そこでは政治、社会的な生活には、特別の言葉づかい、教養ある者、ナワトル語でテクピリャトリと呼ばれたそれが必要とされた。

ポマールによって指摘された第二の教育目的は、良き統治と司法の技術であつた。テソソモックによれば、過去のトラトケの息子たちの多くは、聖職者たちが「世界を統治し支配すること」を教えるカルメカクに住んでいた。アウイトツォトルは、王に選出された時、ティランカルメカクにいた彼の年老いた養育係をひきもどし、モテクソーマ二世もまた彼

をさがすためカルメカクに出かけねばならなかったことはよく知られている。

第三の分野は軍事教育である。これは欠くことはできなかった。なぜなら、トラトアニをはじめとして、メヒカの要人は、勇者でかつこの技術の熟達した人であらねばならなかった。裁判の判事となるためにも、征服戦争の経験者で戦争の技能を理解した者であることが要求されたし、また聖職者はその神々の像を背おって軍事遠征に参加した。サアグンによれば、軍事的訓練をその最大の関心とした機関であるテルポチカリの卒業者は、しかしながら、軍隊の下位の任務しかつづことができなかった。このことから、メヒカの「参謀本部」はカルメタクで教育をうけた人々によって構成されていたと推測してもまずまちがいないであろう。

ポマールによって言及された歌とダンスに関しては、我々はすでにその目的は軍事的性格のもの、すなわち、兵士の士気と気力の鼓舞にあることを知っている。歌と踊りのもう一つの目的は宗教的意味あいをもっていた。サアグンは次のような引用文をひいている。

踊りと小太鼓、鳴りもの、歌に注意をはらえ。これらによって君たちは、民衆を鼓舞し、あらゆるところにおられるわが神になぐさめを与えるのである。これによって君たちは、自分たちにお恵みを下されるよう請い願うのである。----- なぜなら楽器をならし、歌をうたうことは、われらが神にお恵みくださるよう懇願することだからである。

歌と踊りには、これほどまでに重要性があらえられていたのであり、もしある歌い手あるいは楽士、踊り手が誤りをおかした時には、かれに死刑が宣せられた-----。

カルメカクにおいて用いられた教育方法を知るためにイシュトリショチトリを引用しよう。「メヒカ人の中にいた哲学者や賢者が、かれらが知り、達成していた諸科学のすべてを書き留め、かれらの科学と歴史とを記したすべての歌を記憶しておいて教える仕事についていた」。メヒカ人の文字の到達していた発展段階は、日付、地名、重要な人物の名前などの歴史的データを書きとめることを可能にはしていたが、それでもそれは精神的感情的なあやを書きとどめるには不完全であった。先スペイン期の文書の内容は、説明や適切な解説を欠いては、理解不可能な、一群の絵文書として保存されていた。ここから、記憶術によってこれらのデータを補足する学習法が必要とされた。それゆえ、カルメカクには、その分野でのスペシャリスト、すなわち絵文書の解説者がおかれた。かれはつぎのようなかたちではたらいていた。

私は本の絵文字をうたう、  
私はそれを解きあかす、  
私は華麗な鸚鵡  
わたしは絵文書を解き語る、  
絵文書の家の中にいて。<sup>22)</sup>

文書の解説は、韻律をつけた章句のかたちで生徒に伝達された。こうした教育の結果として、「彼らのなかには、本を見ることなく、勝利の場面も首長たちの家系について数えあげ、物語るほどにまでに暗記した、記憶力にすぐれた人々がいた」。<sup>23)</sup>

カルメカクにおける若者の生活は、共同生活であり、一緒に食べ、眠り、学習し、働いた。その生計は、寺院に属し、かれら自身がその耕作に従事した耕地のうみだす収入によってまかなわれた。ある家族が寄付をおこなった時には、それはすべての者に平等に分けられた。おそらく、カルメカクの学生である間は、かれらが自分の家に帰ることは許されなかったであろう。

若者がその機関を離れるのは、結婚の時期がきたときであった。いっばんに、20歳で結婚をした。独身は、聖職者の生活を選ぶ時にのみ正当化しえた。適齢期になった後でも結婚生活から逃れる者は、あざけりの対象とされ、トラシュカラでは嫌悪のしるしとしてトラ刈りにされた。結婚もせず、聖職者にもならない者は、カルメカクから追放された。われわれは、メヒカの教育は、カルメカクを通じて、メソアメリカのあらゆる文化的伝統を、すべての民衆に普及するのではなく、いかに社会の少数の者に集中させてきたかを見てきた。悪いことには、そうした少数者は、しかるべき時には、最高位の軍事指導者であり、スペイン人の征服戦争が生じた際には、自然にかれらを、その社会を防御する仕事の最前線にたたせることとなった。ここにおいて、そうした最高位の数少ない指導者の多く——政府の高官、博識の聖職者——が失われた。彼らはコルテスと協定を結ぶよりも、自分たちのものを防衛しながら死ぬことを選び、最終的には、彼らの社会は首脳部を失う結果となった。「メヒカ人は、二十四万人以上が死に、そのなかにはほとんどすべてのメヒカの貴族たちが含まれていた、そのためこどもや年少のものも含めて首長や要人はほとんど残らなかった」。<sup>24)</sup> 戦争を生きのびた者は、どこでもよくみられることであるが、後に勝者の配下となった。こうして、メヒカ社会は、その政治的頭脳のみならず、その固有の文化、すなわちカルメカクで教育を受けた人々のそれ、をも失った。トナラマトル、シウアマトル、テミカマトル、その他のメヒカの文書は、いまではそれを解説できる者のない理解不可能な紙の山と化してしまった。

#### テルポチカリ (telpochcalli)

テルポチカリが、カルメカクの場合と同じように、寺院の内部に置かれていたかどうかについてはハッキリとはわかっていない。ある歴史家たちの記述は、それが別の建物をもっていたことを示唆している。

こうしたこどもたちのために、多くの生徒が集められる学校ないしは家塾のような特別の家があった。<sup>25)</sup> -----平民の子弟の大部分は町にあったテルポチカリと呼ばれた別の家で養育された。----- そこではまた寺院の聖職者によるそれと同じく、習慣や教義が教えられた。<sup>26)</sup>



テルポチカリにおける教育の性格は、それが寺院の内部あるいはそばに置かれることを必要としなかった。モトリニアによれば、各カルプリはそれぞれのテルポチカリを用意していた。<sup>27)</sup> フランシスコ・エルナンデスはまた、「メヒカのどの集落にも五つのテルポチカリの家があった」と述べている。そこに入った若者のうちの大部分は、平民の息子であったが、そこにもまた、テノチティトランの指導者グループの息子がいたことを推測させる資料もある。

おそらく、こどものテルポチカリへの入学は、その親たちがずっと以前になしていた誓約を遂行したものにほかならなかった。親たちによる息子をさし出す誓願は、教師を招いてもよおす宴会の席でなされた。すべての準備が整うと、親はテルポチトラトケ（テルポチカリの教師）に向かいつぎのような口上を述べた。<sup>28)</sup>

〔後掲の史料集のサアグンのものの訳を参照のこと——訳注〕

テルポチカリの生徒が寄宿生であったかどうかについては、資料によって一致していない。サアグン、モトリニアによれば、「----- 各テルポチカリの家で、すべての者がいっしょに寝たし、これらの家で寝ない者は罰せられた」、「だれも自分の家に寝に帰らなかった」<sup>29)</sup>、「また、その家にいる時でも、穀物の種まき、耕作、収穫、収蔵など自分の親を助けるために、許可を得て、数日間外出した」<sup>30)</sup> という。

トルケマダの証言は、別の面を浮きぼりにしている。テスカポリトカ神にゆだねられたこどもたちは、テルポチカリに入る前からその守護神への奉仕のためにはたらいた。別の言い方をすると、そのこどものために、家でその両親の世話のもとでおこなわれる家庭教育の他に、就学前教育とよびうるような教育ないしは訓練の期間が存在していた。こうして、おおくのメヒカ人のこどもは、小さい時から、社会への奉仕のためにはたらくことを学びつつ、共同体的な雰囲気の中で養育された。

テルポチカリの生活は、カルメカクのそれに比べれば厳しさや過酷さの度合いは小さかったが、それでも厳しいものであることにはかわりなかった。その教育の目的は、ウイツロポチトリ神の神秘的・戦闘的理念に奉仕する勇敢な者、良き兵士を形成することであり、そのため第一段階におけるすべての活動は、身体的鍛錬と規律への服従の促進に向けられた。家を清掃し、かまどに薪を運び、苦行の自己犠牲をおこない、戒律の期間に断食をまもることを義務づけられた。また自分たちの生計のためにテルポチカリに属する土地を耕作したり、寺院、トラトアニの宮殿、要人の屋敷、掘り割りや水道橋の建設や修理、干乾しレンガの製作など公共事業や共同作業に従事することを義務づけられた。夜でさえも何もないわけではなかった。踊りや歌の練習をつむため「歌の家」クイカカリに送られた。練習は真夜中すぎに終わり、それでやっと床につくことができた。しかし、修練的禁欲主義は、睡眠の時間にさえも入りこんだ。「すべての者は、踊りの時に使ったそのマントだけを身につけ、裸で寝た、そしてわずかの眠りの後、要人の宮殿にゆくために起床した」。<sup>31)</sup> 一言でいうなら、モトリニアがいみじくも指摘しているように、「一刻でもボンヤリ

していることは彼らには許されなかった」のである。これらの若者の生活の規律の面についてこの歴史家はつぎのように述べている。

----- かくも多くの命令をうけ、かくも多くのことが彼らに課されていたので、彼らは、夜であれ、昼であれ、山でも、谷でも、ときには雨のなか、ときには炎天の下、すべての事を、言い訳をはさむことなく、かけあしでなさねばならなかった。そのさまたげとなるものは何もないよう見えた。<sup>82)</sup>

テルポチカリの生活がカルメカクのそれと比べてそれほど厳格でないことは、例えば、テルポチカリにおいては、情交は合法的行為であり、一人以上の愛人をもつことも認められたことに示されている。しかし、逆に、泥酔は死刑の理由とされた。

カルメカクの若者は十五歳で軍事訓練をはじめ、二十歳でもう戦場に出た。このことはテルポチカリにもあてはまると思われる。一般には、その年齢以前でも十分に成長し、戦場にたえうるとみられた者は、戦闘の雰囲気を知り、それに慣れるためにベテラン兵士の装備を担いで戦場にでかけたようであるが。「これらの若者のあるものは、戦争にでかけた。最も屈強な者は武器をとり、その他の者は、戦争がどのようにおこなわれるのかを見て学ぶために」。

20歳になると、かれらに結婚の準備をさせるために、親たちはテルポチトラトケにたいして息子を共同体の生活につれ帰る許可を求めた。もしその家族が裕福なら、親たちは10あるいは20着のクアチトリ——メヒカ人の間で貨幣のかわりをした一種のマント——を「授業料」<sup>83)</sup>として教師たちに送った。

テルポチカリで養成された若者の未来は、ほとんど戦場におけるかれの幸運と勇壮にかかっていた。もし、ある若者が自分ひとりで一人の捕虜をつかまえたなら、かれは勇者として認知されるためにトラトアニに御前にみちびかれ、またトラトアニは彼にテルポチトリ・ヤキ・トラマニ、すなわち「若者、戦士、捕虜捕獲者」の称号を与えた。ヤキとはテスカトリポカ神の別名でもある。何人かの初年兵たちが捕虜を捕らえるために協力しあうことも許されたが、その際には、栄誉も彼らの間で分けられた。しかし、二人目以降の捕虜の場合は、その仕事は共同ではできず、それぞれが一人でやらなければならなかった。もし、戦場で、捕虜は捕らえるという幸運にめぐまれたなら、社会階層を上昇することもできた。テルポチカリの教育の最大の重点は、明らかに軍事的分野におかれており、またその成果はカルメカクの教育のそれとはきわめて異なっていた。たとえば、宗教的側面において、テルポチカリの若者には、カルメカクのそれと「同じ習慣や教義」が教えられたが、しかし「その儀式に関することは除かれた」。<sup>84)</sup> また良き話術も教えられなかった。かれらに文書の解説をベースにして歴史が教えられたか否かについては我々は資料的裏付けをもっていない。こうした欠如とそこで許された生活の自由は、その卒業生たちが社会の最高位をしめることを妨げた。つまり、テルポチカリは、文化的諸価値の伝統にはかわらず、下級の兵士と下士官を養成するための施設であった。

メヒカの社会が、その臣民の若者の大部分を、社会的上昇志向をもたない軍隊の良き構成員として教育することに関心をもった時、それが教育の目標の一つとなった。若者を軍事技能の行使に習熟させ、また歌につうじて、国の公式の政治的・宗教的使命観を吹き込むことが目ざされた。これをこえることはなかった。社会の高い文化的知識を身につけ、また公的生活のなんらかの部門で指導力を発揮するような若者をそこから生み出そうとは考えなかった。テルポチカリにおける教育は、戦争のための役立つすぐれた人材、トラトアニの上からの命令に盲目的に従う者を用意することにのみ関心をよせた。一つのいい例は、歴戦の勇士(クアクアチクティン)にみることができよう。サアグンの述べるところによれば、かれらは「戦争にその人生をささげてきた者である、というのもめくらめっぽうに闘い、生活にはなんにも関心をもたず、激闘のすえ死ぬことだけを考える」、しかし同時に、「統治といったことにはからきし無能である」というのもかれらは狂人じみた者だからである。「向こうみずでしゃべり方やからかい方も荒っぽく」りっぱな仕事はけっしてクアクアチクティンのだれにも任せられなかった。換言するなら、なんらの知的準備もなく道具として役だつ者として扱われたのであり、かれらを動かす適切かつ有効な命令の系統が機能している間には、任務を完遂したが、スペインの征服の時に実際におこったように、ひとたびこれらが欠けた時にはまったく無力となりはてた。

#### 女子の学校教育

メヒカ族の社会においては女性まず家庭のために生まれた。資料は、テノチティトランの政治に関与した女性についてかぞえるほどの事例を示しているにすぎない。家庭以外の場での女性の活動は、宗教と社会的分野に限られた。商人(ポチテカ)の間では男とならんで商業に従事する女性もいたが、最も重要な彼女らの仕事は、糸つむぎ、織物、刺しゅうをすること、トウモロコシの製粉、トルティーリャを作り、その家族のため食事を準備すること、家を清掃することであった。女子の新生児の洗礼の儀式の際に、これらの道具のミニチュアが彼女らに手わたされることにそのことが象徴的に示されている。メヒカの女性の理想的イメージは、神々への献身、結婚以前および以後の貞潔、そして要人の女性では鷹揚さ、平民の場合には働き者、といった徳が要求された。しばしば、女性の美德として、重厚さ、勇壮、そして男まさりといったことまで含まれることがあった。

それゆえ、国は少女の学校教育に、少年のそれほどには関心と熱意をはらわなかった、ということも不思議なことではない、というのも女子の場合、その目的は家庭環境のなかで達成しえたからである。しかしながら、現実として、メヒカの社会は就学年齢の少女の教育をまったく家庭の親の世話にまかせきること望まず、資料によれば、カルメカクおよびイチポチカリ(ichpochcalli)が彼女らの教育をひきうけた。

テノチティトランに女性の教育ないしは訓練のセンターが存在していたことは、初期の征服者たちの注目をあつめた。その一人、ディアス・デル・カステージョは、後年つぎのように書いている。

----メヒカの住民の多くの娘たちは、寄宿舎のようなところにいて、修道女のまねごとをし、また織物をおり、羽根飾りをつくった。これらの修道女はウイチロボスの大きな寺の近くにその家を持ち、結婚にいたるまでその親がその神にあずけた娘たちを保護監視する者たちであった。<sup>85)</sup>

カルメカクもイチポチカリも少女たちの教育を担った。少女たちは、これらの二つの教育センターのうちのどちらかに、というよりむしろそれぞれの保護者となっている神格に委託された。カルメカクにゆだねられる少女の母親は、こんどは、自分が20日毎に、奉仕のためにほうき、薪、コパル香を奉納しに神殿に行くことを誓った。ずっと後にカルメカクに入学して、結婚のためにそこを出るまで、そこで老女教師の監視の下、修道女見習いのような生活をした。

カルメカクの少女たちとは違って、イチポチカリの少女たちは、いつでも共同生活を送っていたわけではなく、ひんぱんに自分の親の家にとどまったと思われる。このことは理にかなったことでもあった、というのもメヒカの少女たちは、ちいさな時からその母親を助けて家庭の仕事を引きうけてきたからである。綿の種ぬき、ちいさな兄弟姉妹の世話、そのほか簡単な仕事がまかされた。

カルメカクとイチポチトリの他に、メヒカ人の中には第三の女性教育のかたちがあった。それは宗教への奉仕である。ある一定の期間、神殿ですごしたいと望む少女あるいは大人の女性は、自分の意思においてそうすることが可能であった。そこに住む者たちは、責任者の厳しい監視の下に置かれ、とりわけその清廉貞潔にきをつけた。寺院に入る時には、ほかの者と区別するために髪を切りつめた。少女らは、いっしょに寝、おなじ物を身につけた。自己犠牲の苦行をおこなうよう義務づけられ、また寺院にいる間は、きわめて粗末の食事をとった。こうした宗教的性格の訓練のほかにも、寺への奉仕の仕事、宗教的な装飾を作るための糸つむぎ、織物、刺しゅうをし、神々とその司祭のための食事をつくり、寺院の清掃をおこなわねばならなかった。またいくつかの祭りには、マセウアリットリ、すなわち神をなだめる踊りに参加した。寺院に滞在している間、その生計は主として彼女の家族によってまかなわれたが、「市民からの恵み物」や「彼女たちのためや奉納物のため必要と思われた時に、肉や暖かいトルティーリャをさしいれた豊かで善良な人々からの布施や慈善」もまたあった。少女が結婚適齢期になったとき、親たちは、神々と教師たちに感謝をしめす儀式をおこなってそこから娘をつれもどした。

フランシスコ・エルナンデスによれば、少女や女性が隠遁生活にはいる理由はさまざまであったという。あるものは、病気の回復を神に祈願しての苦行のために、ある者は、家庭の貧困のための口べらしのために、ある者は、豊かさや幸運が与えられるように願い、別の者は、神々への献身と奉仕の生活を求めて入った。しかし、最大の理由は、神々に良き伴侶がえられることを請願するためであった。つまり、それは、少女に結婚生活のために準備をし、訓練を与えるための一つの手段となっていた。それは、宗教的権威の下で、彼女たちをあらゆる醜聞の危険から保護していたのである。

## 補助的な教育機関

資料によれば、それについての論及は少なく明確でもないが、補助的とでもよべるその他の教育機関があった。

### クイカカリ (cuicacalli)

クイカカリは「歌の家」を意味した。ドゥランは、テノチティトラン、テシュココ、トラコパンにクイカカリがあったと述べている<sup>36)</sup>。それは中央に中庭をもった集合的建物であった。テルポチカリの若者は、日中の仕事が終わると、日没のすこし前に、歌や踊りの練習のために用意されていたクイカカリに集合した。少女たちもまた参加した。クアクアチクティンと呼ばれる勇敢な人々がその練習を指導した。その練習は夜遅くまでつづき、それが終わると、少年、少女たちの貞潔を監視している老人と老女がそれぞれを、それぞれの家、あるいはテルポチカリあるいはイチポチカリまで連れていった。愛人をもっている者は、それぞれの愛人の家で寝た。

クイカカリでの活動は、娯楽的性格のものではなく、宗教的意味をもった国家の学校教育プログラムの一部を形成していた。それはテルポチカリおよびイチポチカリの若者にとって義務とされた活動であり、それを欠かすことはそのために特に設けられた処罰の対象とされた。

こうした活動の間に調子をつけて唄われる歌の多くは、口承で、歴史やトラトケの偉業およびそのほかの記憶に値する人物をおしえこむことを目的としてもっていた。さらに、なにか祝祭の理由になることがら——軍事的勝利、新しい王の選出など——があるたびに、詩人＝歌い手は、古い偉業や過去の王の栄光を記録してたたえるための歌を作った。戦場における勇敢な兵士の戦死は、「同じような死者を悼むことを仕事としているすべての古老の歌手がそのはたらきにふさわしい歌をつくる」<sup>37)</sup> ための別の機会となった。こうしてみると、メヒカ人の間には、一つの熱心な文芸的活動があり、こうした叙事的作品を通じて、若者たちは、国がかれらの心のなかに喚起しようとした政治的思想や人生観を身につけていったということができよう。また、モテクソマ二世の前で、休息の時間に娯楽のためにこうした歌がうたわれることもあった。

### トラマカスカリ (tlamacazcalli)

この機関についてはドゥランの著だけにその言及がある。この語は「聖職者の家」を意味している。カルメカクの生徒の中に聖職者となるにふさわしい傾向のある者がいたとき、「学習で欠けていることを教える」べつの高等の宗教的訓練センターへと入れるために選別された。聖職者にむいている若者の選別はカルメカクの中からだけでなく、またテルポチカリのなかからもなされた。後者の場合、トラマカスカリに入る前に、カルメカクでなすべき学習もすませたものと想像される。トラマカスカリの生徒は、十八から二十歳の若者であった。ケツアルコアトルとよばれる最高神官およびそのほかのメヒカの宗教的階層の高位の権威者たちはこの高等神学校で教育された。

### メカトラン (mecatlan)

この語は「細ひもの場所」を意味する。これはトラソルクアクイリとよばれる神官の管

理の下におかれていた。それは一種の音楽アカデミーであり、そこではマセウアリツトリの上演に必要とされる楽器類の演奏技術が教えられた。ここでもメカトルという言葉が、カルメカクについて述べたのと同じ意味をもつのかどうかについては確信がないが、たぶんそうであろう。というのもマセウアリツトリに伴う歌は、過去の首長たちの偉業や栄光を歌ったものであり、すなわち、メヒカの民衆に歴史と伝統を教えこむ役割をはたしたからである。

#### 聖職者トラピシュカトツィン (tlapixcatzin)

テノチティトランには、民衆に教育をおこなうことを使命としてもらったトラピシュカトツィン、「保存者」とよばれるひとりの聖職者がいた。

保存者は、神々の歌、すべての聖なる歌に注意をはらった。だれもまちがいをしないように、すべてのバリオにおいて聖なる歌を人びとに、細心の注意をはらいながらおしえた。民衆を寄せあつめ、かれらがよく歌を学ぶよう大声でふれ歩いた。<sup>38)</sup>

すなわち、かれはメヒカ国家の神秘的・軍国的思想を社会のあらゆる階層にまで普及すること任務とした民衆教育のエージェントであった。またこの資料からは、このトラピシュカトツィンは、民衆におしえられる歌の校訂者ないしは検閲者ともいえるであろう。

#### メヒカの教育における理想的人間像

メヒカ人たちが持っていた人間像は、ナワトル語の二つの言葉に簡潔に表明されている。すなわち、イン・イシュトリとイン・ヨロトルであり、これは、顔（容貌、面がまえ）と心臓（心）のことである。メヒカ人にとって心とはあらゆる行動と動きのみなもとであった。それゆえに、太陽神に聖なる食物として、またそれゆえに人間が神に提供しうる最も貴重なものとして心臓をささげるために儀式的な人身供犠をおこなったのである。同時に、顔とは、人の内部にある人間性をあらわす最高の表現物であるとされた。顔とは、人格をそなえた人間がそれをもって外の世界と対面するものであった。それによって、内部にある自分自身というものを表面にあらわすものであった。この人間観は、教育にたいするメヒカ人の考えかたの出発点であった。

分別ある男とは  
石のごとく堅固な心  
賢い顔  
顔と心の主  
巧みで理解力に富んだ。<sup>39)</sup>

すなわち、顔と心は、生まれながらのものとしてあるのでなく、成熟した人、あるいはひとかどの人物として、この顔と心という二つの属性は、それぞれ、「賢い」、「石のように堅固な」という形容詞を獲得せねばならないものであった。ここに到達してはじめて、メヒカ人の理想的人間像は、実現されたことになるのである。

「賢い顔と石のように堅固な心」をそなえた人間というのが、カルメカクの教育で追求された目標であった。しかし、このことはあくまでカルメカクの教育について言えるのであり、テルポチカリの教育はこうした二元的な目標の達成を追求しなかった。後者では、まずなにより勇猛、従順、戦争に役立つ人間が教育されたのであり、顔を「賢く」することには関心がはられなかった。

歴史において、しばしばみられたように、メヒカ社会において、教育はその構成員の社会階層分化のための一要因として機能した。この社会の一方には、その地域の文化的遺産のすべてを所有する少数者があり、もう一方には、それらを欠いた大多数の一般民衆がいる、というように。少数のグループが共同体の高い文化的知識——暦、文字など——を独占し、それらから遠ざけられた大衆に命令をあたえる、というメソアメリカ一帯のきわめて古くからの伝統が生きのびていた。

## 注

- 1) Acosta, José de : Historia natural y moral de las Indias. 1966 p.315  
アコスタ『新大陸自然文化史』（大航海時代叢書 岩波書店）1969年
- 2) Durán, Diego: Historia de las Indias de Nueva España e Islas de Tierra Firme.  
1967 tomo 1 pp.216-217
- 3) Zorita, Alonso de : Breve y sumaria relación de los señores de la Nueva España.  
1963 p.92  
ソリタ『ヌエバ・エスパーニャ報告書』（同上）1982年
- 4) Motolinía, Toribio de: Memoriales o Libro de las cosas de la Nueva España y de los naturales de ella. 1971 p.311  
モトリニーア『ヌエバ・エスパーニャ布教史』（同上）1979年
- 5) Ibid., p.309
- 6) Durán, 1967 tomo 1 p.415
- 7) Sahagún, Bernardino de: Historia general de las cosas de Nueva España.  
1969 tomo 2 p.328
- 8) León-Portilla, Miguel: Filosofía náhuatl. 1966 p.224 nota 8.
- 9) Clavijero, Francisco Javier: Historia antiguo de México. 1968 p.162
- 10) Sahagún, 1969 tomo 2 p.211
- 11) - Ibid., tomo 3 p.63

- 12) -       Ibid.,           tomo 1   p. 308
- 13) -       Ibid.,           tomo 1   pp. 303-304
- 14) -       Ibid.,           tomo 2   p. 214
- 15) -       Ibid.,           tomo 1   pp. 298, 303
- 16) -       Ibid.,           tomo 2   pp. 214, 211
- 17) Garibay, K., Angel María: Poesía náhuatl. 1964 pp. 178, 180
- 18) Sahagún,       1969 tomo 1 pp. 305-306; tomo 2   p. 320
- 19) Garibay,       1964   p. 179
- 20) Sahagún,       1969 tomo 1   p. 307
- 21) Acosta,        1962   p. 289
- 22) León-Portilla, Miguel: Los antiguos maxicanos. 1970   p. 66  
ミゲル・レオン＝ポルティエ『古代のメキシコ人』早稲田大学出版 1985 年
- 23) Motolinia,       1971   p. 9
- 24) Ixtlilxóchitl, Fernando de Alva: Obras históricas.  
                  1965   tomo 1   p. 379
- 25) Durán,         1967   tomo 2   p. 108
- 26) Garibay,       1964   p. 181
- 27) Motolinia,       1971   p. 312
- 28) Sahagún,       1969 tomo 1   pp. 298-300
- 29) -           Ibid.,   tomo 1   p. 301 ; tomo 2   p. 311
- 30) Motolinia,       1971   p. 313
- 31) Sahagún,       1969 tomo 2   p. 311
- 32) Motolinia,       1971 pp. 312, 313
- 33) Sahagún,       tomo 2 pp. 151-152; tomo 3   p. 44; tomo 1 p. 302;  
      Durán,        1967 tomo 2   p. 224
- 34) Garibay,       1964   p. 181
- 35) Díaz del Castillo, Bernal: Historia verdadera de la conquista de la Nueva Es-  
                  paña. 1970   p. 170  
      ベルナル・ディーアス・デル・カスティーリョ『メキシコ征服記』(同上)1987年
- 36) Durán,         1967   tomo 2   p. 228
- 37)           Ibid.,   tomo 1   p. 153
- 38) León-Portilla, (ed.): Ritos, sacerdotes y atavíos de los dioses. 1961   p. 93
- 39) -           1966   pp. 222, 229



### Ⅲ. アステカ教育関係史料集

Alfredo López Austin (ed.), La Educación de los Antiguos Nahuas 1 y 2.

1985 からの翻訳

## 1. メンドーサ絵文書の図版

### [ テキストの解説 ]

ここにスペイン語の説明文とともに引用した15の図版（ここではそのうち8つ図版のみ紹介する——訳者注）には、征服以前の時代の個々のメヒカ人の生活が示されている。その誕生の時から、法律によって飲酒が許されるようになる老人になる年齢までの。この文書は、ヌエバ・エスパーニャの初代副王ドン・アントニオ・メンドーサの命令により、1541年から1549年の間に作成されたものである。司教は、征服されたインディオたちの歴史、政治組織、日常の習慣などを絵にしてスペイン本国の王室に報告することを望んだのである。この文書がメンドシーノ絵文書あるいはメンドーサ絵文書の名でよばれているのはこうした理由によるものである。

絵文書は、三つの部分にわかれている。第一部は、年代期のかたちで、メヒコ＝テノチティトランの歴史にふれる。そこでは主に歴代の王（トラトケ）の征服戦争の功績が描かれている。この歴史は、やがて首都となる場所に到達した時——ウチワサボテンに鷺がとまっている場所という神託の奇跡をふくめて——からはじまり、モテクソーマ二世の時代までをあつかっている。第二部は、『納税台帳』として知られる別の絵文書ほとんど同じものである。ここでは、服従した諸部族が征服者であるアステカ族に定期的に献上することを義務づけられていた貢納物の品物とその量が描かれている。余白に貢納する部族のリストが絵文字で書かれている。第三部が、個々人の日常生活に関するものであり、それは教育を中心にして描かれている。おさない子どもの家庭教育から、学校教育、戦場への出発、戦功による昇進、教育的忠告を守らない違反者にたいする処罰、親による家業をつぐ子どもにたいする教育までを含んでいる。

絵文字は、一人あるいは数人のインディオの絵師にゆだねられた。第一部は、インディオの伝統的な記述様式にしたがって描かれており、たぶん古い記録に基づいて描かれたものと思われる。第二部には、上述のように、資料となる古い納税台帳が別にあった。第三部は、征服以後になって描かれたと考えられている、というのも、インディオたちが自分たちの日常生活を絵文字にして書き記していたと想定することは論理的ではないからである。本国のスペイン人たちにインディオたちのかつての生活ぶりを知らせることが必要となり、個々人の日常的な諸活動を絵にして簡潔に説明することが求められた。

文書そのものに書かれているところによれば、船団がスペインにむかって出航する10日前になって、すでに完成していた図版が、ナワトル語とアステカの古い伝統に精通した一人のスペイン人にわたされた。それにスペイン語の解説をつけることが求められたのである。この人物は、とり急ぎ絵の意味を解説するために、それに二種類の文書を書き入れた。ひとつは、絵そのものの上に書き込んだ説明文であり、それぞれの絵が何を意味しているのかを短く説明している。もう一つは、別の頁に解説文として、全体の趣旨を説明したよ

り長いものである。

オリジナルの文献は、縦横32.7センチメートル × 22.9センチメートルのヨーロッパ製の紙71枚に描かれ、説明文がついている。現在、オックスフォード大学のボドレイアン図書館に所蔵されている。最初の版は、1830-1831年に、ロンドンにおいて、エドワード・キング・キングスボロ卿によって作成された。本書の文書と絵は、メキシコで1979年にサン・アンヘル出版からだされたホセ・イグナシオ・エチェガライの版からとっている。

(訳者注——ロペス・アウスティン編集の本書のイラストは印刷が不鮮明なために、本報告書にのせた図版は、1992年にカリフォルニア大学から出版されたフアクシミリ版からとったコピーである)

Frances F. Berdan & Patricia Rieff Anawalt, The Codex Mendoza. 4 volumes  
University of California Press 1992

## 図版 58 の説明文

男の子あるいは女の子の誕生にさいして、メキシコの先住民たちの行っていた儀式と習慣についての説明。

女性が出産すると、この絵のように、新生児をゆりかごに入れ、生まれて4日後に、産婆ははだかの赤ん坊を腕にだいて、産婦の家の中庭につれだす。中庭には、トゥーレとよばれるい草のゴザが敷かれ、その上に、水をいれた小さな洗い鉢をおき、その産婆が赤ん坊を沐浴させ、その後、上述のゴザのそばに三人の少年が座り、かれらがイシクエンとよぶ食べ物、すなわち料理した豆をまぶした焼いたトウモロコシを食べた。その食事あるいはお菓子は、小さな洗い鉢にいれて出された。そして、この沐浴ないし洗浄の後に、こうして沐浴した赤ん坊に新しい名前をつけ、その少年たちにその名前を大声で呼ぶように命じる。その名前は、産婆がつけることを望んだ名前であった。

まず最初に、新生児を沐浴のためにつれだすときに、それがもし男の子なら、かれらは赤ん坊の手に、そのシンボルとなるものを握らせてた、そのシンボルは、その父親が使用する道具、戦争の武器や銀細工師や彫金師その他のあらゆる職業の商売道具であった。以上のことがなされた後に、産婆は母親にその赤ん坊を手わたした。また、新生児が女の子である場合には、沐浴につれだす時ににぎらせるシンボルは、紡錘つきの糸まき棒とその籠、一束のほうきであり、いずれも成長してある年齢になると彼女が使用することになるものである。また男の子のへその緒は、沐浴の際にもたせたシンボルである弓や矢といっしょに、かつて敵との戦闘の場所となったところにもって行き、地中に埋めた。女の子の場合も同様に、へその緒をトルティーリャを挽く石であるメタテの下に埋めた。

その後、誕生20日目になると、赤ん坊の親たちは、カルメカクとよばれる神殿、すなわちメスキータ（イスラム寺院）のようなものに子どもを連れてゆき、高位神官（ここではアルファキ＝イスラム教の法博士という表現がつかわれている——訳者注）の立会いのもとで、マント、腰布、いくらかの食べ物の供物とともに、幼児を神官に提出した。赤ん坊が両親によって育てられた後、適当な年齢に達すると、そこで聖職者になるように教育をしてもらうために上記の神殿の高位神官にあずけた。

もしも両親が、子どもが適当な年齢にたった時には軍役につかせたいと決心するなら、そのような誓願をして教師に提供した。若者たちの教師は、テアチクアウ、あるいはテルプチトラトとよばれる。その提供の誓願は、食事やその他のお祝いのための贈り物といっしょになされる。そして子どもが一定の年齢にたつと上記の教師にゆだねた。

〔それぞれの絵についた書き込み〕

産婦／この4個の石は、4日を意味し、その日に産婆が赤ん坊を沐浴につれだす／赤ん坊のゆりかご／産婆／シンボル／生まれた赤ん坊の名前をよぶ3人の少年／水をいれた洗い鉢をおいたゴザ／ほうき、紡錘、糸まき棒、籠／赤ん坊の父親／高位神官／ゆりかごに入った赤ん坊、両親はそれを神殿にささげる／母親／子どもや若者の教師

mayez fardita



estas quatro cosas significan  
que el p. de la cruzada  
que es a manera de la portera  
la seña de la cruzada



la portera



las insignias



la juncia con  
el libello de ayre

la escoba y facha de oro  
es filla



los tres m. de la cruz  
moneda de la cruz  
na farda

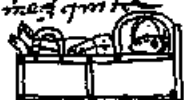
el p. de la cruzada



el alfoqui mayor



la cruzada en suema  
que se faga en sus yndias  
en la meq. q. m.



la madre de la cruzada



el maco de m. de la cruz



## 図版 59 の説明文

次の頁にのせられた絵の説明。ここでは、先住民たちが、どのように生きるべきかについて子どもたちに忠告をあたえるた時期と方法について述べる。絵は年齢順に、四段に分けられている。この頁では、四つの段階がつぎのような順序で説明される。

第一段。ここには、親たちが、年齢3歳となった子どもにたいし、良い助言をあたえながら矯正している様子が描かれている。各食事の時に、子どもに与えられる食料は、トルティーリャの半分であった。

第二段。4歳になった子どもにたいして、両親がおなじような教訓をあたえている様子を示している。かんたんな手軽な手伝いをするよう教えはじめる。一回の食事の量はトルティーリャ一枚となる。

第三段。父親は5歳の子どもに、薪やあまり重くない荷物をもたせたり、市場が開かれる場所に軽い包みをはこばせるといった家の手伝いに従事させている様子が描かれている。この年齢の女の子には、母親が、糸を紡ぐために紡錘と糸まき棒をどのようにあつかうかを教えるためにそれを持たせる。食事はトルティーリャ一枚である。

第四段。父親は、6歳になった子どもに、市場のひらかれる場所にでかけて、商人たちが取引の時にまき散らしたまましていたトウモロコシの粒、豆、こぼれたままになっているその他のささいな物を拾い集めるような、なにか少しでも利益のたしになるような家の手伝いをやらせている様子が描かれている。同じ年齢の女の子には、糸紡ぎとその他のなにか役立つことを教えた。この年齢以上の者には、こうした手伝いや仕事を通じて、ともすると怠惰にしていることで生じやすい悪習を避けるためにも、時間を無駄にすごさせないようにさせた。子どもには食事のたびに一枚半のトルティーリャをあたえた。

〔それぞれの絵についた書き込み〕

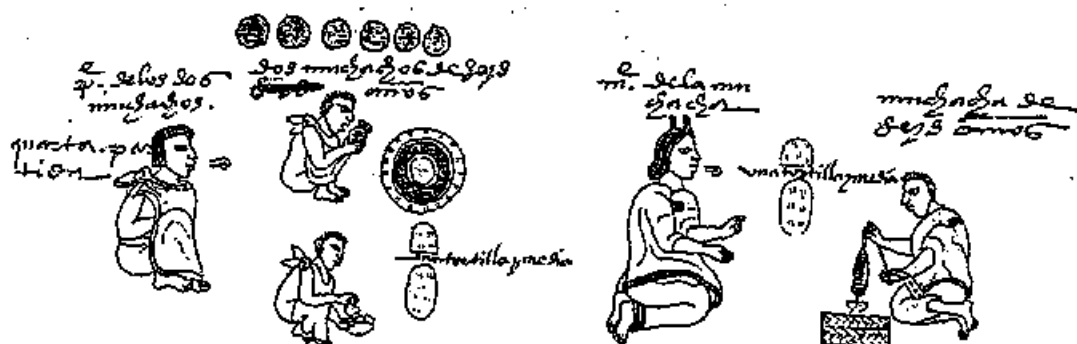
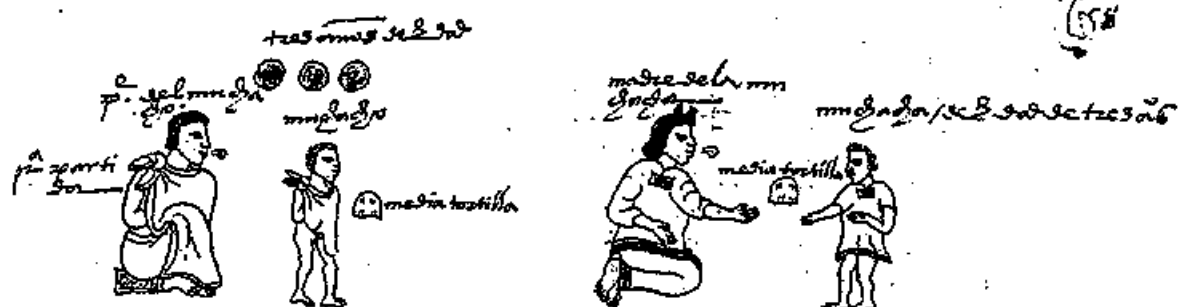
第一段。年齢3歳／子どもの父親／男の子／半分のトルティーリャ／女の子の母親／半分のトルティーリャ／3歳の女の子

第二段。／子どもの父親／4歳の男の子／一枚のトルティーリャ／女の子の母親／一枚のトルティーリャ／4歳の女の子

第三段。子どもの父親／5歳の二人の男の子／一枚のトルティーリャ／女の子の母親／一枚のトルティーリャ／5歳の女の子

第四段。二人の男の子の父親／6歳の二人の男の子／一枚半のトルティーリャ／女の子の母親／一枚半のトルティーリャ／6歳の女の子

图版 59



## 図版60の説明文

つぎの頁にある各絵の説明。ここでは、メキシコの先住民たちが、子どもを教化し矯正するのに使う時期と方法について語られる。子どもを無為にすごさせず、つねに勤勉にして、有益な活動をおこなうようにさせている様子を示している。四段の部分に分かれているので、この頁の説明もその順序でおこなう。四つの部分はつぎのものである。

第一段。両親は、7歳の男の子には、魚をとるための網をあたえて練習に精を出させ、同じ年齢の女の子には母親が糸紡ぎの仕方を教え、いつでも勤勉にし、無為にすごすことのないようになにかに打ち込む時間をもつようにと忠告をあたえた。男女とも各食事のときに与えられる糧食はトルティーリャ一枚半であった。

第二段。両親は、8歳の子どもたちにたいして、その前にマゲイ（りゅうぜつらん）の刺をならべて、もし怠けていたり、親の言うこときかなかったらば、その刺で身体を突きさして罰せられることになるとして、そのぞっとするような恐ろしさで子どもに警告をしている。この部分の絵において示され説明されているように、子どもたちは恐怖から泣きだしている。食事の量はトルティーリャ一枚半であった。

第三段。父親は、9歳になる息子が、手に負えず、両親に反抗的であったとして、上記のマゲイの刺で仕置きしている様子が示されている。子どもは手足をしばられ、丸裸にされ、背中や身体にその刺を打ちこまれる、また女の子は、第三段の絵によれば、手にその針をさされている。食事として与えられるのはトルティーリャ一枚半であった。

第四段。両親は、同じように反抗的であるとして10歳の子どもたちを棒でなぐり、また他の恐怖感をあたえることで処罰している。食事の量はトルティーリャ一枚半であった。

〔それぞれの絵についた書き込み〕

第一段。これらの7つの青い丸は7歳を意味する／男の子の父親／一枚半のトルティーリャ／7歳の男の子、父親がかねが手にもつ網でどのようにして魚をとるかを教えている／女の子の母親／一枚半のトルティーリャ／7歳の女の子、母親が糸紡ぎを教えている。

第二段。これらの8つの丸は8歳を意味する／男の子の父親／一枚半のトルティーリャ／8歳の男の子、父親がずる賢くするとマゲイの刺をさして罰するとして脅しつけている／マゲイの刺／女の子の母親／8歳の女の子、母親がずる賢くするとマゲイの刺をさして罰するとして脅しつけている／一枚半のトルティーリャ。

第三段。これらの9つの丸は9歳を意味する／一枚半のトルティーリャ／男の子の父親／9歳の男の子、手に負えないとして、その父親が身体にマゲイの刺をさしている／女の子の母親／一枚半のトルティーリャ／9歳の女の子、怠慢でぐずぐずしていたので、母親がマゲイの刺で手をさして仕置きしている。

第四段。これらの10の丸は10歳を意味する／一枚半のトルティーリャ／男の子の父親／10歳の男の子、その父親がこん棒で罰をあたえている／女の子の母親／一枚半のトルティーリャ／10歳の女の子、その母親がこん棒で罰をあたえている。





## 図版61の説明文

つぎの頁の最初の部分の説明。諫めの言葉を受け入れない、11歳の男女の子どもたちにたいして、その親たちが、苦しさを味あわせるために、とうがらしを焼いた煙を吸わせる罰を与えている。それは子どもたちをせきたてて、悪習にふけったり放浪したりすることなく、有益なこと時間をついやすことをうながすためのつらい残忍なお仕置きであった。その年齢の子どもたちには、大食い、あるいは、食い意地のはった者とならないようにと、食事ごとにわずかに一枚半のトリティーリャがあたえられるだけであった。

第二段の説明。子どもが12歳になって、親たちの諫めや忠告を聞き入れない場合は、父親は、罰して恐れさせるために、息子をつかまえて、手足をしぼり、丸裸にして、一日中湿った土のうえにころがしておいた。同じ年齢の女の子の場合には、母親が、娘に夜どおしで家や道路を清掃するようにさせ、またいつでも家の中の手伝いにはげむようにさせた。おなじように親たちは、食事ごとに一枚半のトルティーリャをあたえた。

第三段の説明。13歳の子どもにたいし、親たちは、男の子には山から薪をはこぶこと、カヌーで葦やその他の草を家にはこぶこと、女の子には、親たちのために、粉をひいてトルティーリャやその他の料理をつくることに精を出させた。各食事ごとに、子どもたちには、トルティーリャ二枚を与えた。

第四段の説明。14歳の年齢の子どもたちで、両親は、男の子には、湖にでてカヌーで魚とりをすることに、女の子の場合には、どんな衣服の生地でも織ることができるように精進させた。かれらには食事ごとに二枚のトルティーリャ二枚を与えた。

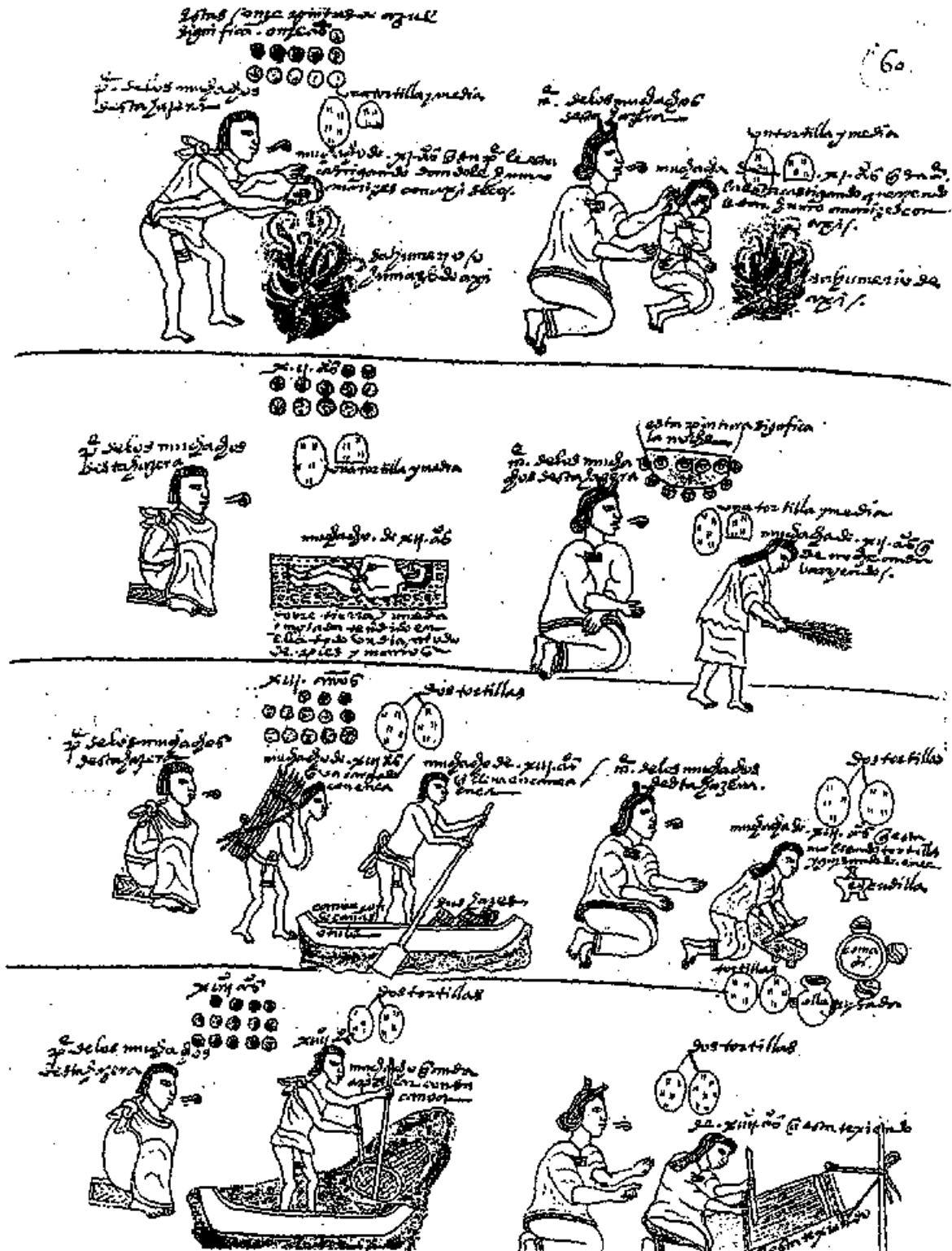
〔それぞれの絵についた書き込み〕

第一段。これらの11つの青い丸は11歳を意味する／一枚半のトルティーリャ／男の子の父親／11歳の男の子、父親が焼したとうがらしの煙を鼻からすわせて罰をあたえている／とうがらしの煙／女の子の母親／11歳の女の子、母親が焼したとうがらしの煙を鼻にちかづけて罰をあたえている／一枚半のトルティーリャ／とうがらしの煙。

第二段。12歳／一枚半のトルティーリャ／男の子の父親／12歳の男の子、手足をしぼられ、一日中湿った土の上にねかされる／この絵は夜を意味する／女の子の母親／一枚半のトルティーリャ／12歳の女の子、夜どおし清掃しつづけている。

第三段。男の子の父親／13歳／二枚のトルティーリャ／薪をはこんでいる13歳の男の子／カヌーで葦をはこぶ13歳の男の子／い草あるいは葦をつんだカヌー／女の子の母親／13歳の女の子、トリティーリャをひき、料理をしている／二枚のトルティーリャ／小さな盾／粉ひき用の細い石棒／トルティーリャ／料理用の深鍋。

第四段。14歳／二枚のトルティーリャ／男の子の父親／14歳の男の子、カヌーで漁獵をしている／二枚のトルティーリャ／14歳の女の子が織物をしている／織られている布。



## 図版62の説明文

つぎの頁の第一の部分の説明。描かれていることは、親たちは、息子が青年期にたつと、かれらを二つの家に連れてゆくことを意味している。年齢が15歳になると、それぞれの子どものもつ性格気質にしたがって、若者を訓練し教化する教師のいる家か、あるいは、カルメカクとよばれるメスキータのようなもののどちらかに連れてゆき、そこで若者を訓練してくれる教師テアチカウか、トラマカスキとよばれる高位の神官に息子をあずける。

第二の部分の説明。描かれていることは、正式におこなわれる結婚に際して、執り行われ守られるべき形式としきたりを示している。結婚の儀式はつぎのような手順であった。夜になるのをまって、医者である女性が、新婦を背中にせおい、それに松のたいまつで足元を照らしながら四人の女性が同行する。新郎の家に着くと、新郎の両親は花嫁を迎えるために家の中庭にでて、新郎が待機していた部屋、あるいは家に彼女を入れる。火を燃やしたかまどのそばで、椅子をおいた敷物の上に新郎新婦がすわり、両人の衣服の端を結びつけ、そして神々にコパル香をささげる。その後、立会人として出席していた老人と老女たちが両人に食べものをあたえる。この後老人たちが食事をし、それがすむとそれぞれ順番に新郎新婦に忠告をあたえた。両人にたいして、どのように行動し生きるべきか、平穩に生きてゆくために自分たちがもっている責任や地位をどのようにして守ってゆくべきかについて良い助言を与えた。

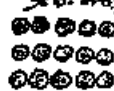
〔それぞれの絵についた書き込み〕

第一の部分。15歳の男の子で、父親は、受け入れてくれる高位の神官に子どもあずける／トラマカスキ、高位の神官／カルメカクと呼ばれる寺院／二人の若者の父親／15歳の若者、父親はかれを教育し教化してくれるようにと教師にゆだねる／テアチカウ、教師／若者がしつけられ、教育される家、クイカカリ（テルボチカリの誤りであると思われる——訳者注）／15歳。

第二の部分。老人たち／老女たち／かまど／コパルの芳香／新婦／新郎／ござ／食事／食事／ブルケ酒の壺／カップ／松のたいまつ／新婦を背負ってはこぶアマンテカ（女医）／これらの女性は新婦を新郎の家に送りとどけるために宵の口にたいまつを灯してゆく。

partida p 2

de los de los



partida p 2



## 図版 63 の説明文

つぎの頁の第一の部分の説明。ここでの絵は、それぞれ、上長の者たちが見習い神官（カルメカクの生徒のこと——訳者注）に従事させていることについてのものである。ここでは、後に神官になるために、かれらはメスキータ（カルメカクのこと）においてどのような奉仕活動していたかについて述べれば十分である。なぜなら、後になって高位の神官になった時には、新人にたいして、かれらが奉仕し従事してきたのと同じ秩序のなかで訓練が行われるからである。

第二段の説明。それぞれの絵は、若者たちが、奉仕し従事している諸活動について述べている。なぜなら、将来、訓練を受け、年齢をかさね責任ある地位についたなら、ほかの若者にかれらがしてきたのと同じように命令することになるからである。それゆえに、怠惰な放蕩者とさせないように、いつでも美徳となることに精進させた。

第三段の説明。上位の神官がその見習い神官たちを矯正し、罰を与えていることが示されている。お勤めに注意をおこたり、怠慢であったこと、なんらかのまちがいをしでかしたことを理由に、絵が示しているような罰を与えた。

第四段の説明。どのようにして勇敢な兵士が、それにふさわしい年齢にたった若者に戦闘術を訓練したかについて述べている。親たちは、若者の性格気質にしたがって、息子を勇者に委託する。こうして両親は、かれらを、その性向に示すところにしたがって、技能や技術を訓練してもらうようにとそれら勇者にゆだねた。

〔それぞれの絵についた書き込み〕


第一段。トラマカスキ、見習い神官、清掃の仕事／見習い神官、山から神殿を飾る木の枝をはこぶ／偶像に血をささげる自己犠牲に使うためにメスキータにマゲイの刺をはこぶ／囲いを作ったり、それを飾るために、青い草をメスキータにはこぶ。

第二段。神殿で灯明として使うため薪の丸太をはこぶ少年／神殿で灯明をとって使うため薪の丸太をはこぶ若者たち／神殿を飾るために木の枝をはこぶ若者。

第三段。高位神官。この神官がその勤めが怠慢であるとして見習い神官を処罰している／見習い神官／高位神官／見習い神官／高位神官、反抗的、矯正しえない、命じられたことをさぼったことを理由に、全身にマゲイの刺をさして見習い神官を罰している／この小さな家は、もし見習い神官が自分の家にかえり三日間そこで寝泊まりしたら上記のような処罰をすることを意味している。

第四段。戦場の勇者テキウア／若者／若者の父親、自分の息子に軍事技能を訓練し、戦場につれていってくれるようにとかれを勇者にあずける／若者、勇者の従者、勇者の荷物と若者の武器を背おってはいこび、かれとともに戦場にでかける／武器をもって戦場に行く勇者テキウア。

Hennrich, al fagotino  
vicio / 17 de mayo de  
1912 -



al fapri. promissio que  
no. un. g. de. de. em. de.  
de. de. de. de. de. de.  
de. de. de. de. de. de.  
de. de. de. de. de. de.



more calm. I'm engaged  
and I'm happy and  
I'm free. I'm free to  
be a woman  
in the world  
again.



moses y con los hijos de  
moises se llama por tanto m.  
de la cruz / En la mequitr.



morando e ben aragado con  
firmas p[er] confirmacion lo  
reconocido. —



အလှူအတန်းတစ်ခု



alfanfano

il fuggi; magis:



Alfagur, molición



1. al-fiqhī-niyya




12. *que*  
 13. *ti, m. al*  
 14. *mon, r. qm*  
 15. *com, r. ag*  
 16. *que, r. v*  
 17. *el on, r. p*  
 18. *a, p. b. l*  
 19. *z, p. r. o*  
 20. *a, p. n. e*  
 21. *te, e. n. l*  
 22. *e, l. m. o. n. d. y*

depuis 1923  
jusqu'en 1926  
1926



ကုမ္ပဏီ



estor cubre dignifica. En la información  
1996/2000 se ve a un niño con una teta diabla.  
El signo es el castigo del uso figurado y  
de la teta.



60/propila del  
 v. d. n. 2. 1. 2. 3.  
 - ha con el  
 la guerra  
 el. n. m. d. 2.  
 r. n. e. 2. 1. 2. 3.  
 A. 1. f. 2. 3.  
 e. 2. 1. 2. 3.  
 o. n. m. d. 2.  
 e. 2. 1. 2. 3.



Exhorte Gba  
por a la guerra  
civilis etiam

## 図版64の説明文

第一の部分の説明。高位聖職者が夜毎におこなった鍛練と仕事について示されている。ある者は、神々にたいして自己犠牲をささげるために山にでかけ、ほかの者は、音楽に身をいれ、またある者は、天空の星座で時間をはかり、ある者は神殿でその他の仕事に従事した。

第二段の説明。それぞれの絵において、かれらが若者たちにたいして行った罰について述べている。絵がしめしているところによれば、その処罰はメキシコの首長たちの定めた法律と習慣にしたがって行われていた。

第三段の説明。それぞれの絵に、こまかい説明がついているので、ここで説明する必要はない。

第四段の説明。それぞれの絵において、教師テルプチトラトが、法律にしたがって、ぶらぶらして悪習にふけていた若者にたいして行った処罰が示されている。その他の説明は絵のところに附いている。

〔それぞれの絵についた書き込み〕

第一段。見習い神官／高位神官が夜に苦行をおこなうために松明をもって山ゆく、悪魔のために自己犠牲をおこなうためのコパル香をいれた袋を手にもち、おなじ自己犠牲のために容器にいれたタバコを背おい、犠牲の場所を飾るために木の枝をはこぶ、見習い神官はかれの後について行き、自己犠牲用のその他のものをはこぶ／高位神官、夜中に楽器のテポナツトリをたたき練習している／高位神官、時間をはかるために夜中に空の星座を見つめている、かれはそれを仕事としている。

第二段。食料や戦争の道具をはこんで戦場にゆく若者／テルプチトラト／女性／若者／テルプチトラト／若者を監督している二人の若者頭テルプチトラト（テルポチカリの教師）、だれか若者が女性と同棲したときは、燃えさしの薪で殴打して、同棲をやめさせる。

第三段。高位神官、神殿を清掃する仕事をするか、あるいはそうするよう命じている／高位神官／女性／見習い神官／高位神官、この神官たちの絵は、もし見習い神官たちが怠慢であったり、ある女性に近づいたり、同棲したりしたら、全身に松の針、作ったクギ、を刺して罰することを示す。

第四段。教師テルプチトラト／若者／若者頭テアチカウ、この絵では、もし若者が無為にぶらぶらしていたら、二人の若者頭がかれをトラ刈りにし、火で頭を焦がして罰したと説明される／神殿の修理のためにカヌーにつんで芝をはこぶ若者／神殿。





## 図版71の説明文

この頁に描かれたものの説明。対面して座っている父親と息子は、父親が息子に悪習にふけられないようにと良い忠告を与えていることを意味している。たとえば、息子に、あらゆる美德をそなえれば、首長や要人から高く評価され、名誉のある仕事を与えられ、またその使者として役目を与えられたり、お気に入りとしてパーティーや結婚式の時に音楽家や歌手の演奏に列席することを許されるようになる。

描かれた家は、公共事業をおこなうための審議が行われるところである。ここは人夫頭があり、その前で、堀り棒と担ぎ籠が象徴しているように奉仕活動をおこなうように命じられて二人の若者が泣いている。頭は、無為にすごすことなく、おそらく彼らがしていたような放浪者のようなまねはするな、それは将来、泥棒になったり、球技遊びやサイコロ遊びにふける者となる原因となるのだから、と言いつつ彼らに良い教訓をあたえている。そして遊びにふけると、際限がなくなり、ついには悪習となり、あわれな末路をたどることになる。ここに示された絵はこうしたことを意味している。

この絵の順序にしたがうと、大工、宝石細工師、絵師、銀細工師、羽根飾り職人の仕事は、親が教師となって自分の息子に子どものころからそれを教え込んでいることを意味している。それぞれを自分の仕事に精を出し、美德となることに時間をついやすようにと忠告している。怠惰からは悪習、下品な冗談にふける者が生みだされ、飲酒やその他の悪習がつづき、その他おおくの恐ろしいことになる、と諫言しながら。こうしてすべての者に精進するようにさせている。

〔それぞれの絵についた書き込み〕

使者／あらゆる美德となること精進するように息子に助言をあたえている／父親／息子／客をむかえる歌手と音楽家／公共事業を審議する家テハンカルコ／人夫頭ペトラカルカトル／堀り棒と担ぎ籠／若者／若者／放蕩者／球技の遊び人／泥棒／サイコロ遊び人／大工／大工の息子／宝石細工師／宝石細工師の息子／絵師／絵師の息子／銀細工師／銀細工師の息子／下品な冗談をいう悪習にふける者／羽根飾りの教師／教師の息子／酔った男／酔った女／酔っぱらいの悪習は将来泥棒につながる。

圖版 7 1



## 2. 子どもの養育と教育論

ヘロニモ・デ・メンディエッタ修道士

### 〔テキストについての解説〕

ここに再録された古代のナウア(アステカ族)の養育と訓育に関する見解は、初期のフランシスコ会の伝統の立場からのものである。フランシスコ会士であるメンディエッタ修道士は、同修道会の会士たちがヌエバ・エスパーニャで行ったインディオをキリスト教に改宗させるために行った事業について書いた大部な著作『インディア教会史』(Pray Gerónimo de Mendieta, Historia eclesiástica indiana)の一部としてそれを記述しているからである。

(ここに集録されたインディオの伝統的な)教育論は、たとえスペイン語に翻訳された際にいくらか変質させられたとしても、インディオ的要素の大部分をとどめている。ナウア族の宗教における最高神についてたびたび言及がなされているが、それは翻訳者たちによって持ち込まれた修正ではなく、原典そのものがそうなのである。これはキリスト教の導入の結果であると考えやすい人々のためには重要な注である。だが悪魔という観念はキリスト教的なものである。メソアメリカの神殿には悪魔に相当するものは存在していなかったのである。ともかく、テキストは、ナワトル語で保存されてきたものをかなり忠実に翻訳し再現しており、この点で古代の伝統を認識するための信頼しうる史料と考えられる。

メンディエッタは、布教のために派遣された30人ほどのフランシスコ会の一員として29歳でヌエバ・エスパーニャに到着する。2年後の1556年から1562年まで、このあとすぐに論及されることになるトルーカ市の修道院に住む。これをふくめてぜんぶで16年間におよんだヌエバ・エスパーニャでの最初の生活において、メンディエッタ修道士は、ナワトル語を習得し、修道会の同志であるモトリニアやサアグンと肩をならべるほどに熟達することになった。1570年に、疾患と鬱病に苦しんで、ヨーロッパに帰国する。出身地であるバスク地方に住んでいたが、その教団長クリストバル・デ・チェホントイネスより、ヌエバ・エスパーニャにおいて、フランシスコ会によるインディオの改宗事業の歴史を書くように命令を受ける。そこで1573年にふたたびメキシコに戻る。熱心にその仕事に従事し、1597年に『インディア教会史』を完成させる。1604年にメキシコのサン・フランシスコ修道院において高齢で死亡した。

この史料集に再録した部分は、その第Ⅱ巻の20章から24章にあたる。「ヌエバ・エスパーニャのインディオの異教徒時代の儀式と慣習」について書かれた部分である。この巻においては、アンドレス・デ・オルモス修道士とトリピオ・デ・モトリニアの著作を主要な資料として使用したことが認められる。ここで使用した版は、1945年に出版されたメキシコの版である。

## 第20章 当地のインディオが哲学者たちの著作を読んだこともないのに全体的かつ自然にその教えにしたがって幼児期の子どもを養育していることについて

哲学者（アリストテレス——編者注）は、その『国家論』第七巻の第17章において、子どもの養育にたずさわる人々が、良き性向や身体・健康、靈魂の良き習慣のために、採用すべきいくつかの教えを提示している。第一の教えは、生まれたばかりの子どもや乳児を寒いところに置くべきとしている。なぜなら子どもの自然な姿は、出産にともなう高い熱のために、寒さに耐えるにふさわしい力をそなえている。そうすることによって肉が引き締まりはじめ、体質がより頑強となり、仕事に耐えるためにより適切かつ強力になる。その哲学を聞いたことも読んだこともないのに、インディオたちほど、この教えをよりよく実行している者は他にはいない。なぜなら、子ども生んだ母親が、夜明けの後に、赤子を背負って行って、小川あるいは河、泉で水浴させることはかれらの間では広く行われているからである。こうしたことは、夏の間のみならず、冬でもおなじであり、寒冷な地域においてもそうである。トルーカ盆地地方は、ヌエバ・エスパーニャで最も寒冷な地域のひとつであり、わたしは毎週日曜日に訪問先のどこかの集落でミサを行うために夜明けとともに修道院を出発したが、未明に氷の張った小川で幼児に水浴させているインディオ女性を目にした。私など寒さに氷ついたようになりながら、そんなことをして死んでしまうのではないかと驚いたが。

哲学者が提示する第二の教えは、5ないし6歳までの幼児期には、怠惰と不精がおおきくなるのを避けるために、なんらかの運動に慣らさせる、あるいは軽い労働をさせるべきであるというものである。このことをまたインディオたちは文字通り遵守している。大人と同じように、男児も女児も、荷担ぎをよくする。（女は、シーツのような布にくるんで、端を結んで、それを首に掛ける。男は、ヤシあるいはスゲの帯で4デードの幅で織り上げた、メカパルとよばれる粗いヒモの両端で前頭部に引っかけて、それでくくって背中に3〜4アローバ（40グラムほど）の重さの箱あるいは荷物をかつぐ）、男の子たちも、おもちゃのように見える小さなミニチュアの担ぎ具を用いて、それぞれの体力にしたがって、軽い荷物をはこぶ。それは実際に運べる量もたかがしれており、役にたつかどうかということよりも、むしろ大きくなった時にそうした力仕事に慣らすためにそうさせているのである。そのため8歳から10歳になるころには、20歳のスペイン人でも長い道のり運ぶには音を上げるようなかなりの重量の荷物を担ぐようになる。母親たちは、娘が歩きはじめるとすぐに、布にくるんだり、女性流のやり方で紐でくくって、何か軽い物でできた荷物を運ぶことを教える。

第三の教えは、幼児期の子どもを養育する者が大いに留意すべきことであるが、そのつづらな瞋に醜惡な行為や絵を見せるべきではなく、また汚い話や言葉を聞かせるべきではないということである。なぜなら、子ども時代に見、聞き、話すは、後になってそれをつかうことが習慣とになるからである。こうした理由から、すべての哲学者たちは、その両親や養育係は、若者たちに、幼い時から、正直な行いや仕事をするよう訓練するのが良い

と教えている。またうした点において、いかにインディオたちがその子どものためにそれを実行していたかについては、本章やそれにつづく章で見ると、子どもの頃からかれらに与えられてきた説教、忠告、仕事にきわめて明瞭に表れているように思われる。まず最初に、こうした説教を紹介しよう。それはメヒカ人の言語で語られていたものをスペイン語に翻訳したものである。

### 父親が息子にあたえる説教あるいは忠告

おおわが息子よ、神の御力によって創造されこの世に生まれた息子よ。われわれ両親、親族はおまえの誕生をその目でみた。ひな鳥が殻からでてくるように、おまえも生まれ育ってきた。ひな鳥が飛ぶのを学ぶように、おまえもこの世ではたらくことを学ぶのである。貴重な玉石のようなおまえが生きていてわれわれを喜ばせることを、神がいつまで望んでおられるか、われわれには知る由もない。息子よ、用心ぶかく生きなさい、おまえを生み出した神に身をゆだねなさい、なぜなら、神は私以上におまえを愛する父親なのだ。昼も夜も神を熱望し、神を心にとどめなさい。愛をもって仕えれば、神は恵みを下さり、どんな危険からお守りくださるだろう。神の御姿と神の品々をふかくうやまい、その前で敬虔に祈って、祭典の準備をしなさい。

年長者を尊敬し、あいさつをしなさい、年少者を忘れてはいけない。口のきけない者のように押し黙ってはいけない、貧しい者や嘆き悲しむ者をやさしい言葉で慰めることを忘れるな。すべての人を尊敬せよ、とくにおまえの両親を。両親に服従し、奉仕し、尊敬しなさい。すべての人を愛し、尊敬しなさい、そうすれば平和と喜びの中で生きてゆけるでしょう。父親も母親も尊敬することのない愚かな狂人に倣うな。そういう人間は、動物のようで、正しい道を踏み外し、理性もなく、諫めも聞き入れず、矯正されることもないからである。神々を侮辱するような者は、絶望あるいは転落のうちにのたれ死にし、あるいは、獣に殺され食べられてしまうだろう。

息子よ。老人、病人、手足の不自由な者、罪をおかしたたりなにか誤りをおかした者を嘲笑してはいけない。このような人々にたいし侮ったり悪さをしてはいけない。まず神々の前で謙虚になり、そのようなことが自分に生じないよう祈りなさい。「私の父親が自分に言った通りのことが自分に起こってしまった」あるいは「もし愚弄することがなかったなら、同じ境遇におちいることもなかったのに」とあとで不平不満をこぼすことがないように。なにびとも苦しめてはならず、だれかに毒物あるいは食べられない物を与えてはならない、なぜならそれを創造した神々を怒らせ、その困惑と打撃はお前のものとなり、やがて死にいたるであろう。もしおまえがすべての人々に敬意を払うなら、同じような敬意をうけながら死をむかえることができよう。

息子よ。態度良くしなさい、苦痛をあたえられたり、悪くとられることのないように、呼ばれもしないところに割り込むようなお節介をしてはいけない。人を傷つけるな、悪い見本となるな、しゃべりすぎるな、じゃまになるからひとの会話をさえぎるな。もし年長

者が誤りを正すために直接的に話すことがないなら、おえまが話すことを好意的にみていることになるのだから。もしおまえの仕事に関係がなく、あるいは話す責任がないのであるなら、黙っていなさい、また責任があるとすると、愚か者と思われぬようにあくまで慎重に話さなさい、そうすれば、おまえの話すことは尊重されるだろう。

「おお息子よ」、ほら話やウソには注意せよ、それは混乱をひきおこすからである。おしゃべりにはなるな、市場や浴場にながく留まるな、悪魔に欺かれることになるから。あまりにめかしこんだりするな、鏡ばかり気にするな、放蕩者とみられることのないように。自分の進もうとするところに視線をすえよ、顔をしかめるな、他人を手でつかむな。行く先をよくみつめよ、そうすれば、だれかとぶつかることもなく、だれかの前にをさえぎることもない。もしだれかに仕事をするよう命じられたら、それは運よくかれらがお前をためそうとしているのであるから、できるかぎりの力をつくしなさい、そうすれば、賢明な者とみなされるであろう。たとえ他人よりまさっていると感じて、すぐにそれを受け入れてはならない。すこし待て、拒絶されたり、恥をかかせられることがないように。

年長者よりさきに入ったり、かれらが望む場所に座ったり立ったりしてはいけない、つねにかれらを先にたて、敬うことを忘れるな。年長者より先に口をきいてはいけない、その前を横切ってはならない。なぜなら、他の人から育ちが悪いと後ろ指をさされることになるから。人に先んじて飲んだり食べたりしてはならない、そうすれば、神々や年長者の恩寵にあずかることができる。もし何かを与えられることがあったら、たとえそれがつましいものであったとしても、それを無視したり、腹をたてたり、友情をこわしたりするな、なぜなら、神々も人々もお前によかれと思っているのであるから。知らない女性に手をだしたり近づいたり、その他悪いことをしてはならない、それは神にたいする罪であり、お前は大きな打撃をこうむることになるから。

お前は、まだひな鳥、芽吹いたばかりの穂のように結婚するには未熟であるから。がまんして待つがよい、なぜならすでにお前にふさわしい女性はすでに育っているのであるから、すべてを神の意思にゆだねよ、お前はいつ死ぬかもわからないのだから。もしお前が結婚したいと望むのなら、まず最初にわたしたちに話さなさい、われわれの承諾なしにかってに結婚しようとしてはならない。

見よ、息子よ、盗人や遊び人になるな、それはお前を大いなる恥辱におとしいれるからであり、われわれをもはづかしめるからである。自分の手ではたらいて、はたらいたもので食べてゆけ、そして平安のうちに生きなさい。息子よ、われわれはいっしょうけんめいに働かねばならない。わたしは、汗しながら働いてお前をそだて、おまえが食べるものを見つけだし、おまえのために他人にも奉仕してきたのだ。わたしはけっしておまえを放置することなく、なすべきことをなしてきた、わたしは盗むこともなく、怠惰でもなく、おまえがはずかしい目にあうような卑劣なこともしなかった。

ぶつぶつ不平をいったり、他人の悪口はいうな、おまえが聞いたことでも口にしてはいけない、もしおまえが語るべきことが良いことであったとしても、自分でなにかを付け加えたりしてはいけない。なにか重大なことがおまえの目の前でおこって、だれかがそれを

訊ねたとしても、黙っていなさい、だれもそれを知ろうとして無理に口を開かせることはしないので。ウソをつくな、陰口をするな。もしおまえが言ったことがあやまりだったら、おおいに困るはめにおちいることになるから。だれも不快にさせるな、友情やうまくつきあっている人達たちの中に反目の種をまくな、いっしょに生きて、食べて、おたがいを訪ねあいなさい。もしだれかがおまえに伝言をたのみ、べつの人がおまえにくってかかったり、不平をいったり、あるいは頼んだ人のことを悪く言っても、腹を立てながら答えをもってきてはいけないし、それを人に感じさせてもいけない。おまえを送った人に「あちらはどうだった」と聞かれたら、おまえが聞いた悪いことには口にせず、穏やかなていねいな言葉で答えなさい、かれらをたがいに反目させ、殺しあったり、言いあらそったりさせないように。そんなことになれば、あとになって、気が重いし、「ああ、あんなことを言わねば、こんなことにはならなかったのに」と言うはめになるだろう。

こんなふうによれば、おまえはおおくの人から愛され、安心して生きられるだろう。知らない女とかかわりあうな。清廉に生きよ、この人生は二度とはなく、苦勞とともに過ぎ、すべては終わりがあり、果ててしまうのだから。だれかを侮辱してはいけない、その名誉、褒美、功績を奪い取ってはならない、なぜなら、それは神々がそれぞれにふさわしいとみなしてそれを与えるものなのであるから。息子よ、神々がおまえに与えて下さるものを受け取り、それに感謝しなさい。多くを与えられたら、自慢したり驕ったりせずに、まず腰を低くしなさい、そうすればおまえの功績はより大きくなるだろう。もしおまえが謙虚であるなら、ひとはおまえのものにたいしてなにも言ったりしないだろう。しかし、もしもおまえが自分にふさわしくないものを無理に取ったりすれば、はずかしめをうけ、神々にたいして罪をおかすことになる。

だれかがおまえに話かけたら、息子よ、手や足をゆり動かしてはならない、それは分別のないしるしだからである。おまえのマントや衣服をかみ切ったり、唾をはきちらしたり、あちこちキョロキョロながめていてはならない、もし座っているとすんなら、たびたび立ちあがってならない、なぜならそれは饑けのわるい者のしぐさであり、軽薄な酔っぱらいのようだからである。息子よ、もしおまえが父の与える忠告を聞き入れず、おまえの生命と死、おまえの長所短所、おまえの浮き沈みについて耳をかたむけないなら、おまえの運は悪くなり、悪いさだめとなり、やがてはおまえに罪があることを知ることになる。見よ、多くの財産をもっているとしても鼻にかけてはならないし、それほど持っていない人を軽視してもならない、なぜなら、それは、おまえにそれを与えた神を怒らせ、罰を与えることになるからである。

食事をするときは、怒ったように見えてはならないし、料理に不平をもらしてはならない、出されたものを食べなさい。だれかと一緒に食事をするときは、面とむかって顔をみずに、頭を低くして、ほかの人に気づかいをさせるな。ガツガツとあわてないで食べなさい、なぜならそれはオオカミやジャッカルのような食べ方であり、それよりも食べ物に申しわけがない。息子よ、もし他人といっしょに住むことになったら、おまえに任されるすべてのことに十分に注意を払い、勤勉によく仕えなさい、そうすればおまえといっしょに住む



人は、おまえによくしてくれ、必要とするものを与えてくれるだろう。息子よ、おまえがなすべきことをなすなら、世間は、おまえを模範として、自分の父親を無視し、悪意をもってみなし、従順でない他のものたちを非難し、罰することになるだろう。

息子よ、もうこれ以上言うことはない、これで父としての義務を終わることとする。おまえを締めつけ鍛練するこれらの忠告によって、おまえに慈悲を与える。見よ、息子よ、それらを忘れたり、無視したりしてはならない。

### 息子の答え

わが父よ、その息子のわたしにたいしてなんとすばらしい恵みを与えてくれたことか。「幸福にも、わたしは、あなたの心の底からわたしのために発せられた言葉からどれほど多くのことが得られることになるでしょう」あなたはまさしくわたしにそれを語った、このことによってわたしにたいする責任ははたした、もしいつの日か、あなたがわたしに忠告したことに反することをしたとしてももう言いわけはできない。まちがいなく、あなたに罪をきせることも、あなたに不名誉の責をおわせることもできないでしょう、わが父よ、なぜなら、あなたはわたしに忠告をし、わたしがそれを自分のものとしていなかったからである。しかし、あなたも見るように、わたしは若造にすぎず、土や陶器の破片をもって遊ぶ子どもにすぎず、自分の鼻をふくすべさえも知りません。わが父よ、どこにわたしを放り出す、あるいは送りだすつもりなのでしょうか」わたしはあなたの血と肉をわけあたえられた者です、それゆえに、もっとほかの忠告をわたしに与えていただけるよう期待します。「どうか、わたしを見捨てないでください」。あなたがわたしに言うとおりにわたしが従わない時には、あなたの息子でないものとしてわたしを見ずとも文句はありません。いまや、知ったばかりのこのわずかの言葉をもって、わが父よ、わたしに忠告したことにたいして答えます。わたしは、あなたに感謝します、そしてあなたに幸運とくつろぎがもたらされますように。

### 第21章 あるインディオの農夫がすでに結婚している息子にあたえたもうひとつの忠告

わが息子よ、おまえに幸運がもたらされますように。おまえはこの村で仕事をもち、神々が自らの手で病気あるいは罰をもたらしのを日々まちながら、現在を生活している。だれかに奉仕するためにわれわれは生きているのであり、安穩といねむりをするな。サンダル、つき棒、鋏、自分の仕事とに必要なそのほかのものを、自分にピッタリするように整えよ、おまえは農夫であり、神々があなたに与えた仕事と耕作に行くために、なぜならおまえの幸福と運命はそのようなものであるのだから。

粘土をふみ固め、日乾しレンガを造ってはかの人々に奉仕することが、その仕事をつうじて、おまえは民衆と首長を助けるのだ、こうした仕事によって自分、妻、息子たちの必要

とするものを手にいれるのだ。おまえの仕事に必要なものを持て。働いて、種をまき、刈り入れよ、働いて得たものをたべよ。挫けるな、怠けるな、もしおまえが怠けもので、だらしないなら、「どうして生きてゆくのか、ほかにどんな手段があるのか」、「おまえの妻や子どもたちはどうなるのか」。

息子よ、よい仕事は、気晴らしにもなり、身体を健康にし、心を楽しくするものである。息子よ、おまえの妻にじぶんの仕事に必要なものに、家の中でなすべきことに注意をはらせるようにしなさい、また子どもたちに適切な忠告を与えなさい。かれらが良き生活をし、神々をあなどらず、おまえたちをはずかしめるような悪いことをしないように、子どもたちに両親として良い忠告をあたえよ。息子よ、生きるための仕事から逃げだすな、なぜならそれにより育てている者に衣食をあたえるのであるから。息子よ、もう一度言おう、おまえの妻と家をじゅうぶんに世話をし、おまえの親戚や家を訪ねてくる人にふるまい、慰めるためのものを得るために働け、なぜなら、貧しいながらもなにかをもってかれらをもてなすことができるなら、かれらはその親切を知り、そのことに感謝し、おなじようなお返しをしておまえをもてなすだろう。

人を愛し、同情心をもちなさい、うぬぼれたり、他人を苦しめてはならない。さらに行儀をよくし、すべての人に愛想よくしなさい、ともに生き話をする人々の前で謙虚になりなさい、そうすれば、みんなに愛されて丁重にあつかわれるだろう。だれにも傷つけたり悪意をもったりするな、するべきことをして、それを自慢するな、なぜならそれは神をあなどることであり、おまえに災いがふりかかるだろう。

息子よ、もしおまえが正しい道を歩まないなら、「神々がおまえに与えたものを取りあげ、おまえを辱め、おまえを憎むことになること以外になにか残ろうか」。そうだから、年長者には、仕事のうえでおまえを導く人には従え、かれらもまたたいした休息や楽しみもないままに働いているのだから。もしおまえがそのようにしないで、かれらにたいして反抗したり、不平を言ったり、傷つけたり、あるいは不愉快な返答をしたりするなら、おまえの横柄さや育ちのわるさによって仕事が二倍にもなることはまちがいない。

怠けているなら、だれとも生きてゆけないし、だれからも見すてられ、妻子を路頭にまよわせることになり、家もおまえを歓迎してくれる場所も失い、なによりもたいへん不幸な目にあうことになろう。おまえの罪によって財産をうしなうのではなく、おまえの気ままのせいで苦勞や貧困におちいるのだ。なにかを命じられた時には、それをすすんで聞き、それをできるか否かを丁重に答えなさい、うそはつかずに、確実にできることだけを言いなさい。できそうもないことにはハイと言うな、そうすればそれをだれか他の人に頼むことになるのだから。

わたしがおまえに言ったことをするなら、おまえはみんなに好かれるだろう。放浪者にも、なまけた農夫にもなるな、身をおちつけて居をさだめ、種をまきそれを刈りとれ、おまえが死ぬときに妻子にしっかり残せるような家をつくれ。こうすれば、おまえは安心してあの世に行けるだろうし、残されたものたちが食うのに困ることもないだろう。かれらの住むべき場所、根を知ることになろう。息子よ、これですべてだ、おまえに幸運がもた

られますように。

### 息子から父への感謝のことば

わが父よ、これほど愛憎のこもったお話と忠告でわたしにもたらされた恵みにふかく感謝します。もしこれほど良い忠告を聞きいれないとしたらわたしには罰があたりましょう。「わたしは、みすばらしい家にすみ、他人に仕えるあわれな人間以外のなにものでもありません」。わたしは、粘土をこね、日乾しレンガをつくり、種をまきそれを刈りとることを仕事とする貧しい農夫です。これほどのすばらしい忠告をいただいたことはありません。神々はわたしのことをおぼえていて下さり、なんとすばらしいことをわたしになされたのでしょうか。「父親以外にどこでこれほどすばらしい忠告を聞かせてくれるところがありますか」。それは宝石にまさるものです。わが父よ、あなたの言葉は、あなたの心から、宝石箱からでたものであり、わたしを貫きとおすものです。ああ、わたしがそれをよく聞き入れるに値する者だとするなら、これほどすばらしい忠告や助言を忘れることもかえりみないこともないでしょう。わたしはこれによってきわめて励まされ慰められました。わが父よ、あなたに感謝します。わが父よ、くつろいで、お休みください。

### 第22章 母親がその娘に与えた忠告

わたしの身体から生まれたわが娘よ、わたしは、おまえを産み、世話して、よくしつけてきた、美しいビーズ玉のように。寶石あるいは真珠のように、親としておまえを磨き上げ飾ってきた。もしおまえがそれにふさわしい女性でないとするなら「どうして他の女性といっしょに生活できるだろうか、だれがおまえを妻にむかえようとするだろうか」。

娘よ、この世はたしかに苦勞と困難にみちてはいるが、努力はむくわれるものです。必要なもの、神々がわれわれに与えてくださる物を手にいれるためにはおおいに勤勉であらねばなりません。そのためには、愛する娘よ、怠けていても、油断してもならず、まずは熱心に、おまえの家を清掃し、整えなさい。おまえの夫に仕え、手洗いの水を用意し、トルティーリャをうまくつくれるように注意をはらいなさい。家の道具などは便利のように配置して、それぞれの場所にきちんとおさまるようにし、使い勝手がわるいようにしてはならず、他の人が見ている前でなにかを手から落とすようなことをしてはなりません。

娘よ、どこにゆくにも、慎みぶかく礼儀ただしくありなさい、あわてふためいたり、笑ったり、チラチラとわきをみたりしてはならない、目のまえにいる人やほかのひとの顔を見てはならない。とくに他のひとのいるところでは、おまえの道をまっすぐ歩きなさい。こうすれば、おまえは尊敬とよい評判をえられるでしょう、そしてだれもおまえを傷つけることもなくおまえがだれかを傷つけることもなく、双方からよい関係と尊敬がうまれるでしょう。そのためには、娘よ、慎みぶかく、丁重に話をしなさい。もしたずねられたら、丁重にこたえ、口のきけない者、あるいは愚か者のようにしてはいけません。

糸くり、機織り、そして手芸にじゅうぶんはげみ、そうすれば、好かれ愛され、衣食に必要なものを手にいれることができるようになり、こうして生活は安定し、すべてにおいて慰められて生きれるでしょう。こうしたことを神々に感謝することを忘れてはなりません。居眠り、ベッド、怠惰に身をまかせることをつつしみなさい。木かげ、涼しいところ、休息を求めてはならない、それは悪習をもたらし、安楽、怠惰、悪事を教え、もしそんなことになればだれともうまく生活することはできません。なぜなら、そんなふうに育てられたものは、だれからも好かれも愛されもしないでしょう。

わが娘よ、いつでもどこでもよく考え、働きなさい。すわっていても、立っていても、家にいても歩いていても、なすべきことをしなさい。神々に奉仕するためにも、身内の者をたすけるためにも。もし呼ばれることがあったら、二度も三度もくりかえされないようにして、おまえの親たちが命じたことをいそいでしなさい。親たちに苦勞をかけないように、おまえの不従順のゆえにおまえに罰をあたえねばならないはめにならないように。おまえに委ねられたことをよく聞き、忘れてはなりません。それをよくなしとげなさい。おろそかな返答をしてはなりませんし、ぶつぶつ不平をいってもなりません。もしそれをできないならば、つつしみぶかく断りの理由をのべなさい。できそうもないことをすると言ってはならない、だれかを嘲笑したり、うそをついたり、だましてはなりません。神がおまえを見ているのだから。もしだれかほかの人が呼ばれたのにそれに応える用意ができていないようだったら、おまえがすぐにでも行って、聞いて、その人の代わりにやってあげなさい。そうすれば、ひとから愛されもっと受け入れられるでしょう。

だれかがおまえにすばらしい忠告や注意をあたえてくれたら、それを受け入れなさい、そうしないとまえに忠告をした人はおまえのことで憤慨し、だれも相手をしてくれなくなるでしょう。なにごとにもつつしみぶかく、謙虚にし、だれも苦しめてはなりません。しずかに生活し、すべての人を心から愛し、よき目的をめざしなさい。みんなによくしなさい、だれであれ不愉快にさせたり、侮ってはなりません、欲張りともみられるようなことはしてはなりません。仕事でも言葉でも、悪くってはなりません、神々がだれかに財産を与えることがあってもそれをねたんではなりません。

悪いことに身をまかせたり不倫をしてはならない。品がよくないのでツメを噛むのはよしなさい。身がってなふるまいはするな、悪いことがおこり、過ちを犯し、身を汚し、わたしたちを辱めることになるから。水をかき回して濁らせるように悪事に身をゆだねてはなりません。娘よ、うそつき女、盗癖のある女、ふしだら女、街をうろつく女、怠けものの女とつきあってはなりません、おまえを悪の道にひきこみ墮落させるからです。それよりも、おまえの家や両親に有益なことだけに気をつかい、きままに外出して、市場や広場、浴場や身体を洗う場所、街頭をうろついてはならない、これらはすべて若い娘にとっては悪い、身もちくずしやすいところです。幻覚性の薬草、食事、飲酒などが、男たちの正気をうしなわせ道を踏みはずさせるより以上に、悪習は、判断力を奪い、分別をなくさせるからです。わが娘よ、悪徳は、許されざることです。

もしだれかと道で出会い、おまえに笑いかけるようなことがあっても、ほほえみを返し

てはなりません、黙って歩き、話しかけられても無視して、その不作法な言葉を心にとめたりしてはなりません。なにか言われつづけたとしても、顔を向けたり返事をしてはなりません、よこしまなことにそれ以上心をうごかされてはいけないから。相手にしなければ、かれもあきらめて、無事に道をすすめることになるでしょう。娘よ、目的のはっきりしない時には、他人の家に入ってはならない、ひとがそのことでなにかおまえのことを悪くいうといけないから。

でも、親戚の家に行ったら、かれらに敬意をもってせし、すぐに紡錘と布を手にとるか、なにかこれはとおもう仕事をし、手をこまねいてはなりません。親たちが夫をあたえ結婚したならば、夫にたいし冷淡であってはならず、なにかを命じられたときには、それを聞き、従い、喜んでそれをしなさい。夫に腹を立てたり、顔をそむけたり、もしおまえにつらいことであっても、そのことで争ったりしてはなりません、そのほうがかえって夫を冷静にして、おまえの苦勞も穏やかになるでしょう。夫を軽んじてはならない、たとえおまえの財産で生活をするような場合でも、夫にまず敬意をはらいなさい。かれに憩いの場をあたえ、鷲や虎のようにあらあらしくさせるな、夫が命じたことはおろそかにするな、なぜならそれは神々をあなどることであり、そのために夫はおまえを罰せねばならなくなるからである。

娘よ、他人を侮辱してはなりません、なぜなら自分を不愉快にして、みずからを恥辱におとしめるからです。もしだれかがおまえの夫をたずねてきたら、それを感謝してなんらかの役にたてるようにしなさい。もし夫が愚か者であったなら、かれにたいしていかに生きるべきか説きふせ、おまえの家に必要なものをすべて整えることに留意しなさい。自分の家の畑を世話し、まただれかを耕作してくれる人を確保することに十分配慮しなさい。世話をおこたったり、あちこちと気ままに歩いていては、家も財産ももてません。もし物質的な富をもてたとしても、それを浪費してはなりません。それをもっと増やせるように夫を助けなさい、そうすれば、必要なものも得られるし、楽しく慰められながら生きることができるでしょうし、おまえたちの子どもになにかを残すことができるでしょう。

娘よ、いまわたしがおまえに言ってきたこと実行するならば、たかく評価され、みんなから、そしてなにより夫から愛されることになるでしょう。そして、このことで、おまえの母親としてのわたしの義務を果たしたことになる。もうわたしは年老いてきましたし、おまえを育てることを終えました。これで、いつかわたしが、おまえに忠告を怠ったといっって罰せられることはないでしょう。おまえにいい聞かせたこと、忠告したことを、身につけるならば、楽しみと慰めをもって生きれるでしょう。それを受け入れず、果たそうとしないなら、責任はおまえにあり、不幸に苦しみ、自分にふりかかることは母の忠告に耳をかたむけず、よい生活をおくるために自分に必要なもののかえり見なかったせいであるとわかるようになるでしょう。これですべてです、わが娘よ、神々を見上げなさい。

#### 娘から母親への感謝のことば

わが母上よ、わたしに、あなたの娘になんとすばらしい恵みを与えてくださったことか。「わたしをどこに放りだそうというのでしょうか、わたしはあなたのお腹から生まれでたのです」。もしも、あなたがわたしの母親でなく、わたしがあなたの娘でなかったとするなら、わたしにとってこれ以上の悲惨なことはありません。あなたがおさない娘をけんめいに育てあげることについやすした労力をいったいだれに期待できましょうか。ねむくてへとへとになりながらわたしを両腕に抱きながら。もしわたしから乳首を離したり、ねむりこけた腕でわたしを窒息させでもしていたら「わたしはどうなっていたでしょう」。だが、そうなることをおそれて、あなたは安穩な眠りにつくこともなく、それを警戒して徹夜をしました。自分のなすべき仕事のせいでわたしに与えるべき母乳がすぐに乳房からでてこないことを心配して、わたしを身ごもったことで、家を整える仕事も十分でできません。汗水たらしながら、わたしを無事ここまで育ててきて、なおかつわたしに忠告をあたえることを忘れませんでした。「わが母上よ、わたしはなにをもって報いればよいのでしょうか、どのようにあなたに仕えたらよいのか、どうしたら休息をあたえてあげられるのか」。なぜなら、わたしはまだ子どもであり、砂あそびをしており、子どもっぽいことばかりをしており、自分の鼻をきれいにすることさえできません。おお、神よ、これほどのすばらしい忠告からなにほどかを身につけられるようにさせたまえ、わたしはあなたの望むままにいたしますし、神がわたしに遺わした財産の一部をあなたに捧げます。わたしはあなたにおおいに感謝いたします。わが母上に慰めのあらんことを。

### 第23章 インディオの首長や妻人たちが息子を育てる際に示した 規律と正直さについて

息子が生まれると、このヌエバ・エスパーニャのインディオの首長たちは、数多くの妻をもっていたので、ほとんどの場合、それぞれの母親がじぶんの産んだ子どもを養育した。母親がじぶんの手元で育てられないときは、よい乳のでる乳母をさがして、4年間、場合によってはもうすこしながく子どもをあずけた。かれらが離乳するか、あるいは5歳になると、つぎに領主たちは、そこで教義を教えられ、神々につかえる道をすべてよく知るようになるように、息子を神殿につれてゆくように命じた。首領の息子たちが率先してそうした。教えられたところにしたがって、神々に熱心に奉仕しない場合には、きびしく罰せられた。食事をわずかしか与えられず、昼も夜もいそがしく働き奉仕活動をおこない、結婚するまで、あるいは、体力にめぐまれて戦争に従軍するようになるまで、神殿にとどまった。

首長の娘の場合には、家の中では親族の老女、あるいは養育係の女がみまもり、家の外では老女たちが昼間はもちろん、夜もかがり火をたいて徹夜でみまもった。ほとんど邸内にとじこもって、さまざまな習い事をさせられており、母親が奉納のために娘を神殿につかわすような場合をのぞいて、めったに外出することはなかった。外出するときには、多くのお供がついていった。地面から視線をあげないというようにつつしみ深くして、もし

注意をおこたると、すぐにそうするように合図があたえられた。家の外で話をするのは禁じられ、また家の中でも食卓で話をするのは禁じられ、それはまるで法律であるかのようであり、結婚前の娘たちは、食事のときにはけっして話をするとはなかった。

首長たちの屋敷はすべておおきかった。階上部分を使用することはなかったが、また潮の湿気から病気にならないように、部屋を二メートル程度高くして、中二階のようにしていた。こうした家は、菜園や果樹園をもっていた。女性たちは独立の部屋をわりあてられていたが、娘たちは、自分の部屋からおつきの者なしに菜園や果樹園にでかけることはなかった。もし一人で外出するような不始末をすると、血がでるまできわめて残酷にトゲで足をつき刺した。

とくに10歳や12歳あるいはそれ以上の歳になったらうろつき歩くことを注意しながら。またお供をつれて歩くときも、さきに述べたように、視線をあげても、うしろを振り返ったりしてはならず、そんなことをした娘には、乳母がトゲのおおいイラクサで顔をなでつける残酷な仕置きをしたり、あざが残るほどつねった。老女や年長者とはどのように話すべきか、敬意をはらうべきかをおしえ、もし、家を出くわしても、あいさつもせず、従順でなく、母親や乳母に不平を言ったりすれば、罰があたえられた。どのようなことであれ、怠けていたり、不作法であるとみられると、態度をあらためさせるために、太いピンのような刺を両耳にさす罰があたえられた。

女の子が5歳になると、糸紡ぎ、機織り、刺しゅうが教えられはじめ、けっして怠けていることを許さなかった、もしきめられた時間より前に仕事をはなれるようなことがあれば、そこにちゃんと落ち着いてとどまっているようにと足を縛りつけた。もしある娘が、「音楽が聞こえる、どこで歌っているのかしら」といったことでも言おうものなら、きびしく罰をあたえ、しかりつけ、娘たちをよくしつけずつましくすることを教えていないことを理由にして乳母を牢獄におしこめた。なぜなら、そんな言葉をはく娘は、浮ついた気持ちで、平常心を失っていると考えられたからである。未婚の女やとくに若い娘は、あたかも耳のきこえないもの、目のみえないもの、口のきけないもののようにふるまうことを期待されているようにおもえる。

娘たちを、徹夜させ、働かせ、早起きさせた、なぜなら、怠惰は悪徳のもとであるとしてのろまにさせないようにしたからである。いつでも清潔でいるように、熱心に一日に二度も三度も身体を洗った、そうしない女は、不潔でなまけものといわれた。ある女が重大なことがらで非難され、そしてそれにたいして無実であるなら、名誉を回復するためにつぎのような誓いをした。「おそらく、わが主である神がわたしを見ていないということがあるのでしょうか?」、そしてもっとも深く信心している神の名前を唱え、地面にひざまずきキスをした。この誓いによって、おおくの人々は彼女にたいする誤解をといた、というのも、真実をのべることをしないであえてこのような誓いをするものはだれもいなかった、というのも、もしうそをつきながらそんな誓いをすれば、神が罰として本人を重い病気にするか、あるいはべつのつらい境遇におとしいれると信じられていたからである。

首長が、じぶんの息子や娘にあいたいとおもうときには、ひとりの律儀な年長の女性が

かれらをひきつれて行列をつくって会いにいった。かれらが父親たる首長に会いたいと望むときには、だれであれまず最初に許可を得て、首長にそのための時間があることを知った。首長の前にでると、かれは床にすわるように命じ、案内役の女性が子どもたち全体を代表してあいさつし、話をした。かれらはすべてきわめておとなしく、つつしみぶかくしていた。とくに小さな女の子たちまでも、年長の分別のある人のようにふるまった。案内の女性が、母親が子どもたちがもたせてくれたバラの花や果物のようなプレゼントを父親にさしだした。娘たちは、父親のために刺しゅうした、あるいは織り上げたもの、たとえば刺しゅうの入ったマント、あるいは小さな贈り物をもっていった。父親は、すべての娘に話しかけ、良い子であるように、母親や先生である老女たちのいましめと教えを守るように、その人たちに従順でうやまうように忠告し、願い、また娘たちが持ってきた贈り物に、よくがんばって根気よくマントに刺しゅうをしたことにたいして礼を言った。これにたいして、娘たちはだれも返答をせず話もせず、ただ到着した時と出発する時に、笑いかけたり軽はずみなことをすることもなく、おおいなる敬意と配慮をこめて頭をさげるだけであった。父親の話しかけてくれた言葉は、おおきな満足とうれしさをもたらした。

こどもが乳児である時には、乳母は、不注意でいると時々おこるように、寝ている間に押しつぶして殺してしまうことのないように、乳児にちかづきすぎないようにおおいに警戒をおこたらず、あるいは、乳児をゆりかごに入れても、母親も乳母も目をはなさなかった。

もし万が一、なにか悪ふざけがおこったら、そんなことはまずなかったが、だれか若者が男子禁制の場所、首長の娘たちがいるところに入ろうとでもしたなら、たとえ単にだれかと会って話をただけだとしても、双方とも死をまねがれなかった。テシュココの王、ネサワルピルティントリのひとりの娘に実際におこったように。その父王は娘をふかく愛しており、身分の高い母親の娘であり、おおくの嘆願があったにもかかわらず、それをのがれることはできず、かのじょには絞首刑が命じられた。ひとりの要人の息子である若者が、壁をのりこえて、おたがい話をしようとしたのである、かれはなぜかはしらぬが責任をまねがれ、無罪とされたが。

#### 第24章 インディオたちがどのように息子たちを教えさとしたか、 また結婚に際して息子にあたえた忠告について

一般の平民も、息子を養育する際には、規律をもつてのぞみ注意をおこたることはなかった。息子たちが判断力や理解力をもちはじめるとまず、健全な助言をあたえ、悪徳や罪をおもいとどまらせ、つつましく、従順で、すべてのひとに丁重であるように説きふせ、神々によって与えられた仕事に身をいれるように忠告した。それぞれの能力や性向におうじて、神殿に連れていったり、仕事をあたえたり、職業を教えたりしたが、もっとも一般的なのは、父親がおこなってきた仕事や職業をつがせることであった。もし子どもが悪行や不法をしたときには、かれらをきびしく罰した、あるときには、きびしく叱りつけ、



しばしばこん棒のかわりにイラクサで体をむちうち、またある時には、細枝でたたき、もし態度をあらためないようなら、逆さづりにして、トウガラシのいぶし煙をすわせた。必要とおもわれる時には、母親も娘にたいして同じことをした。もし息子たちが家によりつかない時には、再三にわたって父親じしんがかれらを探しだしてつれもどったが、それでも駄目なときには、矯正不能とみなしてそのめんどろを見ることを放棄した。そうした者のおおくは、いつかは絞首台にのぼるか、奴隷になりはてた。

いまでこそインディオたちには、うそをつくような悪習がみられるが、(スペイン人の征服以前の) 当時は、父親が、真実を語れ、うそはつくなと息子たちに熱心に忠告していたのである。もしかれらがうそをつくようなまねをすれば、その罰としてくちびるを切って小さな傷をつけることをしたので、おおくの者は真実をしゃべるのが常であった。

かれらのだれかに、現在かれらの古い習慣がこのようにおおく変化してしまった原因はどこにあるのかを訊ねたとしたら、答えは二つあるでしょう。一つは、それが俗人であれ聖職者であれともかくスペイン人にたいしてかれらはいだく恐れはきわめて大きいために、ひけめや臆病さのゆえに、命じられたことや、尋ねられたことよりも、それが可能であるか否か考えず、ともかくスペイン人をよろこばすと思われるようなことを答える傾向があるのである。この同じ理由から、自分が確かにしたのに、まずい伝言はいつでも否定し、弁解をして、ふたたびでたらめを言う。

また第二の理由は、スペイン人が入城して以来、戦争は全土におおきな浮沈をもたらし、インディオの首長たちは臆病になり、以前には統治するためにもっていた勢いをうしない、そのために前にはあった裁きの厳格さ、処罰、秩序、調和をもうしない、それゆえに、いまやかれらの間では、うそつきも誓いをやぶる者も、不義密通さえも処罰されなくなっている。それゆえに、女性たちは以前の時代にそうであったよりもずっと悪ずれするようになっている、またかれらは以前にはみられなかった不貞のような大きな悪習を学んだのである。

前に述べたように、要人の子弟であれば、偶像にささげられた神殿において養育されていた。そのほかの者は、兵舎のようなところで育てられた、各地区には、「テルプチトラト」すなわち「番人」ないしは「若者の隊長」とよばれるひとりの責任者がおかれていた。この人物は、若者を集めたり、かれらといっしょに、偶像にささげる灯明や火鉢用の、また神殿の部屋でつかうための薪をとってくる仕事をした。毎夜ついやされる薪はそうとうな量にのぼった。またかれらは、公共の仕事、神殿の建設や修理、神々に外から仕えるのに必要とされるそのほかの仕事に奉仕し、要人たちの家を建てるのを手伝った。また自分たちの衣食をまかなうために、自分たちで耕作し、種をまき、収穫するための土地や家屋をもち、こうして、かれらはまた、自分たちで期間をきめて断食し、みずからの体から血をながす犠牲を行い、偶像に供物をささげた。かれらはグズグズしていることは許されず、悪習にふけることは年長者の耳に入るなら罰をまねがれなかった。かれは若者たちにたいして責任をもち、説教し、矯正し、罰をあたえた。

これらの若者のうち、より体力にめぐまれたものは戦争にでかけ、ほかの者もまた、軍

隊がどのように訓練されるかを見て学ぶために出かけていった。自分に委託されたことがらを、なんの不平ももらさず、すべてのことがらをなし遂げたのはこのような従順かつ機敏な若者であった。昼夜をとわず、山であろうと谷であろうと、雨がふろうと太陽に焼かれようと、ものともしなかった。

20歳前後で結婚の年齢になると、妻をさがすため許可を求めた、不許可のまま結婚することはめったになかったが、そうしたものは、苦行をかされるだけでなく、恩知らず、しつけの悪い、背教者とみなされた。もしも適齢期がすぎても結婚しようとしないと見なされると、かれらはトラ刈りにされて、若者の集団から放りだされた。とくにトラシュカラにおいては、こうした習慣が残されており、結婚の儀式のひとつは、トラ刈りにされ、若者の頭髪をおとしたため、それからは髪形がかわった。

結婚するために自分の育てられた宿舎をでる時には、その隊長は、かれらに長い説教をし、神々への熱心な崇拝者となり、その宿舎や集団で学んだことを忘れないようにと忠告した。妻をむかえ家をもったなら、家族をささえ食べさせてゆくのは男の仕事であり、また戦争の時には、力強い勇敢な男になるようにと。両親を尊敬し従順であれ、老人には敬意をはらい挨拶をかけることのないようにと。

ほかにも同じようなことを、説得力にとむ雄弁な言葉でかれらに忠告した。また娘たちにたいしても、結婚にさいして、助言と教訓を与えることをおこなった。とくに首長や要人の娘の場合には、きわめて長い忠告をあたえた。娘が家をでるまえに、両親は、よい結婚をして夫から愛されるために、どのように夫を愛し、喜ばせ、仕えたらいいのかについて教えさせた。とくに母親は、娘に長い話をして、おもにつぎの三点について留意させた。第一に、神々をよろこばすために、供物と自分の身体を犠牲にして礼拝をすること、なぜなら、すべてのことがらは神々がもたらし、とりはからって下さるからである。第二に、よき身持ちと正直さについて、じぶんの家柄の名誉にふさわしく義務をはたすべきことと、恵まれない者たちに身をもって見本を示すように娘に言った。第三に、夫への奉仕と愛、かれにはらうべき敬意について。こうした話は、夫の側から娘のお供をしてくよう派遣されてきた数人の上品な婦人たちの立会いのもとでおこなわれた。これらの婦人の手に娘をゆだねながら、あちらの方々やこのような高潔な上流婦人に相談にのっていただき、慰められ、その教えにしたがうようにと語った。

### 3. 神殿に捧げられた若者たち

ディエゴ・ドゥラン修道士

#### [ テキストの解説 ]

ドゥラン修道士の著作においては、神殿にささげられる者でも、二つのタイプの間での相違が強調されている。いっぽうでは、若者は、男も女も、都市の特定の地域の出身であり、一定のかぎられた期間、正確には一年の期間、ウイツロボチトリ神にささげられる。もういっぽうは、より長期間にわたってテスカボリトカ神とケツアルコアトル神に奉仕をする若者たちのものである。スペイン人の目にも、後者の方は、教育をうけている生徒として認識するのもより容易であった。しかし、前者のウイツロボチトリ神に奉仕する若者と後者の生徒との間の区別は、インディオの意識の中には存在していなかったにちがいない。これらの家はすべて、若者たちが、聖職者的な役目をはたしながら、成人になったときにそれぞれの特殊な機能を遂行するために必要とされる知識や規律を身につけるための場であった。

古代ナウア族の研究のためにもっとも価値のたかい文献資料は、ドゥランとサアグンの資料である。ディエゴ修道士は、1537年スペインのセビリアに生まれ、まだほんの子どものときに、6歳か7歳でテシュココ市に到着した。そこで子ども同士の遊びの中で自然にナワトル語を学び、そこで20数年にわたって、古い伝統の中で生活してきた人びとと知り合いになった。1556年に、メキシコ市のサント・ドミンゴ教会で、ドミニコ会の修道士となり、5年後にオアハカ地方に派遣された。1570年から1581年の間に、その記念碑的な著作を生み出した。ここでは、かれの生まれ育ったテシュココについてではなく、メヒコ＝テノチティトランの歴史と伝統を書きしるした。マドリッド国立図書館所蔵の手稿においては『インディアスの歴史、その古い偶像崇拜と宗教の論述、その暦』とタイトルをつけられたこの業績は、つぎの三つの部分から構成されている。1)メヒカ族の歴史、このインディアスの住民の起源の問題、神話上メヒカ族の起源とされるチコモストックの七つの洞窟からの出発から、クアウテモック王の死亡の時まで。2)儀礼、お祭り、宗教的儀式についての記述。3)古い暦についての記述の部分。この仕事を完成して数年後の1588年に、ドゥラン修道士は、メキシコ市で死去した。

ドゥランの著作は、信頼できる完全な情報をあつめることにたいするかれの熱意の集大成である。インディオの古老たちに個人的に質問したものであれ、古い絵文書にあたったものであれ、かれの研究はその情報源に関して直接的に言及している。かれの中心的な関心の一つであり、すべての問題の中で最大のものは、インディオたちの起源に関することであり、その業績の中でも再三にわたって論及されている。かれは、インディオたちはユダヤ人の子孫であると信じており、筆写された断片的な資料にひとつにメヒカの統治者たちが割礼をおこなったとの記述がある——おそらくその情報にはあまり信頼性がないが

——ことをその理由としていた。

参照した文献テキストは、現在マドリッド国立図書館にあり、まとめて『ドゥランのアトラス』の名をつけられており、118 点の絵のついた全部で49丁のコレクションである。これらの絵のいくつかは、それはあきらかにヨーロッパ風のつよい影響を受けているのが見られるが、本書においても再録している。

ここに提示するテキストは、メキシコにおける1951年版からとった。それは1867-1880年に編集された版( アンヘル・マリア・ガリバイ編集版) につけられたタイトルである

『インディアスのヌエバ・エスパーニャとティエラ・フィルメの島々の歴史』( *Historia de las Indias de Nueva España y Islas de Tierra Firme* )の題がそのままついている。歴史と儀礼、祝祭、儀式の論述は、上記の版では、第26、第80、第83、第84、第94章のなかの一部ににあたる。

## モテクソマ・イルウイカミナの改革：学校の設立

メヒコの王宮は、洗練、秩序、調和の状態にあり、しつけもゆきとどき、悪いことや無秩序が生ずることがないようにとじゅうぶん配慮しながら規律を重視して生活をしていたが、その支配下にある他の王たちを管理し統治するための命令、法律、個々の勅令を出すことは王の希望であり、意思であった。それによって、今後守られるべきこと、すなわち、かれの支配下にある国のそれぞれが守り遂行すべき生活の条件や態度を決めておこう、古い習慣にしたがいながら、かれの王国に可能なかぎり最善の命令をだしておこうとした。すぐれた命令を策定するために、モテクソマ・イルウイカミナ（モテクソマー一世、1440～1469年統治）は、その宮廷の有力者たちと相談をした、というよりむしろ、かれの王国や周辺のすべての地域のすべての有力者をあつめ、最高会議をひらき、それを通じて、王たち、それにつづいて偉大な要人たちにたいして栄誉、尊敬、畏怖、畏敬がはらわれねばならないことが命じられた。またそれは神々を崇拝し、そのような扱いをすることを命ずるものであった。----

（この改革の一環として）すべての地区に、監督する教師と長老たちをおいた学校と若者の宿舎が設置されるように命令をだした。そこではすべての若者に、宗教と良きしつけ、苦行と過酷さ、よき習慣、軍事的訓練、肉体的仕事、断食、規律、自己犠牲、徹夜の監視などの訓練をおこない、また教師たちには、かれらを、叱咤し、矯正し、処罰し、日々の鍛錬に従事させ、かれらを怠惰に、時間をむだづかいさせないようにし、これらに違反すれば命にかかわるほど、厳格きわまりなく貞潔を守るよう監督するよう命じた。

## 大神殿の構内の二つの僧院

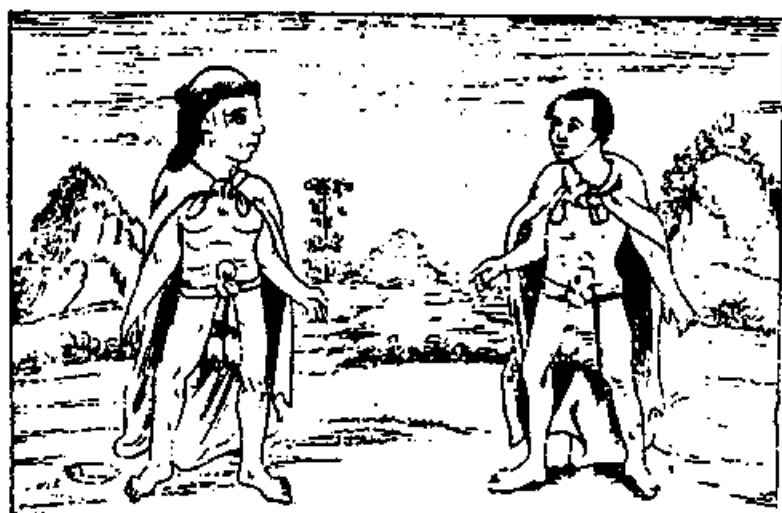
前述のように、この神殿には、二つの僧院があった、ひとつは、宗教者とよばれる18歳から20歳の青年をあつめたものである。かれらは修道士のように頭のでっぺんを剃りこみ、髪をすこし長くして、耳の半分ぐらいまでかかるようにのばし、後頭部のほうはに四デード（約8センチメートル）ほどの幅にして、背中にかかるほどに長くのばしており、時折、三つあみのよう編み上げていた。

これらに関してはある程度の差異がある、ある者は、メヒコにおいては剃冠はなく、カミソリで丸坊主にしており、チャルコ地方とウエホツィンコの神殿の宗教者だけがそのようにしていたとも言われる。その様子を描いた絵が本書の別の紙にある。

この絵はウイツロボチトリ神に仕えるために集められた若者のものである。かれらは、清貧、貞潔、従順の生活をし、神殿の聖職者と高僧を助ける助祭の仕事をし、さげ香炉、灯明、服装をととのえた。聖なる場所を清掃し、常夜灯としての役目をする聖なる火鉢に燃やしつづけるための薪を集めた。

ほかの若者たちもいた、かれらは、この神殿で、侍者のように者として、木組みを造ったり、神殿に花や食事をささげ、聖職者に手洗いの水を用意する、自己犠牲のためのカミ

ソリの管理、供物をそなえるために施しものを求めるために出かける人に同行するなどのようなこまごまとした仕事をする役目をはたしていた。これらの者はすべて、かれらを担当する隊長や上司をもっており、この隊長は、「若者の頭」という意味のテルポチトラトケとよばていた。



剃髪した聖職者の様子（ドゥランのアトラスの挿絵）

これらの者はすべて、きわめて清廉さと慎重さのなかに生活しており、女性がいるような公衆の前にてかけるときには、頭をひくくして、視線を地面におとし、けっして女性を見上げることのないようにした。衣服としては網のマントをつけていた。

こうした集められた若者をエロクアテコマメと呼んでいたが、われわれの現在の使用法からするとこの言葉はほとんど誤りである、なぜなら、丸刈りの頭をいうのにはすべすべしたという意味のテコマトルという言葉をつかうのであり、剃冠をした頭のばあいにはトロトルをつかうべきであり、エロクアテコマメという言葉は「頭頂部が丸くカップのようにすべすべした頭」を意味するからである。――

これらの若者は、4人ずつ、6人ずつ、苦行をおこないながら、各地区でお布施を求めるために街にでる許可を得た、また施しものが与えられないときには、所有者がかれらにたいしてわざわざそうして「良い」とも「ダメ」とも言わない場合にかぎって、種をまいた畑に行き、必要なほどのトゥモロコシの穂を集める許可を得た。かれらは清貧に生活し、収入も生活の糧をえる道もなかったので、お布施を求めて得られないときには、その日の生活のささえとして畑からそれを得ることが許されたのである。

また貞潔と苦行の生活をした。こうした苦行は50種類ちかくにもものぼった。すなわち、それは、神殿の灯明を常にとましておくように芯をかき立てること、燃やすための薪を運ぶこと、神殿を木の枝で飾り整えること、灯明が消えないように偶像のまえで不寝番する

人たちを起こすための夜中に起床してほらがいを吹くこと、夜中に、早朝に、正午に、そして祈禱のときに、神官たちが偶像に焼香するための下げ香炉を準備すること、などである。

この焼香の儀式はトレナマクトリと呼ばれた。これらの若者は上長者にしたがい、きわめて従順であった。戒律をきびしく守った。かれは、焼香がおわる時刻に、真夜中に、特定の場所に出かけてゆき、腕のやわらかい部分を自己犠牲として傷つけ、血がでるとそれをコメカミから耳の下にぬりつけ、それが終わると、洗うために湖にいった。この湖については、神殿の神官について述べるところでふれることにする。

これらの若者は、からだを朱色に塗らないし、頭にもからだにも黒い墨をつけることもない。その衣服は、きわめてざらついた白色の、エネケン麻製のマントであった。こうした苦行や鍛錬をまる一年間つづけ、その間は、断食や異質な苦行をするなどきわめて隠遁した、修業にみちた生活をした。

中庭の反対側に、第二の家と宿舎、12から13歳の「苦行の娘たち」とよばれた少女たちを集めた女性神官の宿舎があった。男子のものとはほぼ同じくらいあちこちにあった。これらの少女たちは、神々に仕えるために派遣された娘として貞潔と隠遁の生活をした。神殿を清掃したり水をまいたりする仕事につかない者たちは、毎朝お布施としてあつめたものから偶像や神殿の神官たちのための食事の用意をした。

偶像にささげた食事は、手のかたち、足のかたちに作った、小さなトリティーリャ、果実でつくった菓子であった。この種の食事は、マクパルトラシュカリ、ホパルトラシュカリ、ココルトラシュカリとよばれていた。こうしたパンとともにトウガラシの料理をつくり、偶像の前にささげた、これは毎日のことであった。これらの少女は髪を刈り込んでそこに入るが、その後は髪を長くのばしたまとする。

この絵は、ウイツロポチトリ神に仕えるために集められた少女たちの姿を示している。少女たちは、現在、修道女が住んでいるのと同じような僧院に、一定の期間、貞淑と純潔をまもって生活し、聖所を清掃し水をまき、神々と神殿の神官や高位の者のために食事をつくった。彼女たちは、いくつかのお祭りのときには、足や腕に羽根飾りをつけ、頬に色をぬった。

真夜中に起床し、神々を褒めたたえ、男子の若者がするのと同じようなお勤めをおこなった。女性修道院長のような婦人たちがおり、彼女らを監視し、神々や神殿の装飾のために、きわめて手のこんだ刺しゅうのマントを製作する仕事や、そのほかの神々への奉仕と崇拝のためのさまざまな仕事に従事させていた。

いつも身につけている衣服は、まっ白な刺しゅうのないものであった。男子の場合と同じくこのお勤めは一年間つづくものであった。奉仕と苦行の一年間が終えると、結婚することが可能になりそこを出る、その者たちが出ると、自分から、あるいはその両親が、そうした苦行をしながら一年間神殿に奉仕する誓いをした別の娘たちが入ってくる。

真夜中に、男子の若者たちが腕のやわらかい部分を傷つけ自己犠牲をしたのと同じ時間に、彼女たちは耳の先端に上の方から傷をつけ、その流れでた血を頬に、つまり化粧をす

る場所にぬった。これらの娘たちは、その宿舎にその血を洗うための水槽をもっていた。



神殿に仕えた娘たち（ドゥランのアトラス 挿絵）

これらの者の宿舎は大きかった。きわめてつましく生活するかれらを監視する目はきびしく、もしだれかが、男でも女でも、なにか罪をおかしたとするなら、たとえ軽いものであったとしても、誠実さに反するものであるなら、それは神々やその偉大な首長を侮辱するとみなして、すこしの容赦もなく彼らを死刑にした。

かれらをそれを前兆であるとみなした。そのような人間は、すこしの根気もなく、弱点をおおくもった者たちであり、たとえば、偶像の礼拝堂にネズミ、あるいはコウモリが出入りするのを見てもたいした注意も警戒もせず、神殿のマントに虫食いがある、あるいはネズミが道具にあけた穴があったとしても、後になって、ネズミ、コウモリ、あるいは、そのほかの小虫が偶像を侮辱するふるまいにでた、なにか罪が犯された、神にたいして侮辱がおこなわれたと声高にさげび、かくも大きな不敬と不信心の原因がそもそもだれにあったかを認めることもないであろうと。非行が発覚すると、たとえ優秀な生徒であったとしても、すぐに死刑にされ、そのことによってかれのおかした神にたいする侮辱にたいし報復をした。その侮辱は、テトラソルミクトティリツトリとよばれた。

これらの若者と娘たちは、そのために指定された六つの地区の住民であらねばならず、その以外の地区からのものはいなかった。これらの男女は、ある祭りからつぎの祭りまで一年間、この神殿で奉仕した。その隠棲と苦行の一年をおえるとそこから出た。上記の地区の首長や世話役たちは、すでにその年に偶像への奉仕と隠遁と苦行をとまなう鍛練をはじめめるためにそこに入るべき者たちを用意しており、神官や宿舎の長老たちにかれらを引き渡した、こうしてその若者たちはその年のお勤めに入った。これは絶対確実なことであり、そのカルプーリ（地区）が、この偶像に仕えるために選出される若い男女を欠かすことはけっしてなかった。-----



――メキシコのこのテスカトリポカの神殿は、現在、大司教館がたてられている場所にあった。そこに入ったことがある者にはわかるが、そこには盛土がなされ、地下の部屋をもたないどっしりとした司教館がたてられている。

そこにこの神殿があり偶像がおさめられていた、その建物は、ウイツロポチトリの神殿におとらず立派に、そびえ立ち、凸凹状の飾り壁にかこまれており、奇妙な像、彫刻をもち、しっくいを塗られておりどこからみても壮観であった。その中庭の中やちかくに多くの部屋をもち、そのいくつかはその神殿の高位者のための個室となっていた、というのも、それは司教座教会のようなもので、最高の神々のためのとくべつな神殿であり、ほかのものは、教区教会のようにこれほど立派なものではなかった。

また、すでに礼拝や儀式において長老神官たちに仕えている若者の集団のための部屋があった。かれらは、隠遁、清貧、服従を守り、すでに長老たちと同じ苦行をおこなっていた。

また、若い娘や女性聖職者のための部屋があった。これについては前章において述べた。その服装、おつとめ、お祭りの際の偶像への奉仕、どのように盛装したかについて。この挿絵のような。

その他の神々について語るまえに、この神殿の神官について、その儀式、衣服の様子、法服、かれに仕える者たち、留意すべきことがおおいので、わたしは、それを語るために特別の章をもうけた。かれらが行った多くの、すさまじい苦行について、その厳格さ、そうした重苦しい血なまぐさい修行をおこなう執拗さについて述べる。

この神殿の聖職者と高位者は、特定の地域の出身者でなければならないとされたウイツロポチトリ神に仕える者たちのように、その神に仕えるために選出された者ではなかった。この神殿では、そのやり方とは異なり、子どものころからこの神殿にゆだねられた人びとであった。――両親は、（カトリックへの改宗前の）異教徒の時代には、神々によって保護され、加護されるようにと子どもをそれに提供した。子どもが病気になったり、なにか危険な目にあったりしたときに、そうしたことをおこなった。世界の国のどこよりもその子どもを愛する人びととして。こうして、そこで養育され、神殿に仕える方法、よき習慣、あわせて神々の儀式と崇拝を学ぶようにと子どもを神々にゆだねた。

こうした子どもたちのために、学校あるいは寄宿舎のような特別の部屋があり、そこには多くの若者がおり、かれらを教育し、良き称賛すべき修行や習慣を訓練する養育係や教師がいた。かれらは、子どもがよくしつけられ、上長の者を尊敬し、仕え、服従するようにと、首長たちに役立ち氣にってもらうためにいかにして仕えたらよいか、教えをさずけた。そこでは、かれらに、歌、踊り、そのほかたくさんのがらを教えた。こうして、またかれらに、軍事教練、マトをめがけて矢をなげること、円楯と剣をうまく使いこなすこと、銛あるいは革ひものついた槍を投げることを訓練し、また子どものときから勤勉にし、甘やかして育てられないようにと、睡眠をけずり、粗食に耐えるようにさせた。

この家には、要人の子弟から身分のひくい人びとの子どもまであらゆる種類の人間がいた。これらはすべて室内にいたが、王や要人たちの子どもは、いつでもより尊重されており、それぞれの家から食事を運ばせていた。とくにモテクソーマ王の子弟やそのほかの高官や首長の子どもの場合には。かれらには貞潔に生活し、断食をし、度をこさないように、落ちつきと節度をもって、あわてずに飲食するよう説教し忠告し、また実際にかれらにそれが徳として身につけているかを見るために、いくつかの仕事やきつい作業をやらせてみた。

この家は、テルポチカリと呼ばれたが、それは「若者ないし少年の家」という意味である。そこで養育され、上述のような訓練を教えられたのち、それぞれの若者のもつ性向にしたがって、最も適しておりそれに向いていることをさせた。もしかれらのなかに、戦場にゆくことに意思と活力があることを見いだすと、年齢をかさねて適当な時期になると、兵士に食事や糧食をはこぶということを口実にして、そこでどんなことが行われているか、困難な仕事を見させ、恐怖心とりさるようにと戦場に派遣する。こうして何回か荷物や隊長と勇者の旗印をかついで戦場にゆき、戦場で捕虜になるのと戦死することがどちらが望ましいかを見ながらもどってくる、なぜなら、捕虜にされるよりも身を粉々にされるほうが数倍よいとされたからである。この方面に向いているとされた者の大部分は、勇敢な人びと、首長、要人の子弟であった。こうした、よい家柄に生まれた者が、法律、王、祖国を守ることに自らの人柄をしめし、その人柄と血統の良さを証明しようとすることは世界中のすべての国で共通にみられることである。

宗教や修道生活に適性があり向いている者の場合は、その性向と様子がわかると、すぐに、みんなから隔離して、おなじ神殿の中にある部屋と宿舎につれてゆき、聖職者としての記章をつけさせた。--- こうしてこのインディオたちを、偶像の崇拜と儀式を学んだこの学校から連れだして、より権威のたかい別の家と部屋に、トラマカスカリとよばれるところに手渡した。

### トラマカスカリ

この名前は、「完成した人間」を意味するトラマカス（実際のところ、トラマカスキは文字どおり「供物をささげる者」を意味しており、この名前は、カルメカクの生徒および聖職者であったものにたいしてあたえられていた——編者注）と、「家」を意味するカリから構成され、その意味は、「青年期の頂点にたった若者の家」ということになる。こちらのインディオは、その年齢層を区別するのに四つの言葉をもっている、第一は、われわれのことばで「児童期」にあたるピルツィントリ、第二は、ほぼ「青年」にあたるトラマカスキ、第三は、「すでに成熟と完成の年齢」という意味のトラバリウキ、第四は、「老齢」を意味するウエウエテキである。（この文章には、矛盾と誤りがある、「若者」は、テルポチトリであり、「既婚の者」はトラバリウイであり、「成熟した者」はオキチトリである——同上）これらの住民の中では、老人はおおいに重くみられ尊敬されており、

それは今日でも要人たちの間ではみられ、かれらの存在、意見、勧告はおおいに尊重され、それがなくては何事もさきにすすまない。

そして、これらの若者を、より権威のたかいこの家に連れてきた、その家と宿舎には、かれらを保護し、まなぶ必要のあることを教え身につけさせる別の教師と高位聖職者がおり、この第二の家に入ったその日から、最初になすべきことは、イエス・キリストのように髪をのばしたままにすることであり、第二には足から頭までを黒い墨で塗ることであり、髪もすべて、おおくのススをふりかけ水でしめらせておくことであった。やがてそこにはカビのようなものが生えるようになり、それを三つ編みのようにしておくと、まるで馬のたてがみのようにしか見えなかった。それは時間がたつとともに鉤状のものとなり、頭の上でかなりの重さとなり、それは彼にとってはおおきな苦行となるものとなった。この髪は、死ぬまで、あるいは隠遁生活に入る、あるいは、かれらがトラクヨトルとよぶ国家の名誉職にしりぞくまで切り整えることも短くすることもなかった。こうした髪を三つ編みにするか、六デード（10<sup>th</sup> Grade）ほどの白い木綿の結びひも結んでいた。――

――またこれらの神官たちは、最近生まれた子どもにたいして別の儀式をおこなった。とくに首長や王の子弟の場合には、耳と割礼のように生殖器に傷をつけ、そして、それが男の子の場合には、かれが産まれた時に洗い清めたその同じ神官が洗い、その右手に小さな剣をもたせ、もう一方には小さな円楯を持たせた。この儀式は、子どもにたいして四日間連続しておこなった。両親はかれにおおきな奉納をおこなった、もしそれが女の子なら、四回洗ったのちに、手に刺しゅうの手本をつけた小さな糸巻と機織りの装飾品を持たせた。別の子どもには、手に矢と弓をもたせた。そのほかの平民の子には、生まれた者が将来つくことになる職業のシンボルとなるものがあたえられた。もしその宿命が画家になる者だとするなら、その手に絵筆がにぎられ、大工なら手斧が、そのほかの者にはべつのものであるように。

### ケツアルコアトルの神殿

この神殿には、ほかのものと同じように、この偶像に奉仕し、また後にその神官の後継者となるためにその崇拝の儀式をまなぶためにおおくの者があつまっている部屋があった。そこには、ここに住みこみ、そうした若者たちに命令し教えをあたえ、また偶像のためのあらゆる儀式をとりおこなわせることに責任をもつひとりの聖職者がいた。これは週番のようであった、というのもその神殿には三～四人の高位聖職者がおり、ある者がこの週、べつの人が次の週というように交代でつとめ、この間は、外出することもなく、毎日、太陽のしずむ時間になると、その神殿にだけあるおおきな太鼓を打ちならし、今日われわれがアヴェ・マリアを演奏するように、それで時をしらせる。その太鼓はきわめて大きなものであり、そのおももしい音は、街中どこからでも聴くことができた。その音は、街中をまるでそこにだれも人がいないようにみえるほど静寂につつませ、市場はしずまり、すべてを奇妙におもえるほど平静にしていた。その音を合図にしてすべての人びとは帰宅

した。こんにち、われわれが人びとに帰宅をうながすために外出禁止時刻を知らせる鐘をならしているのとおなじように。

こうして、太鼓の音を聞いたインディオたちはつぎのように言った。偶像の第二の呼び名であった「エエカトルがなったので、われわれは帰宅しょう」。夜明けには、ふたたびかの神官が、われわれが現在そうしているのとおなじ時刻に、太鼓をならした。その音を合図にして、旅行者やよそ者たちは、急いで旅立ちの支度をした、というのもその時間までは都市から出ることは禁じられていたからである。また、農民、商売人もその音を合図にして、あるものは市場へと、ある者は農地へと急いででかけた。女性たちもまた、自分たちの所有物を掃除するために起床した、それはいくつかの迷信にもとづいている行為であり、今日でさえも偶像崇拜の気風がのこるこの都市では、じぶんの所有物、さらには、他人のものでさえも、掃き清めるために夜明け前に起床することが持続している。



聖職者たちのおこなった苦行（ドゥランのアトラス 挿絵）

### クイカカリ

すべての都市には、神殿のそばに、歌うことと踊ることを教える教師の住む大きな家があった、それらの家は「歌の家」という意味のクイカカリと呼ばれていた。そこではもっぱら、若者や娘たちに歌、踊り、楽器の演奏をおしえており、かれらはこうした学校にまちがいなく通っていき、きびしくそれを守っていた、というのも、かれらはそれを怠ることをまるで反逆罪でもあるかのようにとらえており、そこに通わなかった者には罰則が規定されていた。あるところでは処罰されることにくわえて、踊りの神がおり、もしそれをサボったりするとかれを侮辱することになると恐れていた----

おおくが14歳、12歳前後である少年少女に踊りを教えるのために、かれらをいかにして

集めるのかということを知る必要がある、というもの舞踊学校を見つけては自由に出入りするわれわれスペイン人とはちがっているからである。こちらの先住民の間ではきわめて注目すべき秩序がみられた。踊りを教え込まれる若者たちを集めて引率するために、すべての地区にもっぱらその仕事のために選びだされ委任された長老たちがいたことである。かれらは「人びとを集める者」という意味でテアアンケと呼ばれていた。

少女を集めるためにすべての地区において特定のインディオの老女がおり、彼女たちは、「女性の番人」あるいは「婦人」という意味でシウアテビスケと呼ばれていた。

各地区の若者を集めると、長老が引率して、かれらとともに歌の家に行った。老女の場合もおなじように少女たちを引率していった。これらの長老、老女たちは、若者たちを、かれらがそこで奉仕し、しつけを学んでいる学校や宿舎に、あるいはそれぞれの親の家に連れ帰ることに最大限の注意をはらい、また、きわめて厳格に保護され監視されている娘たちにたいして、若者たちが、不作法、嘲笑、合図などをしないようにと注意をおこたらず、もし、そうしたことがすこしでも感じられたなら、かれらをきびしく罰した。

メキシコ、テシュココ、トラコパンの各市においては、通常の踊りのための大きな美しい中庭の周囲に多くの大きな部屋や広間をそなえたきわめてりっぱな建物の踊りの家があった。メキシコ市において、この家があった場所は、現在は、商人たちのアーケードのあるところで、すでに述べたと思うが、かつてここは市の中心部で巨大凸凹型の胸壁で取り囲まれた華麗で巨大な神殿が10も12もあったところで、この神殿をとり囲む胸壁から一ブロックはなれたところにこの歌と踊りの家があった。

そこに通うための手順は、太陽がしずむ一時間前に、一方から長老たちが出かけ、もう一方からは老女たちが出かけ、それぞれ若者と少女たちをあつめて歌の家へと引率し、男女、それぞれにきめられた部屋に入れる。全員がいっしょに庭にでて準備ができると踊りと歌の家の教師たちが出てきて、その中庭のまんなかになんぞ演奏する楽器をおく。若者たちが前にでて、それぞれ順番に、同じ地区の出身で顔みしりの少女たちの手をひいて中庭に中央にいる教師たちの前にでて、歌や踊りをはじめる。音やリズムにあわせてバックステップがうまくできない者には、教師がじゅうぶんに配慮しながら熱心に教え、かれらは夜のかなりおそい時間まで踊りをつづけた。おおいに満足し楽しみながら歌い踊ったあと、男女はそれぞれの場所へと分けられ、それぞれ長老と老女たちがそれぞれの家に連れかえり、すでに述べたように、まちがいの誤りもないようにとそれぞれの面親にひきわたした。-----

## 4. 神殿＝学校での生活

ベルナルディーノ・デ・サアグン

### [ 文献について ]

ベルナルディーノ・デ・サアグン神父の業績の価値を認識するためには、たとえ簡単なかたちであれ、フランシスコ修道会の仕事の方法について明らかにする必要がある。

サアグンは、1529年に年齢30歳でヌエバ・エスパーニャに渡り、アステカ族の言語のナワトル語の勉強にとりくみ、それにめきんで精通するようになった。かれの目的は、福音の布教と密接つに関連していたが、ナワトル語で、インディオのもつ知識についての百科全書をつくり、それをもとに大きな辞典をつくるのに十分な語彙を手にいれることであった。1547年に、ナワトル語で文献資料を編集しはじめ、1578年までにその成果を、かれが予定していた辞典としてではなく、百科全書としてまとめあげた。その『ヌエバ・エスパーニャ全史』(Fr. Bernardino de Sahagún, Historia general de las cosas de Nueva España.) は12巻の本からなる記念碑的な業績であり、それは現在、古代のアステカ族の伝統を研究するための最上級の資料となっている。

研究の経過をみると、サアグン神父は、1558年から1561年のあいだに、テペブルコにおいて、インディオの古老の賢者から情報をあつめ、かれらの返答は、ナワトル語のまま編集され、今日、『最初の記録集』として知られている文献をうみ出した。この手稿記録は、スペイン語に翻訳されることはなく、サアグンがこの後さらに大規模、詳細な調査用紙を作成するのに利用された。トラテロルコにおいて別のインディオ情報提供者の力をかりながら、この質問紙により、ナワトル語のまま、きわめて詳細なことがらにまでおよぶ資料の収集が可能となり、それらはひとつ手稿にまとめ上げられた。これは、今日『マドリッド絵文書』の名で知られている。

この文書は二つの部分に分けられ、そのそれぞれが現在保管されている施設にちなんで、『スペイン王宮のマドリッド絵文書』と『王立歴史アカデミアのマドリッド絵文書』とよばれている。この資料は、再構成され、スペイン語に翻訳され、美しい絵のイラストがつけられ、1578年ごろメキシコ市において一つの文献にまとめあげられた。それはこんにち、イタリアのフィレンツェの図書館に所蔵されていることから『フローレンス絵文書』(Códice Florentino) とよばれている。

『フローレンス絵文書』の各頁は、二つのコラムにわけられており、右側のコラムは洗練された本式のナワトル語で書かれ、左側コラムには、スペイン語訳といくつかのイラストがのせられている。さらにこの文献には、序言と補注がつけられており、収集した資料にたいする、とりわけ、かれらが生活した複雑な世界について、サアグンの意見が明らかにされている。

サアグンの翻訳は、かならずしも正確というわけではなく、また全訳でもないというこ

とを明確にしておく必要がある。意識にありがちなことであるが、業績の本来的な価値が失われている。われわれ現在の歴史家は、1979年に国立公文書館によって作成された写真複写版によってナワトル語とサアグンのスペイン語訳のバイリンガルの原文テキストを入手する幸運に恵まれている。

古代ナウア族の学校教育の研究は、現在まで利用されてきたものよりもっとも正確な資料を基礎にしておこなわれるべきである、と私は考えた。アステカ族の学校教育についてのこうした詳細な研究を行うために、私はこうしたことに関心をもつすべての人と協力することを望み、私自身が適切であると信じるナワトル語の文献を選出し、書誌学的調査をし、翻訳をした。この本とほぼ同時に、メキシコ国立自治大学から『メヒカ族の教育：サアグン文書からのアンソロジー』という本が出版されるところである。そこでは、三つのコラムにわけて、42か所の章節の記述が紹介されている。その三つのコラムとは、それぞれ、「フィレンツェ絵文書」のナワトル語の原文、サアグン自身によるスペイン語訳、そして私による現代スペイン語訳である。ここではその中から、ナワトル語原文、サアグンの訳、そして注の大部分を省略して、10か所の章節の記述を選出した。

#### テルポチカリへの子どもの供託と受け入れの際の儀式的口上

第四章、ここでは、平民がその子どもをどのようにしてテルポチカリにあずけるか、またかれらを教育するためにそこではどのような習慣がみられたかが述べられる。

子どもが生まれると、親たちはそれを、カルメカク、あるいはテルポチカリにあずける。かれらをそこに提供するということは、その神殿に奉納としてささげることの意味している。トラマカスキ（カルメカクの生徒）としてカルメカクに、そしてテルポチトリ（テルポチカリの生徒）としてテルポチカリに。

子どもをテルポチカリにあずけ入れる場合には、（宴会のために）食事と飲み物を用意する。テルポチトラトケ（テルポチカリの教師たち）を招待し、会食しながら、懇願した。親たちはつぎのように述べた。

「わが主、トロケ・ナワケよ、主はここにあなた方を遣わして下された。わが主が、ひとつの首飾り、貴重な羽根、すなわち、子どもをお恵みくだされたこと、ここにあなた方は、聞き、知っている。事実、いまやすでに年が満ちたのだ。もうツボミの頃だ。赤ん坊であったかれらの手に、紡錘、機織り道具をにぎらせたのはずいぶん前のことです。

子どもはあなた方のものであり、尊い息子であり、尊いこどもです。われわれは、子どもを、ほかの尊い子どもたちとともに、あなたの力、あなたの保護のもとにゆだねます。なぜなら、あなた方が教え育ててくれるからです。あなた方が鷲と虎（兵士）にしてくれるからです。なぜなら、あなた方が、われらが父トラルテクチトリ神、われらが母トナティウ神のために、かれらを教育してくださるからです。いまやかれらを、ヨウアリ、エエカトル、トラカトル、テルポチトリ、ヤヨツィン、ティトラカウアン、テスカポリトカの名でよばれる神に捧げます。

わが主がかれらをお育てくだされますように。かれらがテルポチトリとなり、苦行の家、嘆きの家、涙の家たるテルポチカリで生活をするようになりますように供託いたします。鷺が、虎が生まれ育てられるところ、すなわち、わが主の財産がうみだされる場所に。そこで主が、鷺と虎のゴザ（軍事訓練）をお恵みくだされ、かれらにお示し下され、分けあたえくだされますように。そこで、わが主が、泣き、悲嘆にくれる者たちにお恵みを下されますように。そこで、ゴザと椅子（よき統治）、主がもっておられるもの、主の随員に差し向けるものをかれらにお示しくだされますように。

ところで、なんでわたしたちが泣きさけぶ者でありましょうか。なんでわたしたちが悲嘆にくれる者でありましょう。みずからの功績と、われわれの苦行によって、子どもたちが（世界を）みいだし、発展することになんてならないでしょう。なぜならわれわれは、みじめな老人、老女であるからです。どうかあなた方が子どもを受け入れて下さい、受けとりにきて下さい。子どもがついてゆき、教えられていること、教育されていること、高貴なこと、自分自身を、平民の息子を、ひよわな鷺、ひよわな虎であることを知りますように」。この演説口上にたいして教師たちが答える形式がここにある。それに答えるために、つぎのように述べたのである：

「おお！心を鎮めください。われわれはここに、わが主、トラカトル、テルポチトリ、ヨウアリ、エエカトル、ヤオツィンの名前を聞きました。あなたがたが懇願し、お祈りするのはかの主であり、あなたがたが、その首飾り、きれいな羽根、創造物（子ども）を手渡すのはかの方であります。なぜなら、われわれは、あなたがたが、わが主にゆだねたものを、ただ責務として受け取り、手にするだけだからです。かれの代わりにわれわれが聞いたのです。

主はなにをお望みくださるのでしょうか。かれ、わが主が、あなたがたの首飾り、きれいな羽根のために、お望みくださることはどのようなことでしょうか。なぜなら、実際のところ、われわれのような卑小なもの、みすばらしいものは、あいまい模糊に語るだけです。わが主、トラケ・ナワケ、ピルツィントリはなにをご用意くださっているのでしょうか。どのように、子どもたちは、（その運命を）着せられたのでしょうか。夜の時代（世界がはじまる前）に、なにが規定されていたのでしょうか。なにを着せられていたのでしょうか。生まれた時になにを負われてきたのでしょうか。かれの運命はどのようなものでしょう。また、どのような洗礼をうけたのか。ほんとうに、われわれ卑しき者は、それをむなしく予測しうるだけです。

でも、この地上において、だれが（べつの運命を）装うことができますでしょうか。あちらからわれわれは負わされてきたのであり、夜の時代（世界のはじまる前）からわれわれの特質はきめられているのです。

それに、子どもは、掃除をするために（神殿に）入るのであり、それを清潔にするために、物をあちこちに運ぶために、火をともすために入るのです。

どうか、わが主、ヨウアリ、エエカトルの恩寵がもたらされますように。そこでさまざまなことがさし示され、そこで自分の運命がどのようなものであるか、なにを身につけて



きているのか、どのように与えられてきたのか、夜の時代になにが着せられたのか、が明らかとなりますように。

たぶんそこでいまやわが主が、いまやそれを与えられるでしょう。あるいは、おそらくそれを失わせるでしょう。たぶん、それがわれわれの運命、われわれの真価だとするなら、きわめてわずかの時間のうちに、太陽が、子どもを生かしも殺しもするでしょう。

そしていまや、われわれは何を言うことができますでしょうか。どうしてあなたがたを慰められるでしょうか。われわれには「こうなりますよ」と言うことなどできますでしょうか。なるようになるでしょう。かれがそのようにさせるのです。かれ、わが主がそれを形成することでしょう。そのようになるのです。なにが生じるかは、まもなく明らかになるでしょう。子どもは、この地上で生きることでしょう。

それがわれわれの運命、われわれの真価だとするなら、子どもは、この地上で塵芥にまみれて生きることになるでしょう。他人の鍋、他人の楯に手をだすドロボウともなるでしょう。他人のスカート、他人のシャツ（女性問題）のせいで嘲笑されかもしれないし、不倫もしてかすことでしょう。おそらく、悲惨、苦悩、心痛につながる道にむかって歩いてゆくことでしょう。

われわれに何が教えられようか。なにを教育できるというのか。母なるもの、父なるものの言葉、声が忠実に伝えられればそれで十分です。われわれの心をそこに植えつけるために子どもの心の中に入りこむことなどできますでしょうか。またあなたも、首飾りの持ち主、きれいな羽根の持ち主も、そうすることはできないだろう。

そしていま、あなたがたは、祈り、涙、嘆きに身をおきつづけなさい。眠りにつこうとして願いを棄ててはなりません。トロケ・ナワケにおすがりしつづけなさい、かれは、なんらかのかたちで、われわれに配慮をし、お命じになるでしょう」。



テルポチカリに子どもをつれてゆく親たち（フローレンス絵文書 挿絵）

## テルポチカリでの仕事、苦行、踊り、等級、昇級

第五章は、テルポチカリにおける規則、生活し、しつけられ、教育される場所であるそこでどのように活動し、仕事をしたかについて述べる。

子どもがテルポチカリに入ると、かれらには掃除をし、灯明をあげることが命じられる。そののちに苦行がはじまる。

それから、夜には、他のものといっしょに生活をするところで歌をうたい、いっしょに踊った。「ほかのものといっしょに歌と踊りが取られた」と言われる。

まだ新入りなら、かれらを森につれてゆき、輪切りにした円筒状の木の幹を背おわせた。はじめは一本、つぎに二本と。こうしてかれを試してみた。子どもがすこし成長すると、おそらくもう戦場にゆくことができた。かれを戦場に連れてゆくが、まずは戦士のために楯をかつぐことから始める。

すでに若者となり、すでに教えをうけ、思慮分別があり、ことばづかいにも熟練し、とりわけ、信仰心が厚いとみられると、タチカウ（上級生）に任命され、ティアチカウの名称を与えられる。

青年前期となり、すでにじゅうぶんに教育を受けていると、テルポチトラトケ（テルポチカリの教師）と呼ばれ、若者を指導し、かれらすべてに語りかける。だれかが非行をおこなえば、かれがそれを裁く。審理し、判決し、裁きをくだす。

もし、オキチトリ（勇者）となる、すなわち4人の敵を捕虜としてとらえたなら、そのときには、トラカテカトル、トラコチカルカトル、クアウトラト（いずれも高位の軍事指導者職）に昇進した。またアチカウトリ（最高級者）の階級になると、それはいまやトピル、すなわち警吏ないし下級判事と同格であり、かれらだけが人々を逮捕し、牢獄に押し込めることができた。

これらはすべてテルポボクティン（テルポチカリの生徒）の階級、地位である。

こうした生活の形態は一部の者だけのものではなかった。それは生活の形態であり、ここでは、テルポボクティンとよばれる無数の若者が教育されていた。

テルポボクティンの生活は、けっしてきびしいものではなかった。子どもたちが小さいときは、そこテルポチカリでいっしょに寝て、そこにいっしょにいた。テルポチカリから姿をけし、そこで寝なかった時には、罰せられた。そして食事はそれぞれの家でした。

なにかするときはその場所に集合した。たとえば、（建設のために）粘土の塊をつくったり、壁、畑の畝、水路をつくったり。共同作業をしたり、わかれて仕事をした。森にゆき、いわゆる「歌のたいまつ」（歌の家のための薪）をあつめ、背にかついできた。

日没のころに作業をやめた。そのあと身なりをととのえ、盛装をする。まず入浴し、顔をのぞいて身体に色をぬる。そのあと首飾りをつける。

成年男子の年歳にたった者、ティアカウアン（軍事指導者）の階級の者は、きわめておおきな海産の貝の首飾り、あるいは金の首飾りを身につける。長い巻き貝の装身具を身につけ、革の装身具をまとう。そして顔に化粧をした。それは「厚く黒い汗でおおわれ

る」と表現された。赤土で化粧し、装身具をつける。耳飾り、トルコ石の耳飾りをつけ、サギの羽根飾りをつけ、「チャルカのアヤテ」（薄いマント）をつけた。

この「チャルカのアヤテ」は、小さな巻き貝をちりばめた網のように編み上げた糸でできていた。王の「チャルカのアヤテ」は、金製の小さな巻き貝がちりばめられていた。クアチクティン（勇敢な戦士）のチャルカのアヤテは「果物カゴ」とよばれた。なぜならそこからおおきな糸玉をたくさんたらしめていたからである。

太陽がしずむと、クイカカリ（歌の家）とよばれる建物に火がともされる。テルポチカリの若者たちは、かがり火をたく。暗くなると、歌がはじまる。すべてのものが、夜半まで踊りをおどる。

そのときは、だれもなにも身につけない。そのようにして踊る。すべてのものが「チャルカのアヤテ」だけを身にまとっていた。じっさいに、ほとんど裸にちかかった。

歌がおわると解散する。翌日も、その翌日も同じことがつづいた。かれらはいっしょにそれぞれの宿舎にもどる。そこ、テルポチカリの寮で寝る。

すでに成人となっており、「この世のことがら」をすでに知っているものは、そちら側で、愛人といっしょに寝た。

#### テルポチカリの生徒の飲酒への処罰。同棲、結婚。テルポチカリの生徒の中から選出されることのない役人について

第六章、ここではだれかテルポチカリの生徒が酒に酔っぱらった時の制裁と処罰について述べる。

テルポチカリでは教育がおこなわれ、清掃することにじゅうぶん注意がはられるので、だれもブルケ酒を飲まなかった。大人びた、すでに力づよかった者がうまくかくれてブルケを飲んだ。それは嚴重に秘密にされた。人々の目のあるところでは深酒はしなかった。おおいに秘密に気をつけながら、飲みすぎることをないようにした。

そして、だれか若者が酩酊しているのを見つけられたら、酔って道を歩いたり、寝そべったり、歌をうたっているのを見られたら、どこかでだれかといっしょに酔っぱらっているのを見つけられたら、すぐにこのことで集会が開かれ、それを処罰するための会合がもたれる。そしてこのことは恐怖をふくらませることになる。

もしそれがだれか平民であり、そのへんにいるだれかだとするなら、人々の前で打ちのめされる。こん棒でうち、うち殺す。あるいは、絞首刑にする。だが、貴族の場合には、非公開で絞首刑にした。

これらの若者は、二人ないし三人の愛人をもっていた。ひとりは家に、ほかの者ははなれたところにばらばらに。

そして、「テルポチカリの生徒が自立する」とときには、かれらを卒業させてくれるように、上級生にたいして、クアチトリというマントをお金のかわりにはらった。10着、金持ちの場合は20着と。

タチカウアン（最上級生にして教師）が同意をし、（学校をはなれる）許可をあたえ、「適齢期の若者」といわれると、一人の女性だけを妻とすることができ、それを家にむかえることになる。

教育を受けているテルポチトリは、自分のかつてな意思で、テルポチカリの仲間のもとを離れられない。そこテルポチカリにおいて年齢をかさねる。王の意思によって、それを命じられてはじめて、そこを卒業する。

テルポチカリにおいて、テクトリ（法務、軍事、行政の職務をはたす役人の称号で有給）となることもまれではない。そこでは、トラカテカトル、トラコチカルカトル、クアウトラト（いずれも高位の軍事指導者職）のみになることができた。そこからは、トラカテクトリもトラコチテクトリ（最高軍事指導者の地位）も生まれなかった、なぜなら、テルポチカリの生徒たちの生活は完全によいものではなく、その卒業生には、女性や肉欲を求めるものがおおく、あざけりの言葉、軽薄な言葉、遊び人の粗野な言葉をはいたり、声高に下品に話をする傾向があるからである。

#### カルメカクへの子どもの提供と受け入れの儀式と口上

第七章、王や貴族がその子どもをどのようにしてそこカルメカクにあずけたか、そこカルメカクを管理していた規則がどのようなものであったか、について述べる。

王や貴族は、あるいはカルプリに住むものであっても、その子弟をカルメカクにゆだね、提供する。

すべての貴族は、カルメカクの生徒であるトラマカスケ（供物をささげる者＝神官、カルメカクの生徒に入学した時から神官となると考えられた）となる、なぜなら教育の場、カルメカクにおいては、人は矯正され、教育されるからである。そこは階級的生活の場所、敬虔の場、知識の場、知恵の場、善良の場、美德の場、汚濁のない場所であった。トラマカスケの生活、カルメカクの教育には、非難されるべきことはなにもない。

王、貴族、テクトリ（高官）、あるいは金持ちの者は、その愛する息子をゆだねる誓いをする時には、飲み物と食事を用意する。トラマカスケを集めて、クアクアクイルティン（神官教師）を招待し、母親として、父親として、老人として会合をもつ。

老人が誓詞を述べ、トラマカスケにあいさつをする。つぎのように言う。

『おお、わが首長たちよ、おお、トラマカスケたちよ、あなたがたはここに臨席くださった。ここにその尊い足をはこんで下された。おそらくその足を捧ぎれや草にぶつけながら、おそらくその足をひねり、つまずきながら

わが主があながたをここにもたらししてくれた。あなたがたがここをお知り下さり、それをお聞き下される、実際に、一つの首飾り、貴重な緑の羽根（子どもの比喩）をゆだねることはわが主の喜びであることを。

われわれは夢みる。われわれはいそいで目を覚ます。実際のところ、子どもから、ほんの幼児からいったいどのようなものになるのでしょうか。もう赤ん坊ではないのですから、

紡錘、織機の道具をその手にあたえることはありません。なぜなら、この子は、あなたがたの尊い財産、尊い資産だからです。

いまわれわれは、テラカトル、トピルツィン、ケツアルコアトル、トリルポトニキの神に語りかける。子どもをカルメカクに、嘆きの家、涙の家、哀しみの家に入れましょう、そこ、わが首長たち、貴族たちが、教えをうけ、教育をされる場所に。

そこでは、トロケ・ナワケに懇願がなされる。そこではわが主の財産が受けいられる。そこで、かれには、たえまなく、さまざまなことがらが、なげき、涙、ため息とともに要求される。

そこで、わが主が人々を選抜してくだされる。そこで、かれが選んでくだされる。そこから、「その尊い家の場所」から。そこでは、そっと耳打ちされ、すすむべき道がしめされ、われわれの首長たち、貴族が教育される。そこで、わが息子は、わが主のために、清掃、清潔にころがけ、身を粉にして奉仕いたします。

われわれは、息子を、あなたがたの力のもとに、その尊い背中に、その庇護のもとにゆだねます。どうか、あなたがたの尊い心でかれをお許しください、われわれはあなたがたにわが息子をゆだねます。その尊い心でかれをお許しください。あなたがたはそうするためにここに来た。わが息子が、かれらについて行き、教えられている人たち、教育されている人たち、昼も夜も苦行を行ってている人々、その尊い肘、尊い膝を使って急いで歩く努力を怠らない人、わが主の名をよび、嘆願の叫びをあげている人々、涙をながし、苦しみをうったえ、ため息をもらしている人々の中にまじることが出来ますように。おお、トラマカスケたちよ、これが、あなたがたが知るべき、聞くべきことのすべてです』。

これにたいして、トラマカスケがそれに答える口上の形式がある。

『ここにわれわれは、尊い呼吸、あなたがたの尊い誓詞を聞き、たしかにうけとめた。われわれを買いかぶらないで下さい。われわれを尊敬にあたいるものと信じ、考えることはお止めください。ここに、あなたがたの尊い息吹、尊い誓詞がなされた、その首飾り、その貴重な緑の羽根ゆえに、あなたがたが心をくだかれるのは、もっともな理由のあることです。

われわれは、わが主、トピルツィン、ケツアルコアトル、トリルポトニキの名によってそれを承知しました。主は、あなたの首飾り、貴重な緑の羽根にどのようにお命じになることでしょうか。またあなたがたにどのような指示がなれるでしょうか。首飾り、貴重な緑の羽根はどのようになるでしょうか。

たしかに、われわれはぶしつけな言いかたしかできません。「主のお命じになるようにしかありません」。われわれは、わが主、トロケ・ナワケにすべてをゆだねます。主はあなたがたのためになにをご用意なされるか。われわれは大きな期待をいだいています』。

このあと、かれらは、子どもを神殿につれてゆく。両親は、紙とコパル香をもってゆく。王、貴族は、マシュトラトル（長マント）、マント、首飾り、すばらしい緑の羽根、緑色の宝石を奉納する。貧しい者たちは、小さな紙、香、イアウトリ（扇）をもってゆき、それらを奉納した。

子どもを神殿につれてゆくと、黒い墨をからだに塗り、墨で顔をまっ黒にした。そのあと、かれにトラコパトリ（薬草）の首飾りをつけさせる。貧しい者は、綿のそまつな糸の首飾りをさせる。そのあと、耳にきずをつける。神の像に子どもの血をふりかける。

もし子どもがあまりに小さければ、親がつれ帰る。もし尊い王の子弟であったなら、そこに首飾りをおいてゆく。その首飾りに、子どものトナリ（魂）が宿ると言われている。かれのトナリが苦行をするとされている。

もし子どもがかなり大きくなっているなら、すでにある程度の分別があるなら、かれをそこ神殿に残してゆく。トラマカスケがかれをうけ取る。そのあと、生活、カルメカクでの生活ぶり、そこで規則にかんするすべてのことをかれに知らしめる。

### カルメカクでの規則

第八章、かれらの生活の場であり、トレナマカケ（最高聖職者）とトラマカスケ（カルメカクの生徒）が教育される場であるカルメカクで遵守されるべき生活の形態について述べる。

第一のこと、そこカルメカクにおいて、すべてのトラマカスケが寝泊まりする。

第二、なんでもみんなでおこなう。夜明け前でも清掃をおこなう。

第三、日中に、すこし身体の大きいものは、刺をさがしにゆく。それは「刺を切る」と表現される。

第四、すでにトラマカストン（年少生）になっていたら、夜でさえも、真夜中であっても、森にゆくことをはじめ。薪をあつめ、丸太を背中にかつぐ。カルメカクで夜どおしで燃やして、トラマカスケはそれを寝ずの番をする。

もしある場所で（建設のために）粘土の塊、壁、耕地の畝、水路をつくる必要があるなら、夜であっても出かけてゆく。守衛の役をはたし、人びとに食べ物をあたえねばならない。グループで行動し、だれか欠けることがない。日々規律ある生活をする。

第五、仕事をおこたらず、その宗教的義務を、カルメカクの義務、苦行をしようになる。またすこし陽のあるうちに、あるいはたそがれどきには、「刺を切る」と言われる。かなり暗くなり、真っ暗になると、トラマカスケは「刺を並べる」と言われることをはじめ。

ひとりひとりとそれをおこなう。まず最初に水浴し、大きな巻き貝、さげ香炉、コパル香をつめた袋をもち、そしてたいまつをもつ。それから、刺を並べはじめる。はだかになる。

はげしい苦行をのぞむ者は、おそらくニレグアも遠くまで刺をあつめにゆく、森にも、平原にも、水辺にも。テイカトン（カルメカクの年少生徒）やかれの代理の者は、半レグアぐらいまで刺をあつめにゆく。生徒は、その大きな巻き貝を鳴らしながらゆく。そこに着いて、刺をさし、それを吹きながら帰ってくる。

第六、生徒はそこで寝泊まりした。ひとりひとり別のベッドで寝た。ざこ寝することは

なかった。

第七、食事はそこでみんないっしょにとった。そこでみんなと同じものを食べた。そして、もしだれかに自分の家から差し入れがあっても、自分だけのものとしてひとりで食べることはなかった。

第八、真夜中に、「夜が切り裂かれる」と言われるとき、みんな起きだして、お祈りをした。寝すごして（その義務を）おこたったものを処罰するためにみんなが集合する、耳、胸、下肢、むこうずねから血を流させる。こうしたことで恐怖が広まる効果をあげる。

第九、それからだれも高慢にならず、だれも恥知らずな行動をとることはなかった。規則正しく生活をしていて、もしある時、だれかがプルケ酒を飲んだり、あるいは女性におぼれたり、なにか重大なことをしてかしたことが露見したら、その者を逮捕した。同情はなかった。火あぶり刑か絞殺刑にされた、あるいは生きたまま焼かれ、あるいは弓で射殺された。軽い罪をおかした者には、耳、脳腹、下肢を刺あるいは骨で突いて血を流させた。

第十、このようにして、こどもたちは重大なあやまちを犯さないようにと教育されており、耳から血を流させ、イラクサでぶった。

第十一、真夜中に水をかぶり、上級生は水の中で水浴した。

第十二、断食の時には、みんながそれを守った。正午になると、すべての子どもたちが食事をした。断食の時には、「水のタマーレス（蒸しパン）を食べる」と表現され、なにも食べなかった。

あるものは、夜中まで食事をし、つぎの日の夜中まで断食をした。あるものは正午まで食事をし、つぎの日の正午に再び食事をした。また寝る前にはなんにも、水さえもとらなかった。もし食べたり、あるいは飲んだりすれば、断食は破られたといわれた。

第十三、上品な話し方がよく教えられた。品よく話さないと、人びとはかれにあいさつをせず、そのあと血をながさせる処罰をした。

第十四、かれらには、歌が、いわゆる「聖なる歌」がよく教えられた。本を読んだ。占いのしかた、夢占いの本、暦の本がよく教えられた。

第十五、性的自制、貞潔な生活はトラマカスケの誓願であった。どこでも女性には目をくれなかった。節制の誓願をたてた。だれもうそをつかなかった。神聖なことがらに没頭した。聖職者たちは神々にふかく敬意をはらっていた。

ここでは、トラマカスケの生活について語るのはこれで十分である。はなし足りないところもおおく残されているが、それは別の場で述べよう。

#### カルメカクとテルポチカリへの子どもの委託と受容の儀式

第三十九章、母親や父親が、その男の子や女の子を、あるていどの年齢になり、分別がついてくると、カルメカクにあずけて生活させることについて述べる。

子どもがゆりかごにいますとき、子どもを愛する者たちは、子どもが死んでしまわないことを願って、すぐに神殿に差し出し、そこに所属させるようにさせた。母親と父親は、こ

どもを、カルメカク、あるいはテルポチカリのどちらにあずけるかを決めた。

もし男の子をカルメカクにあずけるとしたら、トラマカスネにするために、罪を悔いた生活をさせるために、貞潔に生活させる、平静な、禁欲の生活をさせ、世俗の塵芥に目にする事がないようにさせるためにカルメカクにあずけるといわれる。

もし女の子なら、またつぎのように言われた。「シウアトラマカスネ（カルメカクの女生徒）となるために、イピ（神殿に仕える女性）となるために」。また禁欲の生活をし、世俗の塵芥にまみれないために、イチボクティン（女性教師）が見守るところで、彼女らとともに生活するように。イピたちは、カルメカクに所属して、監視されていたといわれる。生徒たちは家の中に収容されていた。

こうして子どもは神殿にあづけられ、委託された時には、祝宴がおこなわれ、食事や飲物が用意される。

もし男の子、あるいは女の子が、テルボクパン（テルポチカリの別名）に所属するときには、テルポチトラトケ（テルポチカリの教師）が招待された。飲み、食べ、じゅうぶん満足なもてなしを受けた。子どもたちをみずからの所有物とするために、きっぱりと、結婚の年齢にいたるまで、みずからの所有物として育てるために、子どもをあずかり、両腕でだきとめた。

こうして、子どもの下くちびるを傷つけそこに小さな穴をあけて、テルポチカリに所属することのしるしとされた。

テルポチカリに所属する女の子は、イチボクティアクアウ（テルポチカリの女性教師）とよばれる世話をする役目の女性たちの手にゆだねられた。

女の子はすこし大きくなると、歌の家で生活することになる。そして、モヨコヤという名をもつ、テスカポリトカの名をもつ、ヨアトルの名をもつ神に仕え、所属することになる。こうしてのちはじめて、その尊い父といっしょ、尊い母といっしょに生活する。

もし男の子がカルメカクに所属すれば、トラマカスネとなり、女の子の場合もまたその名でよばれる。シウアトラマカスネ（カルメカクの女生徒）となるときにもまた、食事と飲物を用意する。老人のトラマカスネ（神官）が招待される。その神職名はクアクイリとよばれる。かれらが招待される。

そしてかれらは、それをケツアルコアトルとよばれるトラマカスネ（神官）に知らせた。なぜなら、この人物は、人前には姿をみせず、威厳にみち、人々を震えあがらせ、神とみなされているからである。神殿と宮殿にだけ出入りしていた。

その後、かれらは女の子を神殿につれてゆく、そこにあずけ、そこに所属するものとさせ、その子をそこに提供する。かれらは、その子を受け取り、その腕にだく。その子をつれてゆき、トラマカスネたちが仕えているケツアルコアトルとよばれる神に紹介をする。つぎのように呼び掛ける。

『おお、トラカトル、おお、わが主よ、おお、トロケ・ナワケよ、ここにあなたの尊い尻尾、尊い翼である平民がここにいます。あなたの御前に、母、父が、娘をつれてきました、その子をささげるにまいりました、その子を寄進するためにまいりました。』



彼女をおましがえにならないように、なぜなら、その貧しき者は、あなたの尊い所有物であるからです。どうぞお納め下さい。あなたのためにここを掃除するでしょうし、あなたの尊い住居を、苦行の家、嘆きの家、涙の家を清潔にすることでしょう。そこで貴族の娘たちは、あなたの尊い腹、あなたの尊い首（聖なるものを持ちそれを体内にとどめていることの比喩）にその手をさしだすでしょう。そこであなたは名をよばれ、あなたは呼びかけられ、敬虔に祈りがささげられ、あなたの息、あなたの言葉が希求される。

どうかその娘たちにお恵みをくだされますように。彼女をお納めください。他の女の子のなかでも彼女にご配慮を。苦行をしている者たち、トラマカスケたち、（髪を）短くした娘たちの間にお含めください。

おお、トラカトル、おお、わが主よ、おお、トロケ・ナワケよ。あなたの尊い意思をその者に与えたまえ。あなたがその者に手渡すべきものを手渡して下さい。その娘に報いるべきものをもって」。

その後、彼女にしるしをつける、すでにある程度大きくなっているなら腰に切り傷をつける、胸に切り込みをつける。

まだほんの小さい女の子なら、ヤクアリ（数珠）の首飾りをかける。大きくなるまでヤクアリの首飾りをつけさせておく。

小さな子どもには、その尊い父親、尊い母親が、男の子、女の子を教育する。おおきくなると、男の子は、神殿に、カルメカクに、苦行の家に入る。女の子は、おおきくなると、またカルメカクに入る、そこにはイピ（女性神官教師）がおり、それを監視する。



ほらがいかが鳴っても起床しない者に水をかける（フローレンス絵文書 挿絵）

## 生徒の軍事的監視活動への参加

第四章、ここでは王（トラトアニ）が、夜間と日中をとわず、戦争のための準備をおこなうたような監視をしていたかを述べる。

王は、昼も夜も、都市を防御すること、軍事的警戒をおこなうことにおおいに留意していた。警備がじゅうぶんにおこなわれるように、ある時不意に敵によってメキシコ市が包囲されないように、敵の連合軍が形成されないように、民がしかけられないよう厳しい命令をだした。

王は、酩酊した者がないようにとおおいに警戒した。彼自身が、夜にたびたび街中を巡回してなされるべきことをみてまわった。おそらくトラマカスキ、ティアカカウ（上級生）は監視されなかった、おそらくすでにミシュトリ、トラパトル（ともに向精神性の薬草）、ブルケ酒を使用していた。

王は、すべての高位の軍人が、昼夜をとわず、敵国との国境で監視をするよう、部隊と戦場への道を整え、スパイを、すなわち、ひそかに入り込み民衆にちかづく者を捕らえるよう、厳しく命じていた。戦争の布告がいつなされてもいいような時には、急いでその配下の要人に軍事的警戒の準備をするように呼びかけた。

もしスパイが捕らえられると、それを見せしめのために死刑とし、撲殺した。もし敵のスパイがメヒカ人と知り合いとなり、その家に宿泊するようになると、見せしめとして、その家の住人、その子どもも死刑にされた。かれらの財産は没収され、その家は取り壊される。

また王は、昼も夜も、なに者かが突然に市を攻撃することのないように、敵が接近することがないようにと、市の内部が監視されるよう厳重に命令していた。王と民衆がいっしょに行動するために、王は、テルポチカリの教師、上級生、そしてすべてのテルポチカリにたいし、毎日夜には、歌をうたい踊りをする命じていた。メキシコ市をとりまくすべての都市に聞こえるように、王もメヒカ人も眠っていないことを聞かせるために。

夜がふけてくると、テノチカ人（テノチティトラン人）、トラテロルコ人、その他の近隣の人びとのトラマカスケが笛を吹き、木製の太鼓を打ちならした。トラマカスケたちが、それぞれ苦行を行うためにさまざまな場所に、あらゆる丘の頂上に出かけてゆくときに。このようにしてだれか不審なものにであったなら注意をうながした。夜明けごろにもどってくる。こうした夜毎に、監視をしているのである。

おおきな宮殿、政治の場所では、また夜どおし警戒がなされ、王のすまい、裁判所、政庁、貴族役人の家、参謀本部、隊長の家、歌の家、招待所、市のすべての要人たちの住居、カルメカク、各カルプーリの集会所、さまざまな場所にあるテルポチカリ、各地区に松の木の下にたいまつが焚かれていた。このようにして警戒をしていた。テルポチカリの生徒は合宿していた。だれも自分の家で寝なかった。テルポチカリの生徒の義務は、街中の警戒をするために、森にでかけて薪をあつめ、警戒をするために毎夜それを燃やし、火を焚くことであった。

## 丘の上でのカルメカクの生徒の苦行

トレナマカケ（高位聖職者）、トラマカスケは、暗くなると出かけていった、それは「すでに、ふたたび吹奏楽器が鳴らされた」という言いかたをされた。

最初に、神の像のまえで、刺で、マゲイの刺で血を流した。つぎに、ひとりひとりでかけた。はだかであった。ただヤクアリをいっぱい詰めた、ヒモでしばった袋だけをもっていった。これはススと混ぜ合わせた噛みタバコである。それを噛みながらいった。

それぞれは、手に香炉をもち、運んでゆくみちすじに煙をなびかせる。コパル香と松の小枝をはこぶための小さい袋をもち、腕にはそれぞれの供物の枝、血まみれの刺、そしてホラガイ、吹奏の楽器をもっていった。大雨であろうと、凍るような夜でもでかけてゆく。そこに、すなわち、苦行をし、供物をささげる丘の上に着くと、火をたき、供物の枝を、血まみれの刺を置く。

メヒコに、真夜中にホラガイが鳴りわたるのを聞く。

メヒコに真夜中にホラガイが吹き鳴らされると、つづいて、あちこちでトラマカスケたち、苦行者たちが、供物をささげる丘の上で、そのホラガイを鳴らす。

そのあともどる。それぞれのほらがいを鳴らしながら。夜明けのころにはカルメカクにもどってくる。



自己犠牲で下肢から血をながす若者（フローレンス絵文書 挿絵）



inixguichucanij, maceoalucanij,  
 inucacahcanij, inucapigunij,  
 auh inhatzotzonquij, inveve  
 gonquij, teponaco, teponacapanij,  
 ucucato, ucucanguij, ucucatzquij,  
 yoa in mapipiguanij, auh in taia  
 anguij, in teiacanani, mitotiani,  
 motlagujtotiani, Hamoidouhquij,  
 tozcaucucuechoanij, tocuilechoanij,  
 tlacacoleanij: mochiehoan in tech  
 povia, in techacia, in mijo: ix  
 pampa viñ, illaqualtzin, in tla  
 qualteeth, in quateucujilli, xoco  
 tamalli, tenextamalli, tezamalli,  
 tlazimucijth, tamalteeth, vei tlaqualli,  
 quauhtlaqualli, tlaxcalmijmijli,  
 tlacualpacholli, tlacuo, cuapalli, tlax  
 calcotzthi, totolquijmijli, tamal  
 mijmijli, tamalatl, tamalucucueh  
 th, papamixtlacalli, papaijan,  
 tlaxcalpacholli, nacatlacuo. Auh  
 iniquac otlatzin, mocontlatzi  
 huij maceoaltzthi, nijman quicala  
 quiaia, quijlatiaia, in vme su  
 chiquavith: auh iquac occentlamā  
 th, ie quixip tlacotiaia, quijchi  
 chioia, canno suchiquavith: ie  
 hoath tlacotiaia, quijlatiaia, quij  
 tecavidaia: ie cactimomanaia, cac  
 tuezia Hamatrimomana in alte

## 5. 征服の前と後

ベルナルディーノ・デ・サアグン

### 〔テキストの解説〕

これまでの章において、サアグンの記念碑的プロジェクトの一部をみてきた。われわれは、すでにサアグンがインディオ情報提供者から得た言葉をスペイン語に翻訳したものを読んできた。しかし、いまだサアグン本人の言葉、本人の意見を知らない。この章ではそれにふれる。

かれの思いは苦々しいものである。旧来の宗教の残存、期待をよせていた若者の無軌道ぶり、さまざまな慣習の衰退、インディオの教育にたいするスペイン人の反感、疫病によるヌエバ・エスパーニャの人口の減少は、この部分で書かれている1536年1月6日から1576年までつづいたサンタ・クルス・デ・トラテロルコ学院に関連した仕事についてかれに深く考えさせている。それは、40年間にもおよぶ教育、インディオの改宗、道徳の向上に心血をそそいだ仕事であった。それは、ヌエバ・エスパーニャにおけるの影響力のある錚々たる名士たちの反感をうけながらも、征服の荒波のなかで消えさった古いインディオたちの学校にも匹敵するあらたな教育機関にその活路を見いだすことに期待をもっていた一人の老人の厭世的な視線である。この地の悪習の影響に染まったその異教徒たちは、厳格な公教育に活路を見いだしていた。かれらの機関に浸透していた偶像崇拝の要素を排除しながら、それをまねることが必要であった。

われわれはまた、このフランシスコ会士の言葉のなかに、異質な信仰を突然に押しつけられることによってひき起こされた家庭の分裂の痛ましいイメージを見いだすことができる。自分たちお父親、自分たちの民衆にたいして襲いかかる狂信的な若者の集団の出現を。かれらにたいしてサアグン修道士は、福音伝道者としての、自らを真実の所有者であると信ずる者の、不寛容な者のもつ冷淡さをもって語っている。これはサアグンの悲しむべき側面である。しかし、それはこの人物の不可分の部分である。

テキストは『ヌエバ・エスパーニャ全史』(Bernardino de Sahagún, Historia general de las cosas de las Nueva España.) [1979年 メキシコ ポルア出版社] の版の第10巻第27章からとられた。

注) 以下に引用されている章については、この著作を抄訳編集した、サアグン 篠原愛人、染田秀藤 訳『神々とのたたかい I』(アンソロジー新世界の挑戦 第9巻 岩波書店 1992年)においてすでに邦訳がなされている。すぐれた翻訳と思われるのでここではその訳(144～158頁)にしたがう。

メキシコの先住民が異教を奉じていた時代に具えていた才能や技能、また彼らが美德あるいは悪徳とみなしたものについて書いてきたから、彼らがその後、今日まで身に着けた技能、美德、悪徳に触れておくのもあながち筋違いではないと思える。

最初の点に関しては、先住民がスペイン人の工芸技術を見よう見真似で修得し、うまく使いこなしているのを、私たちは経験上知っている。例えば、測量の知識を要する技能、つまり建築の技能を彼らはスペイン人と同じように理解し、実践している。左官、石工、大工、洋服の仕立て、靴作り、生糸作り、印刷工、書記、教師、出納係、単旋律聖歌や複旋律聖歌の楽士などの技術もそうであり、フルート、ブラジョレット、サックバット、トランペット、オルガンの演奏や、ラテン語文法、論理学、修辞学、星占術、神学の知識でもスペイン人にひけを取らない。私たちは、以上のいずれの分野でも優秀で、それらを習い、知識として身につけ、人にも教えていることを経験から知っている。彼らが覚えきれない、使いこなせない技芸などないのである。

その昔、彼らは国の統治や神々への奉仕といった点で、いま以上の能力があったが、それは彼らが人々の必要に応じて統治に当たっていたからである。そのため、子供は男女とも成人するまできわめて厳格にしつけられた。しかも親元でしつけたのではない。というのは、各家庭で子供をしつけるほどの力が親にはなかったため、熱心で厳しい教師の下で、男女別々に、共同で教育したのである。そこでは、いかに神々を崇拝し、国や統治者を尊び、忠節を尽くすべきかが教えられた。教師に従わず、教師を敬わない者を懲らしめるため厳しい罰則があった。特に、50歳になるまではオクトリ酒を飲まないよう細心の注意が払われた。彼らは昼も夜も次から次へと任務を課され、厳格きわまりないしつけを受けた。そのため、男も女も精力があり余ったり、みだらな欲望に支配されることがなかった。神殿で暮らす者は、昼夜を問わず次々と仕事があり、自らも節制を積んだので、みだらなことまで頭が回らなかった。兵役についている者は、先住民間の争いが絶えないため、停戦になることも、戦場での任務がなくなることも稀なほどであった。

この統治法は、自然および道徳の理に見事に適ったものであった。というのは、ここは豊饒温暖の地であり、当地を支配する星座のせいもあって、人間の性質と邪惡、かつ怠惰で、邪欲に耽るようになりやすいからである。道徳の理を通じて先住民は、経験的に、道徳に即した高潔な生き方をするには厳格さと真面目さが、また国のためにひたむきにつくことが必要であることを学んだ。スペイン人の到来によってこの美風が消えたため、またスペイン人は先住民のもっていた統治のしきたりや作法を根絶し、葬り去り、彼らを野蛮な偶像崇拝者であるときめつけ、聖俗両面で彼らにスペイン人の生活様式を押し付けてきたため、彼らの統治法はすっかり廃れてしまった。確かに、偶像崇拝に関わりのあった遺物や建造物は、一つ残らず、また、偶像崇拝の儀礼や儀式と渾然一体となっていた国のしきたりも、根絶する必要があった。すなわち、統治に使われたこの国のしきたりのほとんどすべてが、偶像崇拝と関わっていたために、何から何まで打ち壊し、偶像崇拝のかけ

らさえ残らない、これまでとは異なる文明的生活（を送る能力）を身に着けさせることが必要であった。

しかし、この新しい文明的生活によって育てられた者も性格や素行が悪く、そのために神からも人からも憎まれる存在となっており、しかもそのために彼らが大病を患い、短命に終わることが分かったいま、何らかの手段を講じる必要がある。だれが見ても、この第一原因は飲酒である。かつて飲み騒ぎは死罪という厳罰があり、今でも鞭打ちや虎刈りの刑、一年あるいは数か月の奴隷化という処罰があるものの、いずれも飲酒を止めさせられるほどの罰則ではない。この悪習を止めるよう説教師が口を酸っぱく説き、地獄の話で脅しても、一向に改まらない。彼らの泥酔ぶりは常軌を逸しており、国にとっても、飲み騒ぐ者たちの健康や救済にも有害無益である。飲み過ぎて多くの人が死に、酔っ払って殺しあい、罵りあい、暴力を振るいあう。飲酒は国を乱すもとにもなっている。国を治める者は、（酒を飲んで）自分の顔に泥を塗り、面目をつぶし、仕事の上で失態を演じ、その職に相応しくないと見なされる。さらに、飲酒癖があれば、司祭職にも不適格と判断される。これは、司祭に必要とされる節制、つまり貞潔を守るのが、特に酒飲みには難しいからである。

最初は先住民を聖職者に養成する試みも行われた。その当時、彼らが教会の諸々の事柄を理解し、聖職者として生きてゆくのに適しているだろうと、私たちには思えたからである。そこで、聖フランシスコ修道会の僧侶がインディオの若者二人に与えられた。当時（修道院）いた者の中で、彼らが（修道士になるには）最適で、最も俗世に染まっておらず、カトリック信仰の教えを自分の村の人たちに熱心に説いていたからである。二人が私たちの僧侶を着て、私たちの聖フランシスコ会の徳を見につけ、それまでどおりの情熱をもって教えを説けば、人びとの靈魂に大きな実を結ばせるだろうと思われた。ところが、僧侶を与え、聖なる宗教の事柄を彼らに教えようとした矢先に、彼らがその身分にふさわしくないことを見せつけられたため、彼らから僧侶を取り上げた。以来この方、インディオは修道会に受け入れられず、司祭職に不適格と見なされている。

当時、修道士はまだ先住民の言葉を知らなかったもので、清純で、適任と思えるインディオに教理を精いっぱい教え込み、修道士のいるところで、そのインディオたちが人びとに説教するようにした。しかし、修道士が言葉を修得して自ら説教し始めると、インディオたちには説教させなくなった。彼らは悪質で、修道士の前では純真な正直者を装っているが、実際はそうではないことが分かったからである。彼らはこういう芝居が実にうまい。私はこの国の先住民の欠点や支離滅裂ぶりにもさほど驚かない。というのは、当地に住むスペイン人も、そしてこの国に生まれたスペイン人はいかにもインディオそのもので、見かけはスペイン人のようでも性質は違う。本国生まれのスペイン人でもよほど気を付けないと、この土地にきてほんの数年でまったく人が変わってしまう。思うに、これは当地の風土あるいは星座のせいである。しかし、私たちが大いに恥じ入るべきことがある。賢明博学なインディオの長老たちはこの土地が住人たちに植え付ける害悪に対処する術を心得ており、自然（の力）を克服するための修行を積んで、自然に立ち向かったのに対し、私

私たちはと言えば悪い傾向に流されるがままである。確かにこの土地ではスペイン人でもインディオでも、御しがたい人たちが育つ。父親も母親も、この土地が生み出す邪習や情欲から子供たちを引き離すだけの力を持っていない。かつてこの先住民が自分の息子や娘を国に託して育て、親任せにできなかったのは当を得ていた。もし、そのころの統治法が偶像崇拜の儀礼や迷信に汚染されていなければ、きわめて有効な方法であったと私には思われる。その偶像崇拜的要素をすっかり洗い落とし、根底からキリスト教に即した統治法に変えて、それをこのインディオとスペイン人の国に導入すれば、どちらの国からも巨悪を取り除き、統治者の手間は大いに省かれることになるであろう。しかし、今では（修道院付属の）学校で教えられている子供たちも私たちの手に負えなくなった。それは、かつては子供たちが抱いていた恐れや抑圧がなくなったために、また彼らが異教を奉じていた頃のように私たちも子供を厳格に厳しくしつけていないために、彼らは、以前に長老たちの下で教えられたようには命令に従わず、自ら学ぼうとせず、教わったことも身に着けないからである。

かつてこれらの国においては子供は男女とも神殿で育てられ、しつけられ、神々の崇拜や国への忠節を教え込まれていたことが分かって、最初は私たちもその方法に習い、子供たちを修道院で育て、そこに隣接する専用の建物に寄宿させた。そこでは真夜中に起床すること、聖母への朝課を唱えること、夜が明けてから時課を唱えること、さらには夜に自らの体を鞭打ち、黙禱を捧げることも教えてきた。しかし、以前と違って彼らは肉体労働をしなくなったこと、抑えがたい情欲が起こる年ごろになったこと、かつて自分たちの国で食べていたのより良い食事をとるようになったこと、そして私たちが彼らに対して分け隔てなく優しさと慈悲をもって接したことなどが理由で、彼らは性に目覚めるようになり、淫らなことを知り始めた。そこで、私たちは彼らを修道院から追い出し、両親の家で寝起きさせ、朝、学校へ来て読み書きや歌を習わせるようにし、今もそのようしている。しかし、この習慣も少しずつ弛緩してきており、読み書き、歌を自ら進んで教えることに誇りと熱意をもつ人が彼らの中にはほとんどいない。私たち自身がその任に当たらねば、修道院付属の学校でさえ、読み書きや歌唱や音楽を正しく教えられる人はいない。ほとんど何もかもが凋落の一途を辿っている。

女性についても試してみた。つまり、偶像を崇拜していた頃には神殿で仕え、貞操を守る女性たちの尼僧院があったので、彼女たちがキリスト教に帰依して修道女になり、終生、純潔を守る適性を具えているか調べたのである。そのために尼僧院や女性信徒の会が作られ、宗教上の教育が彼女らに施され、多くの女性が読み書きを覚えた。そこで、私たちの目からみても、信仰の教えを十分に受け良識のある年配に婦人をほかの女性の上長とし、女性たちを管理させ、キリスト教の事柄や良い習慣の諸々を教えさせようとした。確かに、当初、私たちは先住民の男性は司祭や修道士に、女性は修道女になれるだろうと考えていたが、期待はずれに終わった。経験して分かったのだが、そのころの彼らにそのような完璧さは望むべくもなかった。こうして、当初目指した先住民の信者の会も修道院も頓挫し、いまでもこの計画は実現の目処も立っていない。



やはり最初の頃、修道士が常駐している Cholula や Huehuetzingo などヌエバ・エスパニャのいくつかの町で、次のような措置が講じられた。結婚するものは修道院のすぐ近くに自分たちだけの村を作り、そこに住み、毎日、修道院へミサに与かりに通い、（修道士たちは）彼らにキリストの教えや夫婦の共同生活の仕方を説くようにした。これは、彼らが、両親と接しておれば感染しかねない偶像崇拜などの悪習に染まるのを防ぐ、効果的な手段であった。しかし、これも長続きしなかった。というのは、彼らは大部分の修道士を見事に欺き、偶像崇拜はその祭儀、祭礼とも完全に忘れ去られ、忌み嫌われたと思ひ込ませた。修道士はみな先住民がみな洗礼に与かって、真の神の僕になったのだから、さほど偶像崇拜に過敏になる必要はないと考えたほどであった。ところが、これは全くの嘘であった。その後これまで、私たちがはっきり確認したように、偶像崇拜、飲酒癖など、諸々の邪習の滓はたまり、止まるところをしらない。先述の方策が当初のとおり進められておれば、また実際に実施された場所は少なかったが、もし至る所でそれが行われ、かつ今日まで継続されておれば、この問題はもっと改善されていたであろうが、今となってはほとんど手の施しようがない。

洗礼を受けていながら多数の妻をもつ者を（キリスト教式に）結婚させる際に、法が定める正妻と妻合わせるのに、私たちはかなりの苦勞と困惑を経験した。親族関係を調べ最初の妻を割り出し、その女性と結婚させようとしたが、私たちは複雑な迷路に紛れ込んだのである。彼らはだれが最初の妻か言を左右し、一番気に入りの女性と結婚しようと嘘八百を並べ立てたからである。かつては正妻を娶る際、儀式が行われたが、だれとその式を挙げて結婚したかを知るには、彼らが異教徒だった頃の偶像崇拜の儀式や祭礼を調べ回り、熟知しておく必要があった。それに、当初と私たちも言葉がよく分からなかったので、いま理解しているほどに正しく見抜くことはほとんどできなかった。また、告解や聖体拝領など結婚以外の秘跡についても、正当な手順を踏んで行うにはかなりの困難を経験し、いまなお、これらの秘跡を正しい手順で受ける人はごく限られている。そのような状況に私たちは辟易し、彼らがキリスト教をいかに自分のものにしていないか思い知らされている。

最初の頃、私たちが学校で育てた（貴族の）子供たちや、教会の中庭で教えを受けていた（平民の）子供たちが、よく私たちの手助けをしてくれた。私たちは旧来の方法に従い、有力者の子供たちを私たちの学校で読み書きや歌を教える一方、平民の子供たちには中庭でキリスト教の教理を説き授けたのである。平民の子供たちは大勢集まり、教えられてしばらくすると、1、2名の修道士がその子供たちを連れて神殿に登り、ほんの数日で神殿を打ち壊した。こうして、短時間で神殿はことごとく、跡形もないほど破壊され、偶像を祀った礼拝用の建物もやはり破壊された。神殿の破壊という点では平民の子供たちがおいに貢献したが、修道院で教育された（貴族の）子供たちは、夜間に行われた偶像崇拜の儀礼や、偶像のために夜ひそかに催されてした酒宴や歌舞の根絶という点で大いに助けとなった。彼らは昼の間に、夜どこでそのような催しがあるのか偵察し、暗くなってから頃合いを見計らい、修道院に寄宿する子供たち60人から100人が、1、2名の修道士と出掛

けた。そして、彼らは、偶像崇拜、酒宴、祭などを催している人たちに気づかれぬように不意を襲って一網打尽にし、縄を掛けて修道院へ連れていった。そこで処罰を加え、罪滅ぼしをさせ、キリストの教えを説いた。彼らが自分の行いを反省するまで数週間にわたり、真夜中に朝課に行かせ、自らの体に鞭打たせたが、それは二度と同じ過ちを犯させないためであった。捕らえられた者は公教要理を教わり、懲らしめを受けてから修道院を出た。彼らを教訓として、ほかの者は同じような真似はしようとせず、たとえしても、すぐ農にはまり、上で述べたように罰せられたのである。

私たちのもとで育てられている子供たちに一般の民衆が抱いた恐れは計り知れず、何日も経たぬうちに、夜に祭や酒宴が催されるとき、子供たちについてゆくことも、彼らを大勢派遣することも必要ではなくなった。10人あるいは20人の子供を派遣すれば、彼らは相手が100人であれ、200人であれ、祭や酒盛りの場に居合わせた者を一人残らず捕まえ、罪を償わすべく、修道院に連行してきた。こうして、偶像崇拜の諸々が破壊されると、偶像崇拜や酒宴や祭を人前で堂々とする者はいなくなった。そして、彼らが世俗の祝い事で宴を張ったり親戚や友達を食事に招待したいときには、修道士の許可を得て行ったが、彼らはまず偶像崇拜は無論、神を冒瀆することは一切行わないと誓言した。

それ以来この方、罰に当たることは何一つあからさまには行われなくなったため、修道士も偶像崇拜の摘発にそれほど熱心ではなくなった。一般の民衆も最初こそ戦々競々としていたが、修道院で育てられていた子供たちが修道院に寄宿するのをやめ、両親の家で寝起きするようになってからは、民衆の怯えも消え失せた。そうになると、偶像崇拜や酒宴を目にし、分かっても、子供たちは言いつけようとはしない。それに、修道士が人を修道院に監禁、処罰することは、罪の如何を問わず禁じられた。こうして、彼らは歌いたいときに歌い、酔いたいときに酔っ払い、好きなように祭を催し、偶像を崇拜していた頃に親しんでいた古い頌歌を歌った。彼らの歌と分かりにくく、歌詞の意味はだれにも理解できなかった。中には彼らがキリスト教に改宗してから作られた歌もあり、神や聖人たちのことを歌っていても、誤謬や邪説が無数に含まれている。また、踊りや歌舞の場で、古くからの迷信や偶像崇拜の儀礼がたびたび、とくにそれを分かっている人がいないところで行われている。とりわけ、商人たちが催す祭や接待や宴会では、それが常態になっている。この状況は今も続き、日増しに悪くなり、対策を講じようとする人もいない。実情を分かっている人は少なく、分かっている人も口に出そうとはしないから、飲酒の問題は日々悪化の一途を辿っている。また、今の罰し方ではこの問題を解決することにならず、むしろ助長するものである。

私たちの修道院で初期に育てられた子供の中には、実の親が洗礼を受けた後も偶像崇拜を続けていることを私たちに打ち明け、それをもとに私たちが親を罰したために、親に殺されたり、ひどく折檻された子供たちがいたのは、紛れもない事実である。今でも、咎めや罰を受けるべきことが行われているとの知らせを受け、それを非難する説教をすると、問題の人物が、非難された件をだれが知らせたのか調べ始め、ほとんど例外なく探り当て、人知れず、陰険にひどい制裁を加える有様である。密告者の私的賦役を重たくしたり、被

害を受けた人が文句も言えず、手の施しようのない嫌がらせをするのである。彼らは私たちにこっそり不平を漏らす、これ以上の害を被らないよう、話すことは一切口外せぬよう頼んでから文句を言う。こうして私たちも口をつぐみ、神自らが解決なさるよう神に任せなければならない。

この国に信仰を植え付けるに当たって、私たちがラテン語を教えた人たちが大いに助けとなり、光明となったし、今でもそうである。ここの先住民たちは、文字や記号を何一つもっておらず、読み書きもできなかった。意思の疎通は図や絵で行ない、自分たちの昔のことはすべて、またそれに関する本も模様や図を使って描かれていた。このようにして、スペイン人が来る1000年以上も前に自分たちの祖先が行い、史書に記したことを彼らは知り、記憶していたのである。これらの本や絵文書の大半は、偶像が破壊されたとき、同時に燃やされた。しかし、隠されて残ったものも少なくなく、私たちもそれらを目にしたことがあるし、今でも保管されている絵文書があり、それらによって私たちは昔の事柄を理解したのである。

すでに述べたとおり、信仰の種を播くためにこの国にやって来てすぐ、私たちは子供を修道院に集め、彼らに読み書きや歌を教え始めたところ、結果は上々だったので、次にラテン語文法を学ばせようとした。その実施に当たって、メシコ市にあるトラテロルコのサイティアゴ地区に学校を建て、近隣のすべての村、すべての地方からもっとも優秀で、読み書きも一番できる子供たちが同校に選抜された。彼らは学校で寝食をともにし、外出することは減多になかった。噂を聞いて、一般のスペイン人やほかの聖職者たちは、こんな無能な人々にだれもラテン語文法を教えられはしないだろうと嘲り、笑った。ところが、教えて2、3年もすると、彼らは文法事項をすべて理解し、ラテン語を話し、理解し、文を書き始めた。それどころか（六歩格の）英雄詩さえ作るようになった。実際にそれを目の当たりにして、どうしてそのようなことが可能だったのかと、聖俗両界を問わず、スペイン人はみな一様に驚いた。最初の4年間、彼らと苦勞をともにし、ラテン語に関する全般的な知識を伝授したのは、ほかでもないこの私である。ラテン語教育が順調に進み、彼らにもっと能力が具わっていることが分かると、一般人も聖職者もこぞってこの事業に反対し、止めさせようと異を唱え始めた。私はその場に立ち会って、一部始終を知っており、学院のインディオに教えた身であるから、反対派の持ち出した反対理由やそれに対する反論を包み隠さず言える。

反対派の主張は以下のようなものであった。彼らは司祭になれないのだから、ラテン語を教えて何になるのか。ラテン語教育は先住民を異端に走らせる危険がある。また、彼らが聖書を読めば、聖書をどのように理解するであろうか。聖書に出てくる古代イスラエルの族長たちは、慣習に従って、多くの妻を持っていたので、私たちが彼らに、教会立ち会いのもとで結婚し、妻は一人だけにするよう、いくら説いても、彼らは聞く耳を持たないのではないか。この類の反対意見がほかにも出されたが、私たちはそれに次のように答えた。先住民が司祭になれないと仮定しても、彼らがどの程度の能力をもっているのかを把握しておきたい。それが経験的に分かれば、彼らが秘めている才能を証明できるであろう

し、彼らの能力に応じて正しいと思えることがしてやれるであろう。彼らはわたしたちとさほど変わらないのであるから。また、彼らが異端になるきっかけを私たちが与えているという意見に対しては、こう答えた。私たちはそれと正反対のこと、つまり、彼らが信仰の事柄をよりよく理解できるようにすることを目指しているのであり、彼らは信仰心の篤い君主に服従しているので、何かことがあっても、いくらでも手の施しようがある。妻の問題については、一夫多妻という旧習に我らが贖い主が講じた矯正法が福音書の中にあるので、みなはその矯正法（の効用）を信じねばならない。つまり、通常に説教するのと同じように説教することである。彼らがこれを聞き入れなければ、異端者として罰すべきである。そうするだけの権限を私たちは教会法上、世俗法上も持っているのであるから。この件を巡って議論百出であったが、ここで一々取り上げていては冗漫になってしまうであろう。

サンタ・クルス学院はもう40年以上の歴史があり、学院生は神に対しても、教会に対しても、国王に対しても、彼らの国にたいしても、何一つ後ろめたいことはしていない。それどころか、我らが聖なるカトリックの教えの弘布、護持という点で、これまでも、また今も、彼らは大いに助けてくれている。先住民の言語で著された説教集、聖書注解、教理集のうち、公にでき、異端の疑いが一点もないのは、学院生の助けを得て作られたものである。彼らはラテン語に精通しているので、（ナワトル語の）適切な単語や表現法を私たちに示唆してくれるし、私たちが説教で話したことや教理集に書いたことで不適切な言い回しがあれば訂正してくれる。先住民の言葉に翻訳せねばならないものはどんなものでも、かれらと一緒に吟味しないと欠陥なしではすまないし、ラテン語でも、ロマンス語でも、先住民の言葉でも、適切な文が書けない。正しく綴り、きれいな字で書くことにおいて、この学院で育ったものの右に出るものはいない。

修道士たちは10年以上も学院生たちに教え、生活をともにし、学院で順守すべき風紀やしきたりを教えた。学院生の中には講義する者や学院を運営する手腕を具えていそうな者もいたので、修道士たちが規約を作り、学院の運営を学院生に任そうと考えて学院長と評議員を選び、20年以上も講義と運営を彼らに一任していた。その間に、学院の運営も秩序も地に墜ちてしまった。責任の一端は学院の責任者であったスペイン人の財務管理者に、もう一端は学院長や評議員の怠慢や不注意にある。また、修道士も不注意のそしりを逃れ得ない。修道士は事態の推移に注意を怠り、すべてを台なしにしてしまった。学院設立から40年経って、実情を調べ直して初めて、学院運営が破綻していることが分かったため、学院を建て直すにはもう一度思い切った処置を取り、最初の規約に手を加え、新しいものを作る必要があった。その旨は新しい規約にも盛り込まれている。私は同学院の設立にも立ち会い、設立以上に困難を極めた改革の場にも居合わせた。今を去る31年前に流行した疫病が学院に大打撃を与えたことがあったが、今回の1576年の疫病もそれに劣らぬ打撃を与えた。いまや学院にはほとんど人がいない。死んだり、病気になって、ほとんど全員が学院から出て行ってしまったのである。

私は、これまでの努力が水泡に帰するのではないかと大きな不安を抱いている。という

のも一つには、彼らが強情で学習に向いていないからである。いま一つには、彼らの向上に必要な努力を払うことに修道士は嫌気がさしているからである。また、世俗の人々の中にも、聖職者の中にも、一トミンでも援助してやろうとする人がいないからである。ヌエバ・エスパーニャの初代副王を努めた、今は亡きアントニオ・デ・メンドサ殿（在任 1535-1550 年）が身銭を切って、彼らがわずかながらも収入源を与えて下さり、そのおかげで少数の学院生がどうにか生活しているが、もしそれがなければ、学院や学院生もはや人々の記憶に残っていないだろう。（もし全面的に援助しておれば）インディオの国全体に大いなる施しをしたことになっていたであろうし、この国における陛下の家臣の人口は今日の、また将来のそれを上回っていたことであろう。先住民は減る一方だからである。その原因は、私がこの目で確かめたところ、今を去る30年前の疫病では、瀉血や適当な薬の処方ができる者がいなかったためで、大半はそれで死に、餓死する者も出た。今回の疫病でも同じことが起こったし、これからも疫病が発生するたびに、先住民が絶滅するまで、同じことが繰り返されるであろう。そして、もし、このインディオにラテン語文法、論理学、博物学、医学を教えるように配慮し、気遣っておれば、死んだ者の中にも命を取りとめていたものが多いたであろう。というのは、当メキシコ市で私たちが自分自身の目で確かめているように、あらかじめ適切な瀉血の治療を受けている者は回復しており、そうでない者は死んでいるからである。この治療法を心得ているスペイン人の医者や瀉血医は数少ないので、援助できたのはわずかであった。瀉血医も医者も疲労困憊し、病床に伏し、亡くなった人もいる。もはや、あわれなインディオの援助に駆け付けることができる者さえおらず、インディオは治療も救助の手も差し伸べられないまま死んでゆくのである。

※なお、ここでサアグンの述べているインディオへのラテン語教育のころみ、トラテロルコ学院については、

斉藤泰雄 「16世紀スペイン領メキシコのサンタ・クルス・デ・トラテロルコ」  
——新大陸最初の高等教育の実験——」

国立教育研究所『研究集録』第10号 1985年 pp.53-66

がある。

# アステカ文化・アステカ教育関係文献一覧

( 本研究および関連の研究において収集したもの )

- Berdan F.F. & Rieff Anawalt, p.: The Codex Mendoza. 4 Vol.  
University of California Press USA 1992
- Cabrera, Luiz: Diccionario de Aztequismos.  
(アステカ関係用語辞典)  
Oasis México 1988
- Caso, Antonio: The Aztecs: people of the sun.  
University of Oklahoma Press USA 1958
- Chávez, Ezequiel A.: La Educación en México en la Epoca Precortesiana.  
(先スペイン期のメキシコの教育)  
Jus. México 1958
- Davies, Nigel: The Aztec Empire.  
University of Oklahoma Press USA 1987
- Díaz Infante, F.: La Educación de los Aztecas.  
(アステカ族の教育)  
Panorama México 1982
- Durán, Diego: Historia de las indias de Nueva España e islas de la Tierra Firme.  
(インディアスのヌエバ・エスパーニャとティエラ・フィルメ諸島の歴史)  
Porrúa México 1984
- Escalante, Pablo: Educación e Ideología en el México Antiguo.  
(古代メキシコの教育とイデオロギー)  
Secretaria de Educación Pública. México 1985
- Gutierrez Solana, N.: Codices de México.  
(メキシコの絵文書)  
Panorama México 1992
- Hassing, Ross: Aztec Warfare: imperial expansion and political control.  
University of Oklahoma Press USA 1988
- Kobayashi, José María: La Educación como Conquista.  
(征服としての教育)  
El Colegio de México México 1985
- Kurt Ross (ed.): Codex Mendoza: Aztec Manuscript.  
Liber Spain 1978/1984
- Larroyo, Francisco : Historia Comparada de la Educación en México.  
(メキシコ比較教育史)  
Porrúa México 1988

- López Austin, A.: La Educación Mexica: Antología de text sahguntinos.  
(メヒカ族の教育; サアグン文書からの抜粋)  
UNAM México 1985
- León-Portilla, M.: Historia y cultura de México prehispánico.  
(先スペイン期の歴史と文化)  
Secretaría de Relaciones Exteriores México 1990
- León-Portilla, M.: Los Antiguos Mexicanos.  
Fondo de Cultura Económica. México 1961  
ミゲル・レオン＝ポルティエーヤ、山崎真次訳『古代のメキシコ人』  
早稲田大学出版 1985年
- León-Portilla, M.: The Aztec Image of Self and Society.  
University of Utah Press USA 1992
- León-Portilla, M.: Aztec Thought and Culture.  
University of Oklahoma Press USA 1963
- León-Portilla, M.: Toltecayotl: aspectos de la cultura náhuatl.  
(トルテカヨトル; ナワトル文化の諸側面)  
Fondo de Cultura Económica. México 1980
- López Austin, A.: La Educación de los Antiguos Nahuas. 2 Volumes.  
(古代ナウア族の教育)  
Secretaría de Educación Pública. México 1985
- Lucena Salmoral, Manuel: Así vivían los aztecas.  
(アステカ族はどのように生きていた)  
Anaya España 1992
- Mendieta, Gerónimo de : Historia eclesiástica indiana.  
(インディア教会史)  
Porrúa México 1980
- Ordeño, Jacinto: La Educación precolonial de Indoamerica.  
(植民地時代以前のインドアメリカの教育)  
Universidad Nacional Costa Rica 1992
- Sahagún, Bernardino de : Historia general de las cosas de Nueva España.  
(ヌエバ・エスパーニャ全史)  
Porrúa México 4 tomos 1981
- Soustelle, Jacques: The Daily Life of the Aztecs.  
Pelican Book UK 1961
- Sten, María: Codices of Mexico.  
Panorama México 1987
- Vázquez, Josefina Zoraida et. al.: Historia de la Educación en México.  
(メキシコ教育の歴史)  
Secretaría de Educación Pública. México 1985

- 狩野千秋 『マヤとアステカ』 近藤出版社 1983年
- 国本伊代 他 『概説メキシコ史』 有斐閣選書 1984年
- サアグン(篠原愛人、染田秀藤 訳)『神々とのたたかい I』  
(アンソロジー新世界の挑戦 9) 岩波書店 1992年
- ジャック・スーステル(狩野千秋訳)『アステカ文明』白水社文庫クセジュ 1988年
- セルジュ・グリュジンスキ(落合一泰 訳)『アステカ王国』 創元社 1992年
- ソリタ(小池 訳)『ヌエバ・エスパーニャ報告書』  
(大航海時代叢書) 岩波書店 1987年
- 高山智博 『アステカ文明の謎』 講談社現代新書 1979年
- ベルナール・ディーアス・デル・カスティーリョ(小林一宏 訳)『メキシコ征服記』  
(大航海時代叢書) 岩波書店 1987年
- 増田義郎 『古代アステカ帝国』 中公新書 1963年
- 増田義郎 『インディオ文明の興亡』(世界の歴史 7) 講談社 1977年
- 皆川卓三『ラテンアメリカ教育史 I』  
(世界教育史体系17) 講談社 1975年
- メキシコ大学院大学編(村江四郎 訳)『メキシコの歴史』 新潮選書 1978年
- モトリニア(小林一宏 訳)『ヌエバ・エスパーニャ布教史』  
(大航海時代叢書) 岩波書店 1979年
- 斉藤泰雄「16世紀スペイン領メキシコのサンタ・クルス・デ・トラテロルコ学院」  
国立教育研究所『研究集録』第10号 1985年 pp.53-66
- 斉藤泰雄「ラテンアメリカ教育史の原像」  
国立教育研究所『研究集録』第28号 1994年 pp.33-45



古代インディオ文明における育児習俗と教育  
——先スペイン期アステカ族教育関係史料集——

平成7年3月

〒153 東京都目黒区下目黒6-5-22

国立教育研究所

科学研究費 一般研究(C)

研究代表者 斉藤 泰雄

印刷者 島崎印刷株式会社

95120048

研究代表者  
寄贈編入乙